

茨城県笠間市

行者遺跡

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会
(有)毛野考古学研究所

茨城県笠間市

行者遺跡

県営畠地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会
(有)毛野考古学研究所



行者遺跡全景（東から）



調査区全景（写真左下が南）

序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畠地帯総合整備事業に伴う行者遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、径20~17mの円墳5基からなる墓域と弥生時代後期~奈良・平安時代の集落跡や中世後半代と考えられる堀跡が確認されました。また1・2号墳周溝からは円筒埴輪、馬形の形象埴輪片が出土し、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成23年3月

笠間市教育委員会

教育長 飯 島 勇

例　　言

1. 本書は、茨城県笠間市小原地区に所在する行者遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営畠地帯総合整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査による記録保存を目的として実施された。
3. 調査及び報告書作成は、笠間市教育委員会の指導・委託を受けて、(有)毛野考古学研究所が実施した。
4. 遺跡の所在地、調査期間、調査面積は以下の通りである。

所在地　笠間市小原2299番地外

調査面積　4.683m²

調査期間　平成21年11月30日～平成22年3月25日

整理期間　平成22年7月27日～平成23年3月15日

5. 調査・整理担当者、執筆分担は以下の通りである。

上生 朗治 (調査、執筆: 第I章第2節、第II～III章、IV章第1節、第3～5節、第V章)

賀来 孝代 (整理、執筆: 第IV章第2節 1・2号墳・埴輪)

宮田 和男 (調査、執筆: 第IV章第1節 6・7号住居)

小出 琢磨 (調査、図面) 以上 ((有)毛野考古学研究所)

6. 調査で得られた資料は笠間市教育委員会で保管している。

7. 調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。

能島清光 川崎純徳 枝川永男 斎藤弘道 井博幸 秋元陽光 鈴木素行 太田博之 榎村宣行

内山敏行 田中 裕 佐々木義則 稲田健一 茨城県教育委員会 茨城県県央農林事務所

小原地区土地改良組合 芳野工業株式会社 JT空撮

8. 本書の作成にあたっては、加藤陽子、仙波津美、高橋真弓、鬼山由子、根本正子、門脇美知子の協力を得た。

9. 発掘調査参加者は以下の通りである。

飯田博美、飯田昭、石浦千景、岩田時彦、枝川幸光、小坂部克己、鬼沢 煙、小山義則、川又誠二、北村 稔、佐藤武志、佐藤としえ、佐藤利男、塩畑勝利、仙波由美子、高岡真士、高田幸江、

瀧江 稔、豊島英則、仲田仙、中林理智、中村伊重、根矢 稔、長谷川とめ子、土生悠里、吹野昇、松本修児、武藤瑞良、山口致辰、横田忠利、吉田 豊

凡　　例

1. 出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。

S I ・・ 堪穴住居跡 M ・・ 古墳 SK ・・ 土坑 SD ・・ 溝 P ・・ ピット K ・・ 掘乱

2. 実測図で使用した縮尺は以下の通りである。

堪穴住居跡・・ 1/60、1/80 古墳・・ 1/80、1/100 土坑・井戸・地下式坑・・ 1/60
溝・・ 1/60、1/100

3. 遺構図中のスクリーントーンは以下の通りである。

粘土の範囲

焼土の範囲

目 次

序

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の方法と基本層序	7
第1節 調査の方法	7
第2節 基本層序	7
第Ⅳ章 遺構と遺物	8
第1節 堪穴住居跡	8
第2節 古墳	34
第3節 土坑・井戸・地下式坑	82
第4節 堀跡・溝跡・盛土遺構	84
第5節 遺構外遺物	95
第Ⅴ章 総括	98

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	2	第38図 1号墳出土遺物実測図(7)	49
第2図 調査地区の位置図	3	第39図 1号墳出土遺物実測図(8)	52
第3図 遺構全体図	5・6	第40図 1号墳出土遺物実測図(9)	53
第4図 基本土層図	7	第41図 2号墳 遺物出土状況図(1)	56
第5図 1号住居跡	8	第42図 2号墳 墳丘実測図(1)	57・58
第6図 2号住居跡(1)	10	第43図 2号墳 墳丘実測図(2)	59・60
第7図 2号住居跡(2)	11	第44図 2号墳 遺物出土状況図(2)	61
第8図 3号住居跡(1)	12	第45図 2号墳 遺物出土状況図(3)	62
第9図 3号住居跡(2)	13	第46図 2号墳 遺物出土状況図(4)	63
第10図 4号住居跡	14	第47図 2号墳出土遺物実測図(1)	64
第11図 5号住居跡(1)	16	第48図 2号墳出土遺物実測図(2)	65
第12図 5号住居跡(2)	17	第49図 2号墳出土遺物実測図(3)	66
第13図 6号住居跡	18	第50図 2号墳出土遺物実測図(4)	67
第14図 7号住居跡(1)	20	第51図 2号墳出土遺物実測図(5)	68
第15図 7号住居跡(2)	21	第52図 2号墳出土遺物実測図(6)	69
第16図 8号住居跡	22	第53図 1号墳 墳輪配置図	72
第17図 9号住居跡	24	第54図 2号墳 墳輪配置図	73
第18図 10号住居跡(1)	25	第55図 1号土坑出土遺物実測図	74・
第19図 10号住居跡(2)	26	第56図 3号墳出土遺物	75
第20図 11号住居跡(1)	28	第57図 3号墳	77・78
第21図 11号住居跡出土遺物(2)	29	第58図 4号墳	79
第22図 11号住居跡出土遺物(3)	30	第59図 5号墳	80
第23図 11号住居跡出土遺物(4)	31	第60図 土坑	81
第24図 11号住居跡出土遺物(5)	33	第61図 井戸	82
第25図 1号墳 墳丘実測図(1)	35・36	第62図 1号地下式坑	83
第26図 1号墳 墳丘実測図(2)	37	第63図 1号堀(1)・3号溝	85
第27図 1号墳 遺物出土状況図(1)	38	第64図 1号堀(2)・3号溝	86
第28図 1号墳 遺物出土状況図(2)	39	第65図 1号堀(3)	87
第29図 1号墳 遺物出土状況図(3)	40	第66図 1号堀出土遺物	88
第30図 1号墳 遺物出土状況図(4)	41	第67図 2・6号溝	90
第31図 1号墳出土土器写真	42	第68図 4号溝	91
第32図 1号墳出土遺物実測図(1)	43	第69図 4号溝出土遺物	92
第33図 1号墳出土遺物実測図(2)	44	第70図 5号溝	93
第34図 1号墳出土遺物実測図(3)	45	第71図 盛り土遺構	94
第35図 1号墳出土遺物実測図(4)	46	第72図 遺構外出土遺物(1)	95
第36図 1号墳出土遺物実測図(5)	47	第73図 遺構外出土遺物(2)	96
第37図 1号墳出土遺物実測図(6)	48		

表 目 次

表1	1号住居跡出土遺物観察表	9	表18	2号墳出土遺物観察表(3)	63
表2	2号住居跡出土遺物観察表	9・11	表19	2号墳出土遺物観察表(4)	70
表3	3号住居跡出土遺物観察表	13	表20	2号墳出土遺物観察表(5)	71
表4	4号住居跡出土遺物観察表	14	表21	1号土坑出土遺物観察表	74
表5	5号住居跡出土遺物観察表	15	表22	3号墳出土遺物観察表	76
表6	6号住居跡出土遺物観察表	19	表23	4号墳出土遺物観察表	76
表7	7号住居跡出土遺物観察表	19・21	表24	5号墳出土遺物観察表	79
表8	8号住居跡出土遺物観察表	23	表25	土坑一覧表	82
表9	10号住居跡出土遺物観察表	26・27	表26	井戸一覧表	84
表10	11号住居跡出土遺物観察表	27・32・33	表27	溝一覧表	84
表11	1号墳出土遺物観察表(1)	42	表28	1号墳出土遺物観察表	88・89
表12	1号墳出土遺物観察表(2)	42	表29	1号堀斜面部ピット一覧表	89
表13	1号墳出土遺物観察表(3)	50	表30	2号溝出土遺物観察表	92
表14	1号墳出土遺物観察表(4)	51	表31	4号溝出土遺物観察表	92
表15	1号墳出土遺物観察表(5)	54	表32	盛り土造構出土遺物観察表	95
表16	2号墳出土遺物観察表(1)	56	表33	遺構外出土遺物観察表	97
表17	2号墳出土遺物観察表(2)	56			

写真図版目次

PL.1	全景、1・2・3号住居跡	PL.16	1号墳埴輪
PL.2	3・4・5・6・7号住居跡	PL.17	1号墳埴輪
PL.3	8・10・11号住居跡	PL.18	1号墳埴輪
PL.4	11号住居跡、1号墳	PL.19	1号墳埴輪
PL.5	1号墳	PL.20	1号墳埴輪、1号土坑埴輪、2号墳埴輪
PL.6	2号墳	PL.21	2号墳埴輪
PL.7	3・5号墳、1・4号土坑、1～3号井戸	PL.22	2号墳埴輪
PL.8	1号地下式坑、1号堀、盛り土造構	PL.23	2号墳埴輪
PL.9	2～5号住居跡出土遺物	PL.24	2号墳埴輪
PL.10	5～10号住居跡出土遺物	PL.25	2号墳埴輪
PL.11	11号住居跡出土遺物	PL.26	2号墳埴輪
PL.12	1号埴輪	PL.27	2号埴輪
PL.13	1号埴輪	PL.28	3号墳出土遺物、1号掘出土遺物、遺構外 遺物、炭化種子、金属製品、石器
PL.14	1号埴輪		
PL.15	1号埴輪		

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

畑地帯総合整備事業は、農業に伴う道路・灌漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、反収の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また、農業生産基盤の整備の一環として、平成13年に小原地区土地改良組合が設立され、茨城県の指導の下、効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成15年に三本松遺跡の発掘調査、平成16・17年に小原遺跡の発掘調査、さらに平成20年に塙谷遺跡・長峰東遺跡・長峰西遺跡の発掘調査が行われ、多くな成果が得られている。

今回の整備事業計画地は行者遺跡の範囲内であることから、笠間市教育委員会は平成21年度に笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏に試掘調査を依頼した。その結果トレンチから古墳や住居跡が確認され、出土遺物などから古墳時代を主体とした集落があることが推定された。

工事主体者である県央農林事務所は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受け、笠間市教育委員会は入札により有限会社毛野考古学研究所と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・県央農林事務所・有限会社毛野考古学研究所は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏を指導委員として平成21年11月30日から平成22年3月25日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

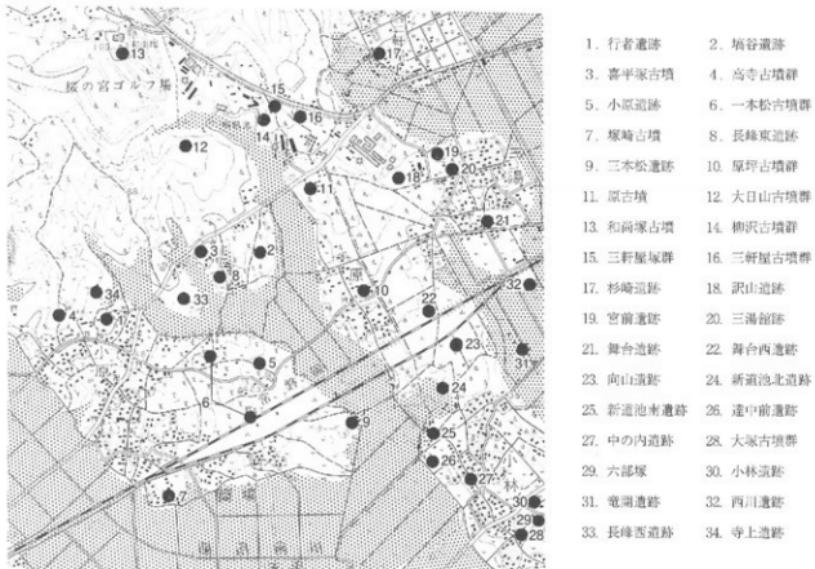
平成21年12月10日から重機による表土除去作業を開始する。17日から人力による遺構確認作業を実施し、1・2号古墳の周濠を確認する。遺構確認作業と並行して古墳の周濠やマウンドにトレンチによる掘り込みを行う。その他に、古墳周濠を3か所、住居跡11か所、堀1条と溝跡6条を確認する。重機による表土除去作業は平成22年1月8日に終了し、13日には方眼杭打ちを行う。25日には堅穴住居跡の掘り込み作業を開始する。1月末には、1・2号墳以外の古墳周濠の掘り込みを終了し、2月からは、堅穴住居跡とともに土坑や溝、井戸の調査を開始する。1号墳は17日に掘り込みを開始し、21日にはほぼ完掘する。その後堅穴住居跡の調査に力を注ぎ、3月8日に調査はほぼ終了する。15日に空撮を行う。17日から各遺構の掘り方調査を行い、24日には現地におけるすべての調査を終了する。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

笠間市小原地区は、笠間市域東部の旧友部地区にある。北部には八溝山系から続く標高100m前後の丘陵地帯を背負い、南部には涸沼前川の形成した低地帯が広がっている。涸沼前川は、上流に遡れば、笠間市上市原付近、下流になると涸沼を通じて、大洗町で太平洋と繋がっている。地形的には東西の交通ルートの結節点となっており、現在は国道50号が北側山間部を通り、南側低地部には常磐線が通っている。

小原地区北部の丘陵は全体に南に向かって低くなっている。行者遺跡はその丘陵の末端の傾斜が緩やかになった台地上にある。台地は北側を小支谷によって開析されて、東方向に舌状に張り出している。行者遺跡の東側には谷津があり、谷津は北方向に向かって深く入り込んでいる。行者遺跡は小原集落の中心にある小原神社からは北北西方向にあたり、宅地と畑・山林の境界線付近で、現況は畑地と竹林が密生して茂る荒蕪地となっている。



第1図 遺跡の位置と周辺の道路分布図 (1: 25,000)

第2節 歴史的環境

小原地区は、これまで高寺古墳群や一本松古墳群、中世小原城跡の存在が知られている。近年小原地区で行われている発掘調査は、三本松遺跡から始まり、小原遺跡、塙谷遺跡、長峰東遺跡、長峰西遺跡と広範囲大規模に行われ、弥生時代から、古墳時代前期・中期・後期、奈良・平安時代の各集落遺跡を主体にして、古墳時代の方形周溝墓や古墳、平安期の骨蔵容器、中世の堀や地下式坑等各時代の多くの遺構・遺物が発見されている。それらの成果から、小原地区的丘陵や台地上には、旧石器時代以来の人々の生活の跡が残り、貴重な歴史的文化財が残っていることが分かってきた。

旧石器時代では、長峰西遺跡から珪質頁岩製のナイフ形石器が出土している。塙谷遺跡では数十点の石刀と石核1点、不定形洞片が集中するユニットが確認されている。

縄文時代では、小原地区の遺跡においては、遺構・遺物がたいへん少ない。長峰東遺跡で、前期の開山式土器が、長峰西遺跡で、早期の無文土器・前期中葉・中期後半・後期前半～中葉の時期の遺物が出土している。塙谷遺跡で、前期の住居跡が1軒確認されている。

弥生時代では、後期後半の時期に堅穴住居跡の数が非常に多くなる点が注目される。三本松遺跡で15軒、小原遺跡で2軒、平成19年度の塙谷遺跡C地点で10軒、塙谷遺跡A・B地点では約60軒、長峰東遺跡で9



第2図 調査地区の位置図 (1:2,500)

軒、長峰西遺跡で7軒である。本遺跡を含めて弥生時代後期後半の住居軒数は県内でも有数と見られ、弥生時代後期後半から終末期にいたる生活の詳しいようすが窺える。

古墳時代では、長峰東遺跡で弥生時代終末期の土器との関わりが窺えるような遺物や竪穴住居跡が見られる。古墳時代前期の時期は塙谷遺跡に住居数が多く、方形周溝墓も造られている。古墳時代後期には三本松遺跡や小原遺跡、長峰西遺跡等に広がりが見られる。この時期は後期古墳の造成が盛んな時期に対応しているものと思われる。

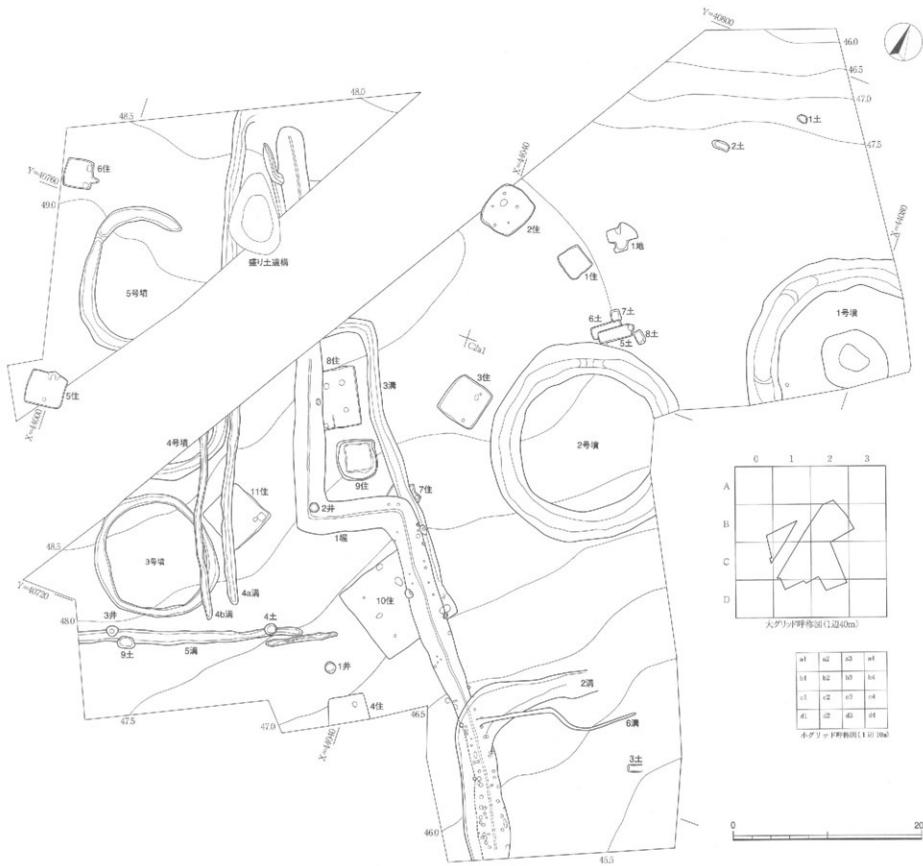
古墳群は、一本松古墳群、高寺古墳群があげられる。一本松古墳群には、直径約53mの大型墳の山工塚古墳がある。埴輪を持つ時期の古墳は、高寺古墳群で、台地上からの丘陵斜面地にかけて8~9基確認されている。そのうち高寺2号墳は、周溝内径推定25mの円墳と見られる。既調査墳で、花崗岩の割石積の横穴式石室を持ち、墳丘南東部から武人埴輪が3体分その他に羽形、2条3段の円筒埴輪が少量出土している。石室内からは、玉類、刀や鎌などの鉄製品が出土している。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は、発掘調査が行われた近隣遺跡すべてにおいて確認されており、いずれも奈良時代後半頃から急激に竪穴住居跡の数を増し、9世紀~10世紀にかけて集落が継続しているようすが窺える。

中世のこの地区は、戦国期の城跡と伝えられる小原城が本遺跡の南南西約1kmの位置にある。小原城は16世紀の初め頃、里見氏の居城として造られ戦国末期には激しい攻防の後、佐竹氏に滅ぼされている。

参考文献

- 井 博幸 1980『杉崎コロニー古墳群』日本古衆史研究所
井 博幸 2007「牛伏古墳群の検討—出土・採集埴輪の概観を中心にして—」
井 博幸 2009「行方市兜塚古墳の研究」『斐良岐考古』第31号、斐良岐考古同人会
井上義安 1995『茨城町東山塙房古墳』茨城町史編さん委員会
井上義安 1995『木戸北屋敷古墳』
江船良大 1995「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書 原山口遺跡Ⅲ」茨城県教育財团文化財調査報告第94集、財团法人茨城県教育財团
人賀 雅 2010『長峰西遺跡』笠間市教育委員会
川西宏幸 1978『川西古墳概論』『考古学報』64-2 日本考古学会
真吹 啓 1976『高寺2号墳』西茨城郡友部町教育委員会
白石真理 1989『埴輪』『小佛北川遺跡調査報告書』茨城町教育委員会
早川 畏 2003『三本松遺跡』友部町三本松遺跡発掘調査会
広瀬和雄 1992『前方後円墳の畿内編』『前方後円墳集成 畿内編』山川出版社
古田 寿 2005『小原遺跡』友部町小原遺跡発掘調査会



第3図 遺構全体図

第Ⅲ章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として行われた。畑地帯整備事業にかかる行者遺跡の調査範囲は、試掘調査によって標高45~48mの台地上の4.683haの面積の範囲にある。行者遺跡の遺構の測量は、世界測地系第Ⅷ系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標上で、調査範囲外側の北西角のX軸43960、Y軸40840を起点として、南方向と東方向に40mおきにグリッドラインを設定し、交差したマス目に第3図にあるようにA0からD2までグリッド名をふり、さらにその中を10mごとに分けた小グリッドとしてa1~d4までの呼称で遺構の位置を示した。

調査は表土削削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

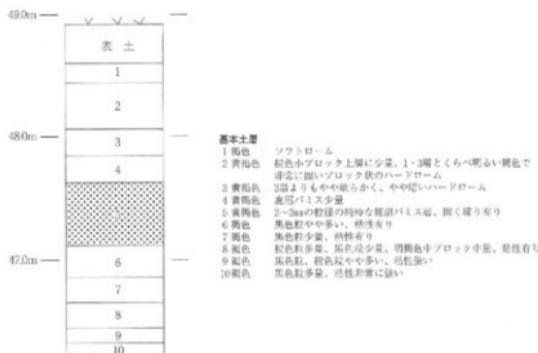
遺構の記録は1/20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、1/10、1/20、1/40縮尺を使用した。遺跡全測図は1/200で作成した。

写真撮影は、白黒35mm判、リバーサル35mm判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に隨時行った。

第2節 基本層序

調査区の中央部標高48.9m地点で、中世の堀跡の断面を利用して記録した。表土は黒褐色の耕作上層で、表土直下の1層はソフトロームの褐色土層で、遺構の確認面は1層上面である。2層以下4層までは黄褐色のハードローム層である。

5層は2~3mm径の鹿沼バミス純層で、6~8層は再び褐色ローム層で粘性がある。9~10層にかけてはさらに粘性が強い褐色粘質土層である。



第4図 基本土層図

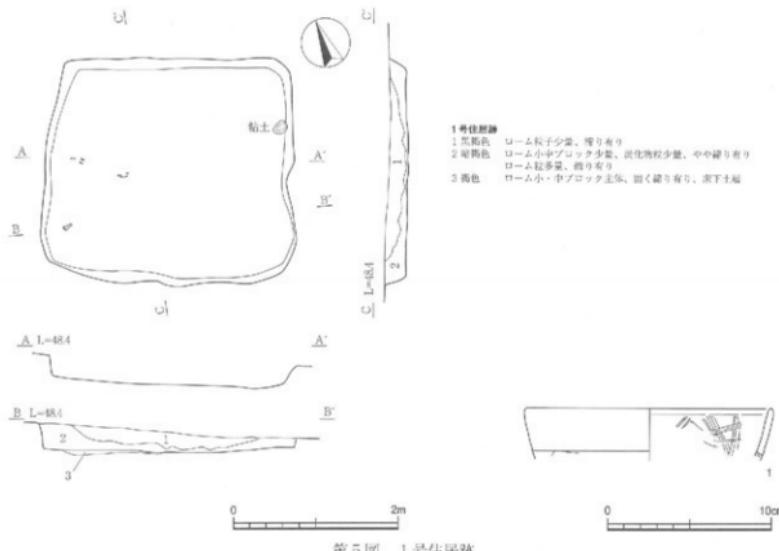
第IV章 遺構と遺物

第1節 壊穴住居跡

壊穴住居跡は、調査区内から11軒確認されている。それぞれ時期は、弥生時代1軒、古墳時代前期～中期5軒、奈良・平安時代3軒、不明2軒である。

1号住居跡（第5図）

位置 調査区の東部B2c1～2、B2d1～2グリッドにある。 **規模と平面形** 2.77m×3.11mの長方形。
主軸方向 N-63°-W **壁** 壁高は約30cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 床面は中央部が木根の小斑状の擾乱により壊されている。残存している部分の床は、ほぼ平坦で全体に強い硬化は見られない。 **ピット**—**炉**—**覆土** 大きく2層に分かれる。上層は黒褐色土で、下層はロームブロックや炭化物を含んだ層で、いずれも縛りがある。 **遺物** 住居跡西部の覆土下層から炭化材片が、東壁際北寄りで15cm大の粘土塊が出土している。土器は、覆土中から小片で、古墳時代の土師器環の口縁部が出土している。
所見 出土遺物が少なく時期の特定が難しい。1点小片で出土した土師器と周囲にある古墳時代の集落や古墳との関連、床面からの炭化材片の出土を併せて考えれば古墳時代の小型の壊穴遺構の可能性が考えられ、小型の壊穴で遺物がほとんど出土していないこと、地下式坑が隣接してあること等から中世の方形壊穴の可能性も考えられる。



第5図 1号住居跡

表1 1号住居跡出土遺物観察表

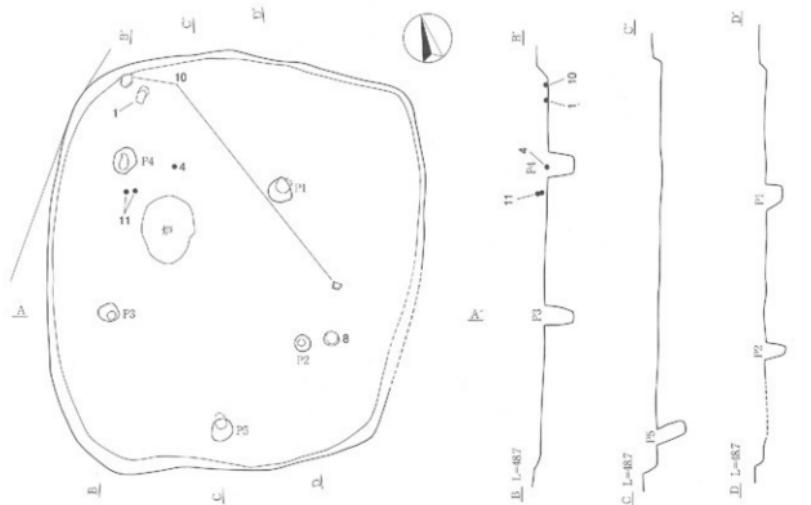
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	(15.0) — —	口縁部破片。内面艶なミガキ、口縁端部ヨコナギ。	瓦石、石英微粒	良好	灰褐色	

2号住居跡 (第6・7図)

位置 調査区の北部B1c1~2、B1d1~d2グリッドにある。規格と平面形 5.13m×4.59mの長方形。主軸方向 N-20°-E 壁 壁高は約22cm、外傾して立ち上がる。床 明瞭な硬化面を持たない。ピット 5か所、P1~4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。ピットの覆土は地山に近いローム。炉 住居跡中央部やや西寄りの位置にあり、ほぼ平坦で火床部の焼土化が弱い。規模は長径0.81m、短径0.65mではほぼ平坦。覆土 環境の下層堆積は地山ロームの色に近い褐色土で締りがある。中層はロームブロックを主体とした堆積、住居跡中央部の上層堆積は黒色土ブロックを含んだ堆積土である。遺物 住居跡北半部では床面から覆土下層に、小形壺や壺の胴部片、南東部床面には大型壺の底部が出上している。住居西側の覆土下層からは炭化したドングリ状の種実遺体が散在して複数出土している。土師器鉢の口縁部片は覆土から出土しているが、覆土を掘り込む擾乱中に入り込んだ可能性がある。所見 出土遺物から弥生時代後期十正台式期の住居跡と考えられる。

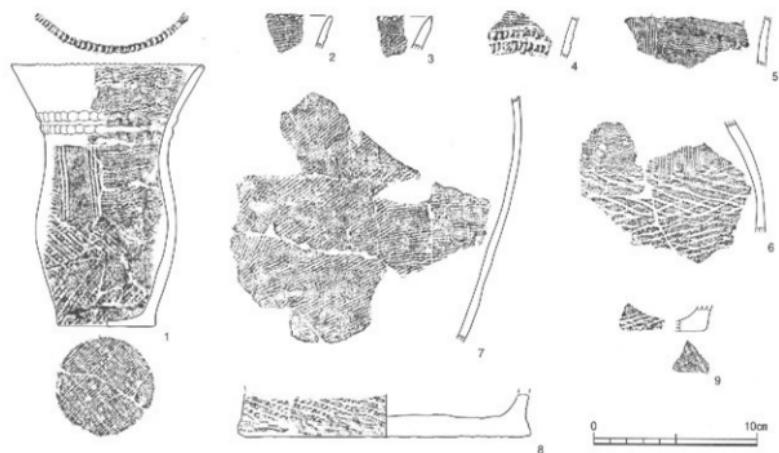
表2 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 小型壺	(11.8) 15.9 5.9	口唇部にキザミ、口縁部5本1單位の脚窪による波継文を有致。腹上部の文様帶は3単位。肩部付加系1種縦彫。	石英、チャート	やや不良	にぶい褐色	60%
2	弥生土器 壺	—	口縁部破片。口縁端部に捺糸痕の押圧、外延済余文。	微砂粒	普通	にぶい褐色	
3	弥生土器 小平壺	—	口縁部破片。口縁端部にキザミ、外延單筋Rを有致。	石英	普通	にぶい褐色	
4	弥生土器 壺	—	頸部片：渋余文。	石英、チャート	良好	褐色	
5	弥生土器 壺	—	口縁部片：桟の区画間に6本1単位の波状文を完備する。	石英	良好	墨色（外）、褐色（内）	
6	弥生土器 小型壺	—	腹の区画文は7本1条の横縞文を3本、区画内には波状文を充填、肩部は付加系2種縦彫。RのS巻きとLのZ巻き基体で羽状構成。	石英粒、微砂粒	良好	灰褐色	
7	弥生土器 壺	—	胴下半部片。胴上半部文様帯の下端部は崩落し沈跡と無文、胴下半部には無筋の斜縞文。	石英、海綿骨針	良好	灰褐色	
8	弥生土器 大型壺	18.0	底部片。胴部付加系2種縦彫。	石英、角閃石、チャート、金雲母	良好	褐色	
9	弥生土器 壺	—	底部小片。底部有目痕、胴部付加系2種縦彫。	石英	良好	にぶい褐色	
10	弥生土器 大型壺	(10.7)	胴部～底部片。單筋Rと付加系2種縦文を交差多段に施文。	石英、角閃石、海綿骨針	普通	褐色	



2号住居跡

- 1 黒褐色
- 2 褐色
- 3 細色
- 4 暗褐色
- ローム底子中層、褐焼土ブロック多量、やや軟らかい。
- ローム上層一大ブロック未体、褐焼土中へ大ブロック少量、
- 硬り有り
- ソフコールム主体、炭化物及少量少量、硬り有り
- ローム小へ大ブロック主体、暗褐色土中へ大ブロック少量、
- 硬り有り



第6図 2号住居跡 (1)

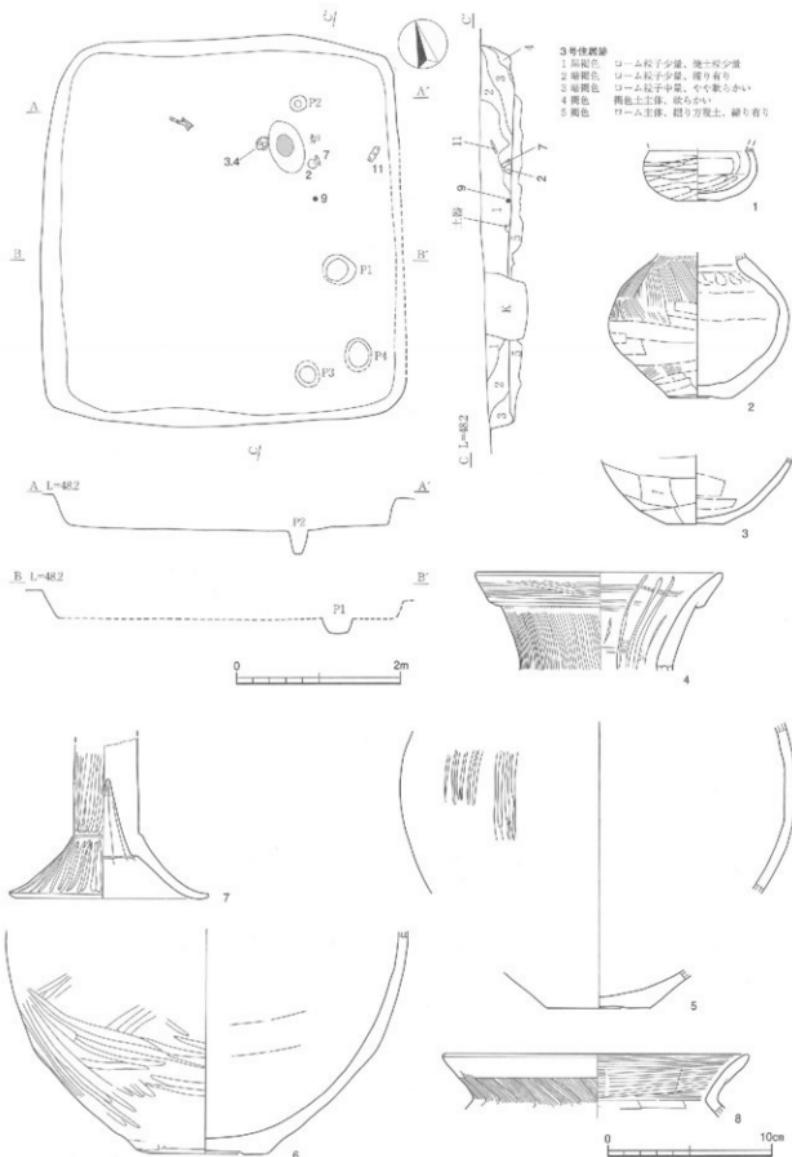
図版 番号	種別・器種	口径 幅高 底径	特　徴	墳土	造成	色調	備考
11	跳生土器 高坏	— 7.4	輪郭不明のRのS巻き原体による付加条溝文か、單面 L R溝文。	石英、角閃石、 海綿骨灰、金雲母	良好	にぶい橙色	
12	土師器 鉢	(11.0) — —	口縁部。外面ハケメ。	石英	良好	にぶい黄褐色	



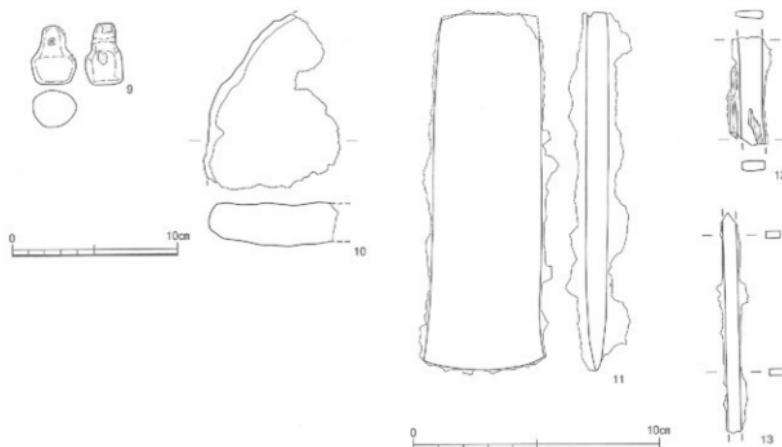
第7図 2号住居跡（2）

3号住居跡（第8・9図）

位置 調査区の中央部B2d1、C2a1、Cl4グリッドにある。 **規模と平面形** 4.75m×4.34mの長方形。
主軸方向 N-77°-W **壁** 壁高は約36cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 床面は硬化度合いが低い。
ピット 4箇所。P3は搅乱で壊されているが出入り口ピット、P2は炉に関係するピットと思われる。P1は床面を壊す新しいピット、P4は搅乱穴底面で確認されたピットでいずれも住居に伴うかどうかは不明である。 **炉** 住居跡の北東隅側に寄った位置にある。長径0.64m、短径0.40mの楕円形で深さ3cm。中央部は焼成化している。 **覆土** 覆土は4層で、最上層の1層は焼土粒を含んだ黒褐色土で、住居跡中央部床面を覆う。礫間に堆積している2~3層は暗褐色土層。 **遺物** 覆土から鉄製品で11の短冊形鉄斧、13の鉄鎌の柄の破片、12のヤリガンナ片が出土している。土器類では床面から7の土師器の高坏脚部と2の小型壺、4の複合口縁壺の口縁部が出土している。高坏脚部は脚部を取り去った脚部から裾部にかけてのもので、小型壺は口縁部を取り除いた体部のみのものである。壺体部に高坏脚部を差し込んだ状態で炉の南側の床上から出土している。複合口縁壺の口縁部は、炉の北西側縁近くの床面から出土している。鋸ないし土鉈形をした、釣り手に穿孔のある小型土製品は炉の南側床面から出土している。 **所見** 床上に残された壺、高坏、土製品は、祭祀的な用途が窺われる。覆土から出土した短冊形鉄斧は、住居跡出土としては非常に珍しい。これは鉄鎌、ヤリガンナとともに古墳の副葬品に由来するものが住居覆土中へ廻棄されたのかもしれない。



第8図 3号住居跡 (1)



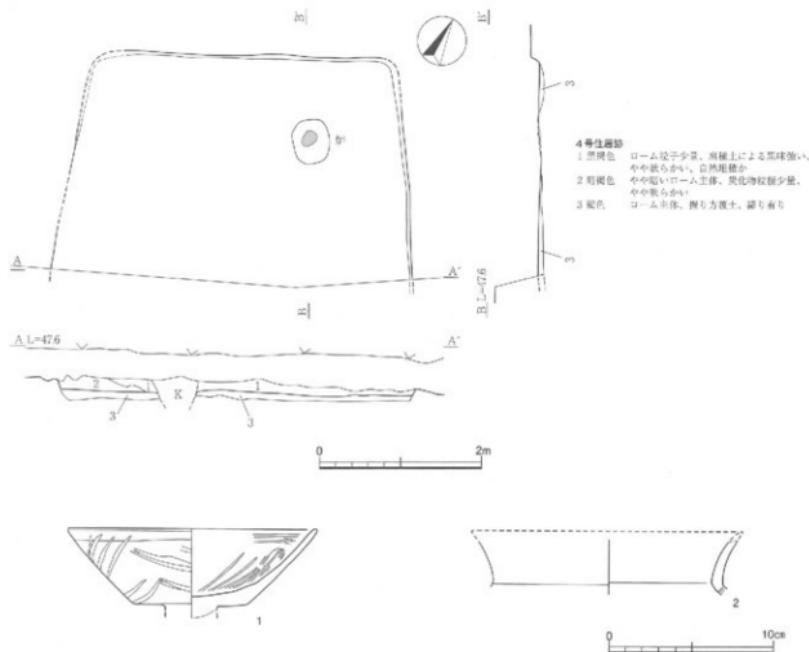
第9図 3号住居跡(2)

表3 3号住居跡出土遺物観察表

回収番号	種別・器種	口縁 横幅 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 小盤	— 26	体上半部ミガキ、下半部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	長石、石英	良好	に赤い褐色	
2	土師器 小盤	— 38	体上半部外周ハケメ、下半部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	長石、石英	良好	褐色	
3	土師器 小盤	— 34	胴下半部外周横位のヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石輝、石英	良好	褐色	
4	土師器 壺	15.0 —	複合口縁。口縁部外周ハケメ。内面ハケメ後ミガキ。	長石、石英	良好	に赤い褐色	
5	土師器 壺	— (6.4)	胴部外周ミガキ、内面ヘラナデ。底部低い瘤高台。	長石、石英	良好	黒褐色	
6	土師器 壺	— 7.6	胴部外周ミガキ、内面ヘラナデ。底部低い瘤高台。	長石、石英、チャート	良好	に赤い赤褐色	
7	土師器 壺	— 12.0	肩～腰部外周ミガキ、脚部内面ヘラケズリ。脚部内面ヨコナギ。	石英、チャート	良好	褐色	
8	土師器 壺	(18.6) —	口縁部片。口縁部外周斜位ハケメ、内面横位ハケメ。	長石、石英、チャート	良好	黒褐色	
9	土製品 錠(鉛)形	高38、幅27、厚さ22、重18.5g			良好	黒褐色	
10	土製品 炉粘土板	長一、幅一、厚さ25、重245.8g		長石、石英、チャート	普通	に赤い褐色	
11	鉄製品 錠形鉢	長14.5、幅4.9、厚さ0.9、重354g					
12	鉄製品 ヤリガンナ	長(4.4)、幅0.95、厚さ0.32～0.4、重(7.94)g、木質付着(竹か)					
13	鉄製品 鉢	長5.9、幅0.5、厚さ0.3、重(7.90)g					

4号住居跡（第10図）

位置 調査区の南部D1a4、D2a1グリッドにある。 規模と平面形 4.40×(2.84) m。南半分が調査区外にある。 **主軸方向** N-31°-W **壁** 壁高は約23cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 全体に弱く硬化している。 **ピット** — **炉** 住居跡の北東隅側に寄った位置にある。長径51cm、短径44cmの椭円形でほぼ平坦。中央部が特に赤変硬化している。 **覆土** 覆土は2層で、上層は自然堆積と見られる黒褐色土層で、下層の暗褐色土中には炭化物粒を含む。 **遺物** 覆土から古墳時代前末期から中期初め頃の高環と甕口縁部片が出土している。 **所見** 遺構の特徴や遺物から、古墳時代の5世紀初め頃の住居跡と考えられる。



第10図 4号住居跡

表4 4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器器 高環	(15.2) —	环部内外面ミガキ。脚部柱状脚か。	良石、石英、 チャート	良好	にぶい褐色	
2	土器器 甕	(18.3) — —	口縁部内外面ヨコナギ。	石英、チャート	良好	黒褐色	

5号住居跡（第11・12図）

位置 調査区の西部C0b4グリッドにある。 **規模と平面形** $3.97 \times 3.50\text{m}$ の横に長い長方形。 **主軸方向** N-1°-E。 **壁** 壁高は35cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 床面全体が硬化している。壁溝は部分的に途切れながら、カマド部分以外全周している。 **ピット** 1箇所。P1は、南壁寄りの住居の中軸上にあり、住居南側の壁に向かって、約67°の角度で掘り込まれている。 **カマド** 住居北壁中心から僅かに東に寄った位置にあり、粘土を使用して、住居内に袖部を張り出して構築している。燃焼室の幅はおよそ43cmある。 **覆土** 覆土はロームブロックを多く含んだ上層とローム主体の下層ともに埋め戻しの人が堆積層である。 **遺物** カマド焚口前の床面から、底部に墨書き文字の書かれた4の須恵器盤、住居の北東隅から9の台石が出土している。その他はカマド付近の覆土中から出土しているものが多い。 **所見**

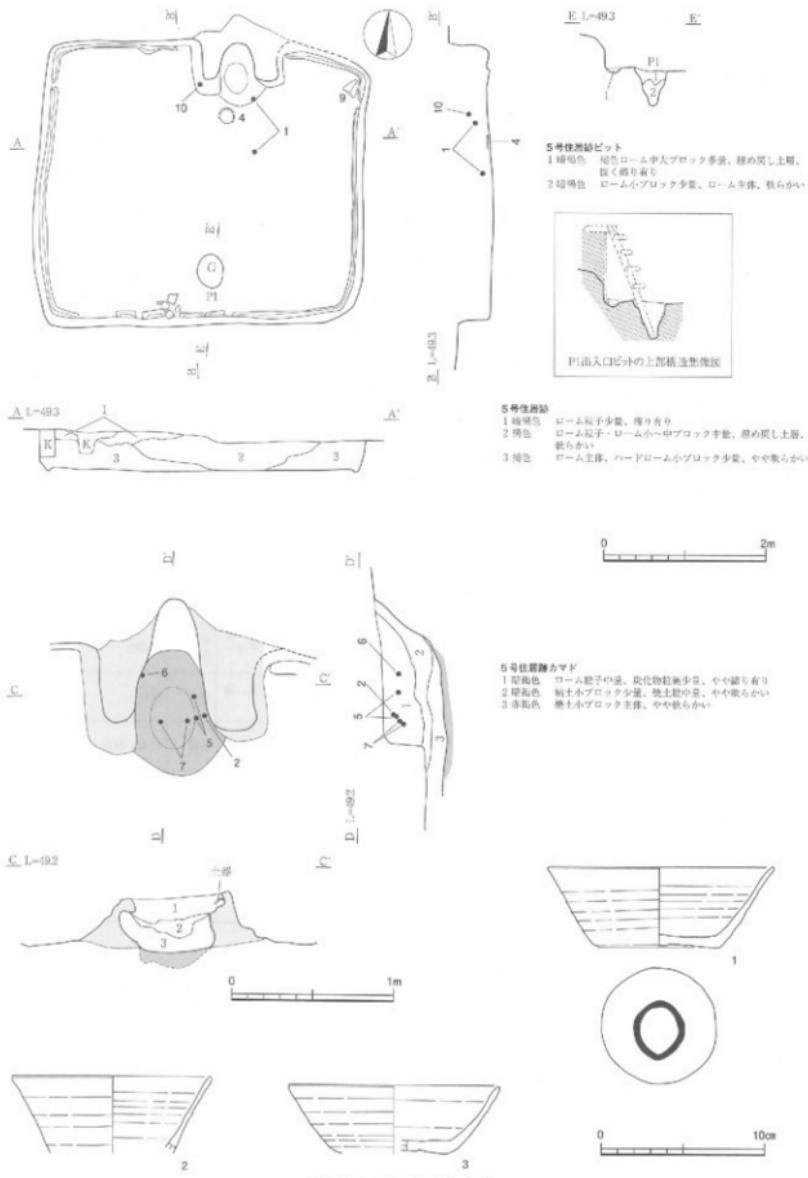
P1の南側傾斜角度にそって、一本梯子を復元的に入れてみると、住居の南壁がさらに上方に延びているとすると床面からおおよそ0.85mの高さで交差する。この高さが住居を構築した時の旧地表面の可能性が推測できる。床面出土須恵器盤に書かれた「刀良」はトラと読んで男性名であろうか。

表5 5号住居跡出土遺物観察表

回収番号	種別・器種	口径 高さ 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.9 4.9 7.6	底部回転ヘラ切り離し、無調性。底部外側墨書き記号「〇」。	長石、チャート、海綿骨針	やや不良	灰褐色	
2	須恵器 坏	(12.2)		長石、石英、薄 海綿骨針	普通	灰色	
3	須恵器 坏	13.0 4.2 (6.2)	底部回転ヘラ切り離し。	長石、海綿骨針	普通	灰色	
4	須恵器 盤	16.6 4.3 10.3	底部外側ヘツ記号「×」、底部外側墨書き文字「刀良」。	長石、石英、海 綿骨針、チャート	やや不良	灰白色	
5	須恵器 盤	18.1 4.0 11.3	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、石英、薄 海綿骨針	不良	灰色	
6	土器 壺	20.6 -	口縁部外側ヨコナダ。胴上半部外凹ナデ、下半部 ミガキ、内面ヘラナデ。	石英、微砂粒	普通	にぼい褐色	
7	土器 壺	24.2 -	口縁部外側ヨコナダ。胴上半部外凹ナデ、下半部 ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	良好	にぼい褐色	
8	土製品 機械工具	長35、幅10.5、重4.97g		石英、角閃石	良好	褐色	内縫欠損
9	石製品 台石	長71.1、幅15.4、厚さ5.0、重1680g、砂岩					
10	鉄製品 刀子	長95、幅11.8、厚さ0.3、重(725) g					

6号住居跡（第13図）

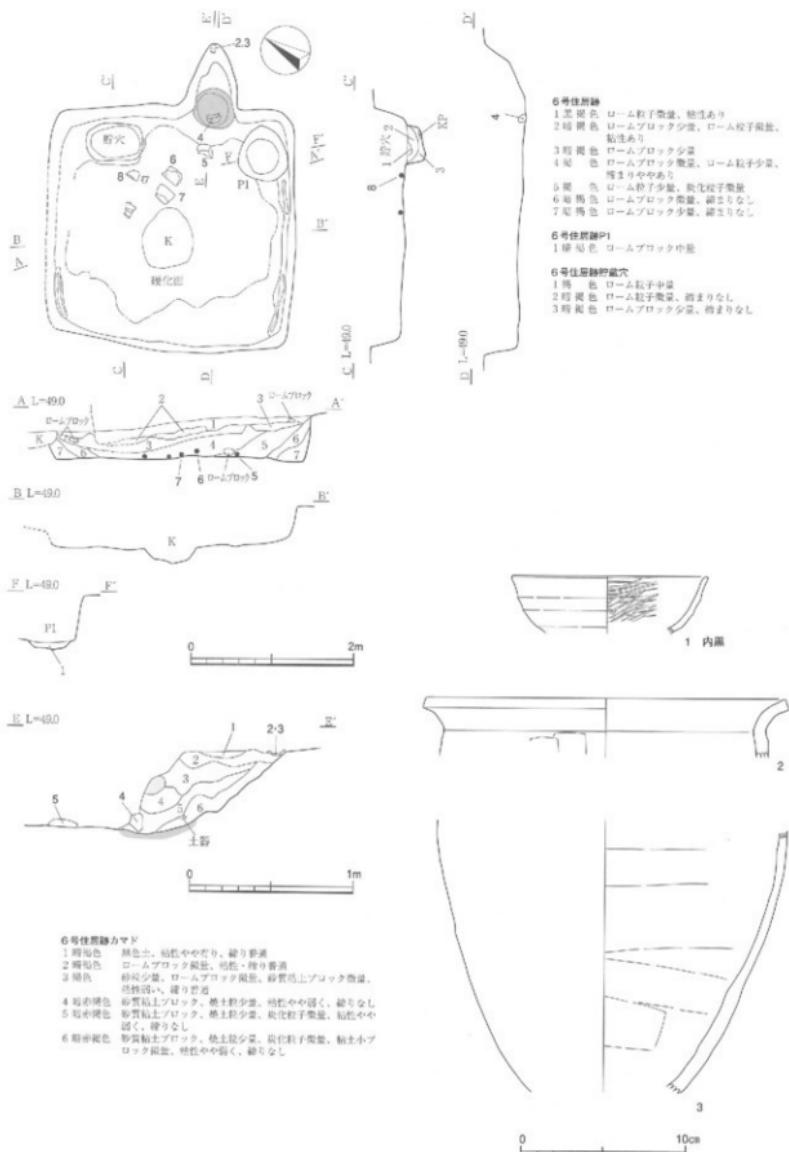
位置 調査区の北部B0d3グリッドにある。 **規模と平面形** $3.00 \times 3.05\text{m}$ の方形。 **主軸方向** N-81°-E。 **壁** 壁高は約50cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** ほぼ平坦で壁際を除いて踏み固められており、カマド寄りの床面にはカマド材の礫と焼土が散存している。また、壁溝は南壁下と北壁下の一部に見られる。 **貯蔵穴** 北壁の北東コーナー部寄りに付設されており、深さ22cmである。底面は平坦で、壁は外傾



第11図 5号住居跡（1）



第12図 5号住居跡（2）



第13図 6号住居跡

して立ち上がる。 ピット 1箇所。南東コーナー部にあり、深さ10cmの浅い窪み穴で、性格は不明である。 カマド 東壁南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで125cm、燃焼部幅45cmである。袖部はほとんど遺存しておらず、わずかに地山の上に砂質粘土が確認されただけである。火床面は火を受けて赤変硬化しているが、焼土や灰の堆積はほとんど認められない。カマド土層4～7層は天井部の崩落土である。カマド掘り込み面右側に赤変した袖石片が僅かに残存していた。 覆土 覆土は7層で、上層が黒褐色土の自然堆積、下層はロームブロックを含んだ暗褐色～褐色土層で、人為堆積と見られる。 遺物 覆土から土器の内黒塊、カマド煙道部廻没土から土器片が出土している。カマド焚口部から住居跡中央部にかけて砂岩の切り石破片が散在しているが、これらはいずれも被熱している。 所見 本跡は小型の住居跡で東壁に窓を付設している。床上で出土した砂岩の切り石はカマドの構築材として使用され、廃絶時に遺棄されたものと推測される。住居形態や出土遺物から10世紀前葉頃の住居跡と考えられる。

表6 6号住居跡出土遺物観察表

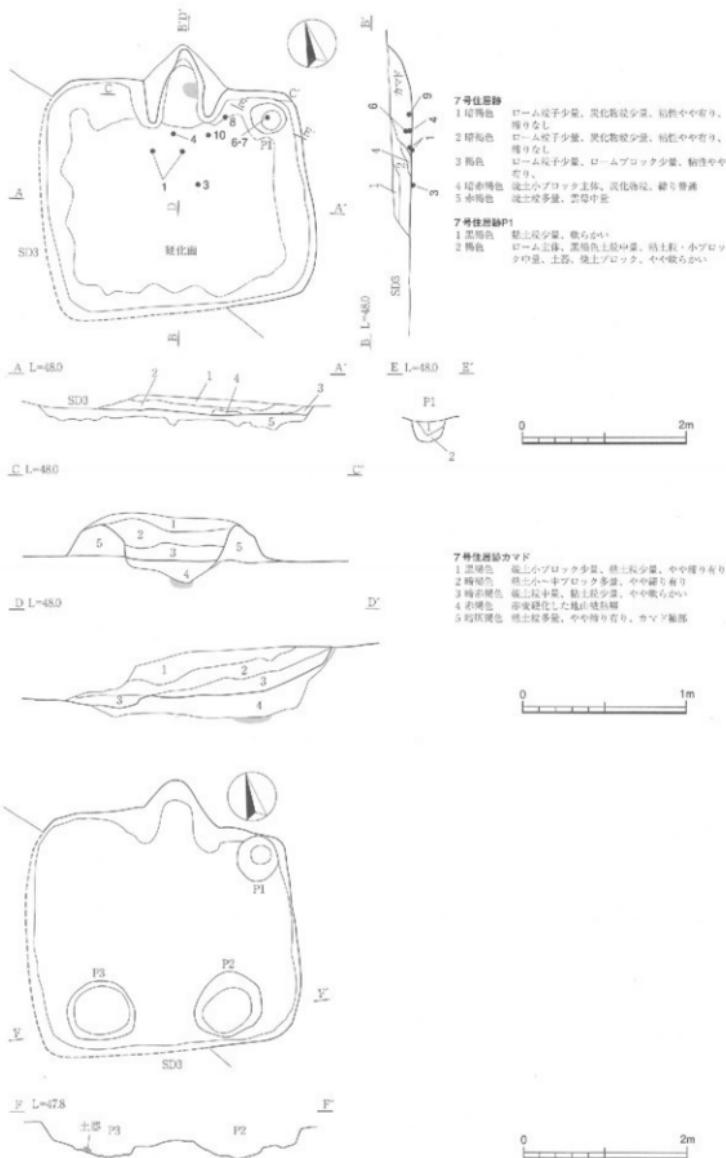
回収 番号	種別・器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器器 塊	(128) — —	内面黒色処理・ミガキ。	石英	普通	にぶい褐色	
2	土器器 塊	(222) — —	口縁部内外面ヨコナギ、腹部外周ヘラケズリ。	石英	良好	褐色	
3	土器器 塊	— — (90)	腹下部外斜斜位のヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナ デ。	長石、石英微粒	良好	にぶい褐色	

7号住居跡 (第14・15図)

位置 調査区の中央部C1b4グリッドにある。規模と平面形 3.35×2.98の方形。主軸方向 N-10°-E 壁 壁高は約37cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 壁周辺を除いて硬化している。ピット P1は住居跡北東隅にある。P2・3は床下から確認されており、南壁寄りの西と東に大きく開いている。カマド 北壁中央にあり、袖部は粘土を含んだ暗黒褐色土で構築されている。燃焼室から煙道部へ緩やかに立ち上がっている。覆土 覆土には炭化物粒や焼土ブロックを含んでいる。遺物 カマド前面の床上から1・3・4の土器の内黒塊、10の灰釉陶器塊片が出土している。6・7の土器塊はP1の覆土から出土している。 所見 出土遺物から10世紀前半頃の住居跡と考えられる。

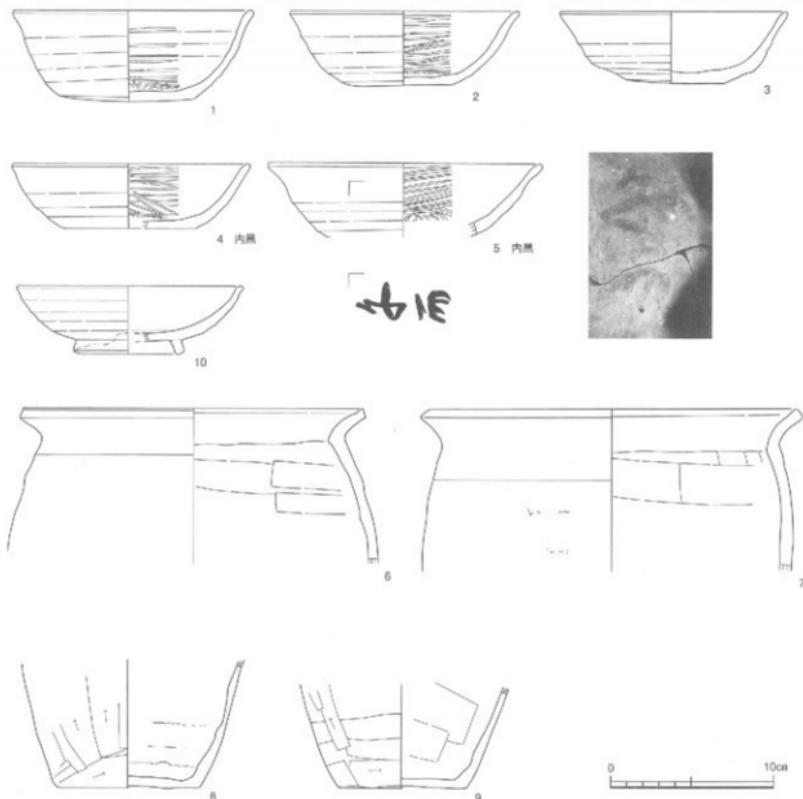
表7 7号住居跡出土遺物観察表

回収 番号	種別・器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器器 塊	15.2 5.6 8.3	底部凹輪ヘラ切り後ヘラナデ。	長石、石英、微 砂粒	普通	にぶい褐色	
2	土器器 塊	(13.8) 4.6 6.2	底部凹輪ヘラ切り離し後一方向ヘラナデ。底部下端 手持ちヘラケズリ。底部内側一方向ヘラミガキ。口 縁部横方向ヘラミガキ。	石英粒多、長石、 滑綿骨針微量	良好	にぶい褐色	60%
3	土器器 塊	(13.8) 4.4 5.8	底部多方向ヘラケズリ。底部周縁手持ちヘラケズリ。 内面クロロナデ。	石英、金雲母、 滑綿骨針微量	不良	褐色	

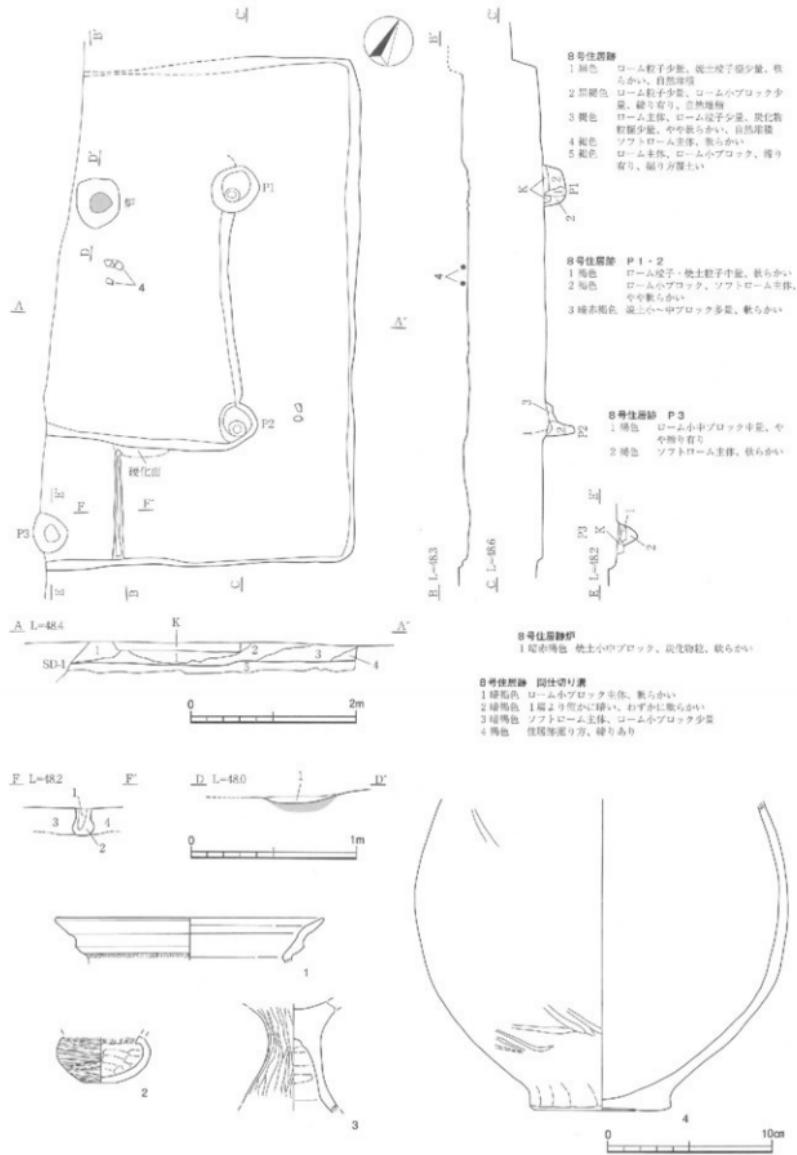


第14図 7号住居跡（1）

区版番号	種別・器種	口径 縦高 底径	特 製	胎土	焼成	色調	備考
4	土陶器 壺	14.4 4.0 7.8	体部下層～底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。内面黒色処理・ミガキ。	石英	普通	褐色	
5	土陶器 壺	(15.6) — —	内面口縁部右肩上がり横方向ヘラミガキ。内面黒色処理。	石英粒多、海綿骨針微量	良好	にぶい褐色	30%、器曾「子西?」
6	土陶器 壺	(20.6) — —	口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英、角閃石	良好	にぶい褐色	
7	土陶器 壺	(23.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英、角閃石	良好	にぶい褐色	
8	土陶器 壺	— — 8.7	肩部外面ヘラケズリ。底部外面オサエ。	石英、微鉄粒	普通	褐色	
9	土陶器 壺	— — (7.7)	肩部外面ヘラケズリ。底部外面オサエ。	石英、角閃石	普通	褐色	
10	灰釉瓦器 壺	(13.8) 4.2 (6.0)	灰釉付け掛け。	矽島	良好	灰白色	



第15図 7号住居跡(2)



第16図 8号住居跡

8号住居跡（第16図）

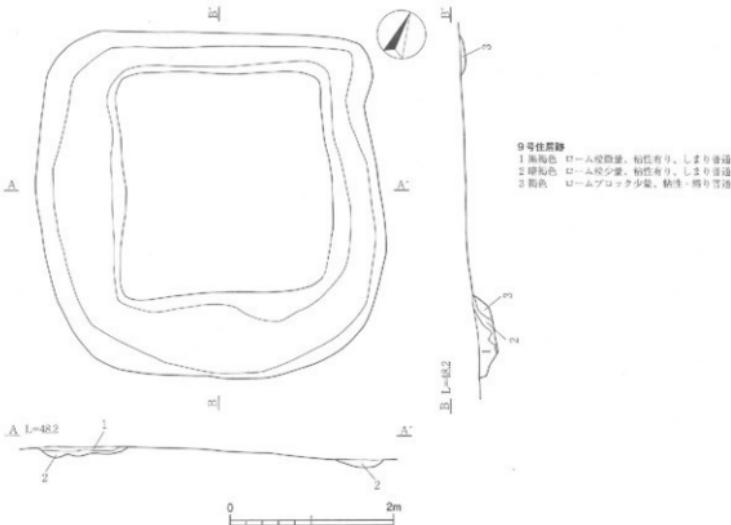
位置 調査区の中央部Cl3a～b3、b4グリッドにある。 **規模と平面形** 6.20×(4.00)m。1号堀によつて東側を塙されている。 **主軸方向** N-25°-W **壁** 壁高は6～18cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 南側と東側の主柱穴の外側の区画がベット状に約5cm高まっている。P2とP3の間のベッド状の高まりの端の一部が硬化していたが、他は床の硬化面の風化が進んでいる。開仕切り溝は、南壁から直角に中心に向かってベット状遺構を切り込んで造られている。 **ピット** 4本主柱穴のうち東側列のP1・2が残っており、床面では柱痕として確認できた。柱痕層上層では焼土粒が見られた。P3は南壁際の炉の対面やや西寄りの位置にあり、出入り口ピットと考えられる。 **炉** 開仕切り溝を延長したラインの少し西に寄った位置にあり、長径62cm、短径52cmの楕円形で深さ5cmで、火床面中央部が焼土化している。 **覆土** 覆土は自然堆積で、壁際のロームの三角堆積中に炭化物が含まれる。上層の黒色土中にも焼土粒が含まれる。 **遺物** 覆土から精製土器の有段口縁壺口縁部、小型壺、住居中央部の床面近くから4の壺体部が出土している。 **所見** 住居跡はベッド状遺構を持ち、出入り口ピットと開仕切り溝、炉の各施設を住居の中軸線のやや左側に持った住居である。出土遺物や遺構の特徴から古墳時代前期の住居跡と考えられ、焼失住居と見られる。

表8 8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 縁高 底径 (mm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 有段口縁壺	— — (16.3)	縫いS字形に墨書きする有段口縁の口縁部片。口縁部内外面ヨコナギ。	石英	良好	にぶい褐色	
2	土師器 小壺	— — 19	底部は小さな凹面の平底。口縁部内外面ミガキ、体部外面ミガキ、内面ナゲ。	石英、滑砂粒、 海綿骨針微存	良好	にぶい赤褐色	
3	土師器 壺	— — —	脚部片。脚部外面ミガキ。	長石、石英、滑 綿骨針微存	良好	にぶい褐色	
4	土師器 壺	— — (8.3)	底部は下方に突出し、底面は低い船台状で粘土圧痕有り。脚部外回ミガキ。	石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色、黒 色	

9号住居跡（第17図）

位置 調査区の中央部Cl1b4グリッドがあり、床下の掘り方が確認されている。 **規模と平面形** 掘り方の範囲は(4.30)×(4.25)m。 **主軸方向** N-26°-W **壁** — **床** 床が残存しておらず、床下の掘り方が四角く廻る溝状に確認されている。 **ピット** — **火炉** — **覆土** 床下覆土は薄く3層あり繰りがある。 **遺物** — **所見** 掘り方の規模と平面形から、元の窓穴住居跡は、一辺4.30mを少し超える方形の住居跡と考えられる。軸方向は、8号住居と近いので、古墳時代前期の住居の可能性が考えられる。

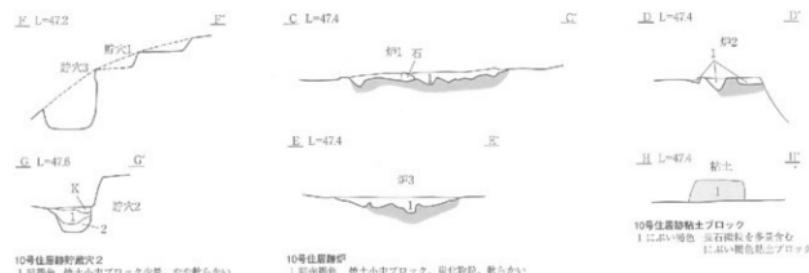
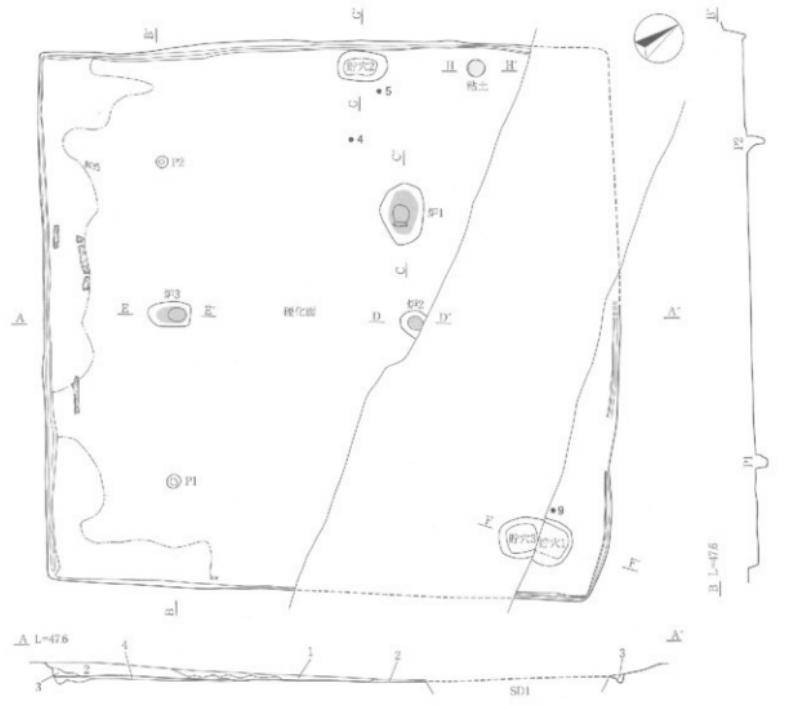


第17図 9号住居跡

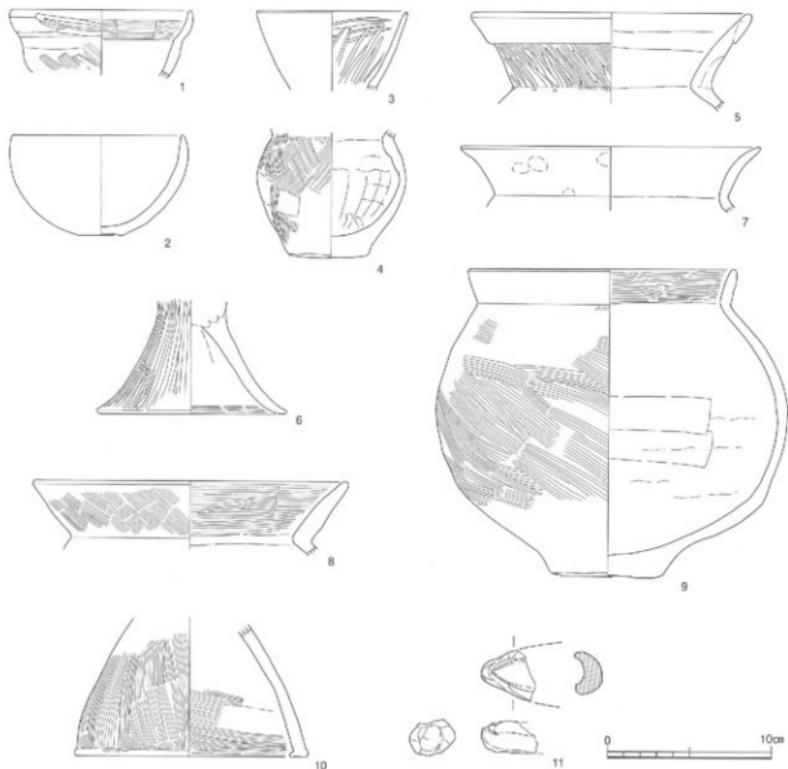
10号住居跡（第18・19図）

位置 調査区の中央部南寄り C1c4~d4, C2c1~d1グリッドにある。規模と平面形 $8.48 \times 8.63\text{m}$ の方形、東側床面を1号溝によって囲まれている。主軸方向 N-59°-W 壁 壁高は23cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 南西壁際～南東壁南寄りの幅40cmの範囲以外全体に硬化している。ピット 2箇所。主柱穴は西側の2本が残存している。炉 3か所ある。炉1は規模が長径101cm、短径64cmと大きく、炉2は炉1に近い位置にあり径23cmと小さい。炉3はP1とP2の間にあり、長径65cm、短径21cmである。

貯蔵穴 3か所ある。貯蔵穴1と貯蔵穴3は東隅にあり、貯蔵穴2は北西壁の中央壁際にある。**覆土** 覆土は3層で、下層堆積の2層はローム主体で、礫層堆積の3層には炭化材片や焼土が含まれている。**遺物** 覆土から小型の鉢、壺、高壺、壺、甕、粗製器台、舟形土製品が出土している。小型鉢は1の粗製と2の精製品が、4はミニチュア土器の甕、6は中実脚の高壺部、10の脚台部は、台付甕脚部にしては大型であり、11号住居出土の粗製器台に似ており粗製器台の脚台部としたい。住居跡北側壁近くの床面上から、大きさ上径26cm、下径33cm、高さ13cmの平面凹形のびい褐色粘土塊が出土している。**所見** 貯蔵穴が3か所、炉が3か所あり、貯蔵穴1と3は南東隅にあり切り合い関係がある。炉1と3は、大型住居跡に見られる、複数炉の配置と考えれば、火処を別にするまとまりが同時に最低2単位あったと考えられる。貯蔵穴2の近くの床上に残された粘土塊は、粘土を入れた円形の桶状の入れ物の形を反映しているのかもしれない。出土遺物から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第18図 10号住居跡（1）



第19図 10号住居跡（2）

表9 10号住居跡出土遺物観察表

団板 番号	種別・器種	口縁 際高 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土加器 鉢	(10.8) — —	口縁上部ココナデ、下平部ナデ、内面ハケメ。 体部外面前斜方向のハケメ。	長石粒・輝、石英、海綿骨針痕 量	良好	にぶい褐色	
2	土師器 鉢	(10.3) 6.1 2.8	小さな凹凸の平底で、体部は半球形。内外面とも斜 方向のミガキ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
3	土師器 小盤	(9.0) — —	口縁部片。内外面赤彩、外面牽耗、内面ミガキ。	長石、石英	普通	にぶい赤褐色	
4	土師器 小盤	— — 4.8	口縁部欠損。頭部外圍ハケメ、底部は無実性で柄状 丘積、内面ヘタナデ。	長石、石英、薄 海綿骨針	良好	橙色	
5	土師器 壺	(17.2) — —	複合口縁壺の口縁部片。頭部外面前斜方向のハケメ後 斜方向のミガキがまばらに入る。内面横方向のヘタ ナデ。	石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	

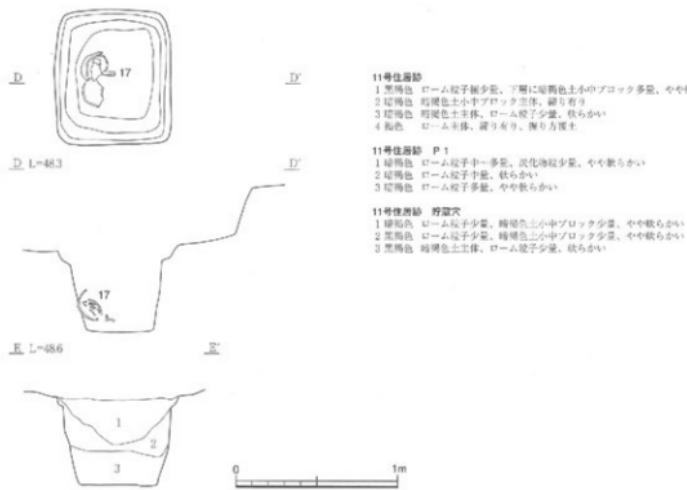
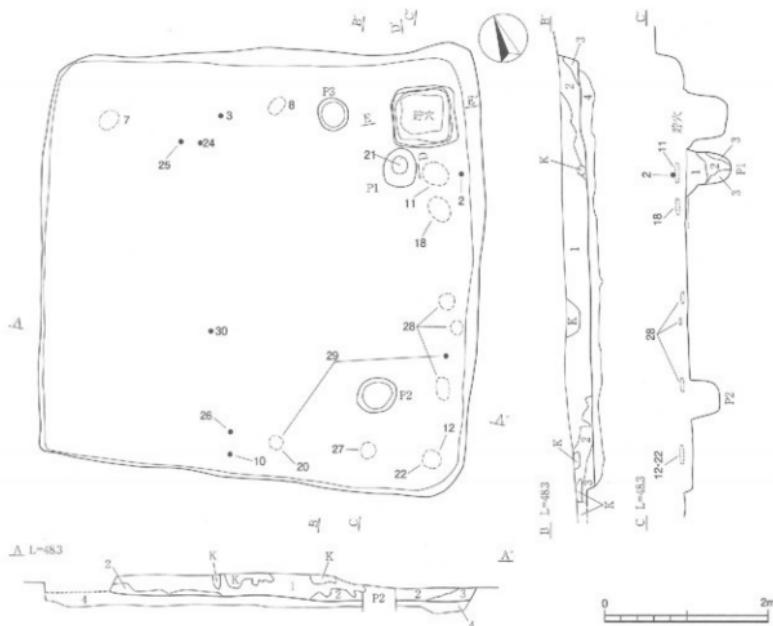
図版番号	種別・器種	口径高 器底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	土師器 高環	— — (11.4)	口縁部片。やや小振りな「ハ」の字形に斜く開部で、外側は縱方向のミガキ、内面はハケメ。	長石、石英	普通	黒色、にぶい褐色	
7	土師器 甕	(18.2) —	外反して立ち上がる口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、一部指捺痕。	長石、石英	良好	褐色	
8	土師器 壺	(19.2) — —	口縁部は直線的に外傾し、やや長めに立ち上がる。口縁部外側方向のハケメ、内面横方向のハケメ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
9	土師器 甕	(16.0) 19.0 6.8	口縁部は直線的に極く立ち上がる。肩部は抜けた球形で、底部が削りためて接合部で斜面角度と窪みが変わる。底部は、施両面が不明瞭な骨突状。底部外側は斜方向のハケメ、上位はナデ、肩部内面ヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
10	土製品 粗製器台	— — (14.3)	粗製の岩谷脚部片。外側縦方向のハケメ、内側下半部横方向のハケメ、上半部ナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
11	土製品 舟形土製品	幅(28)長(3.3)厚(2.2)、重11.38g、軸先部分の破片。	長石、石英粒	良好	にぶい褐色		

11号住居跡 (第20・21図)

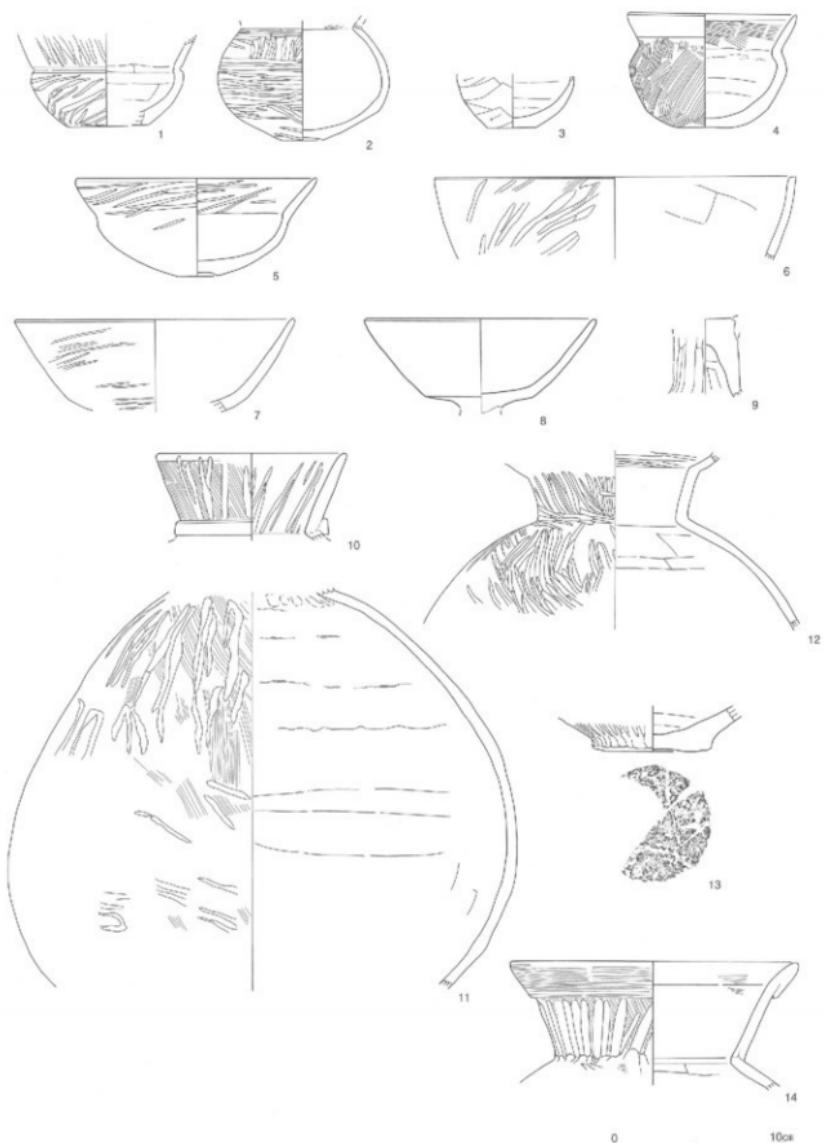
位置 調査区の南西部C1c3-d3グリッドにある。 **規模と平面形** 5.42×5.43の方形。 **主軸方向** N-70°-W **壁** 壁高は約24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 全体に弱く硬化している。 **ピット** 1箇所。P 1は柱穴状で、図にあるP 2とP 3は住居を構成する新しいピット。**炉** 一 罩土 罩土は3層で、壁際2・3層は暗褐色土、上層の1層は黒褐色土層である。 **遺物** 罩土2層から古墳時代前期の土師器と粗製器台が、1層からは須恵器甕が口縁から底部にかけて破片で出土している。古墳時代前期の土器は、2のように小さな平底を持つ小形壺がある。外側全体にミガキを掛けた壺は、11のように下膨れのもの、12のような有段口縁のもの、13や16のように底部の突出するものがある。甕は24の甕のように口唇部付近で屈曲するものの、22の甕のように口唇部を小さく折り返し端部にキザミを入れるものがある。 **所見** 出土遺物の特徴や粗製器台の出土から古墳時代前期の中葉頃の住居跡と考えられる。1層出土の須恵器甕は、擬格子状の凹き、内面に当て具痕、肩部～頸部のカキメ等から古墳時代後期6～7世紀前半代のものかと思われる。

表10 11号住居跡出土遺物観察表

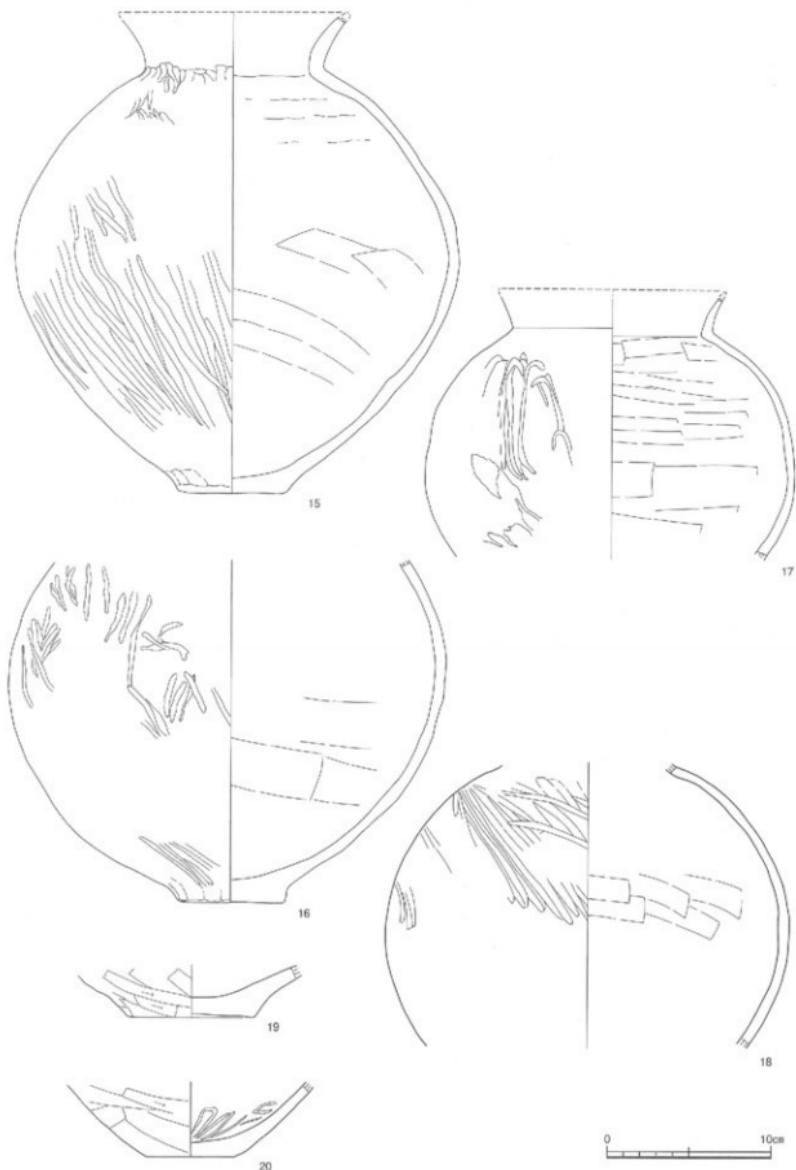
図版番号	種別・器種	口径高 器底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 鉢	— — (4.8)	平底で、口縁部は外反して開く。体部～口縁部外側ミガキ、内面ナデ。	石英	良好	黒褐色	
2	土師器 鉢	— 24	底部は小さな凹面でナデ。体部赤彩、横方向のミガキ。	長石、石英	良好	褐色	
3	土師器 小型鉢	— 28	底部は小さな平底。肩部外側ヘラケズリ、内面ナデ。器壁薄い。	石英、海綿骨針 微粉	良好	にぶい褐色	
4	土師器 小型鉢	10.3 7.0 3.1	粗製の小形鉢で、底部は胴部との境が不明瞭な平底。胴部ハケメ。口縁部内外面横方向のハケメ、口唇部ヨコナデ、内面ナデ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
5	土師器 鉢	(14.6) 6.0 2.3	底部は小さな凹面で、底部を除き内外面赤彩・ミガキ。	石英、海綿骨針	普通	赤褐色	



第20図 11号住居跡 (1)



第21図 11号住居跡出土遺物（2）



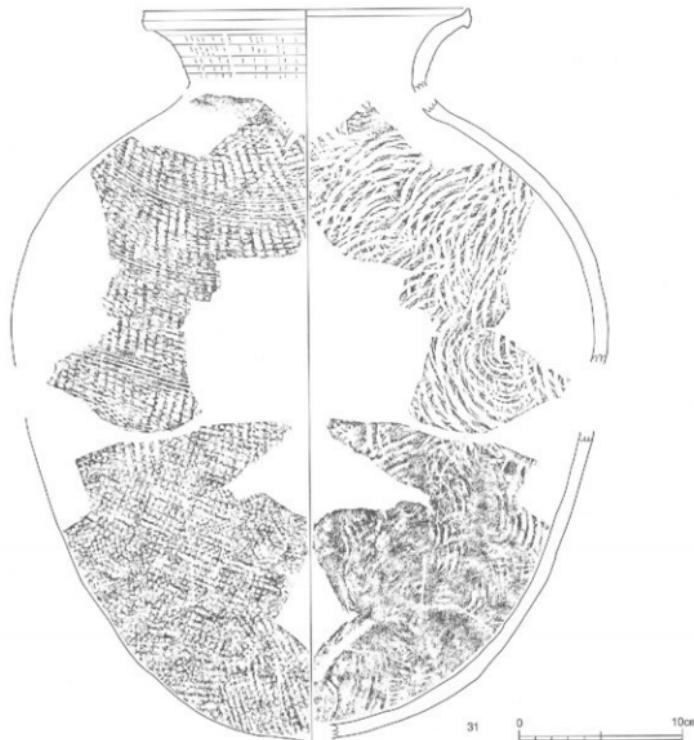
第22図 11号住居跡出土遺物（3）



第23図 11号住居跡出土遺物（4）

回数 番号	種別・器種	口径 最高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	土師器 甕	(22.0) — —	口縁部片。口縁増幅を面取りする。口縁部外囲ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英、薄 褐色針	良好	にぶい褐色	
7	土師器 鉢	(17.0) — —	底部欠損。体部外外面赤彩、ミガキ。	石英、チャート	普通	赤褐色	
8	土師器 壺	(14.0) — —	底部外外面赤彩。	石英、チャート	良好	赤褐色	
9	土師器 壺	— — —	脚部片。低い柱状脚で下部が中空。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
10	土師器 壺	11.6 — —	口縁部片。直口縁で、頸部に粘土被を巻きつける。口縁部外面ハケメ後一部ミガキ。内面ナデ後ミガキ。	長石、石英	良好	黒褐色	
11	土師器 壺	— — —	胴部片。外面ハケメ後ミガキ。内面ヘラナデ。	長石、石英、薄 褐色針	普通	にぶい褐色	
12	土師器 壺	— — —	有段口縁の肩～頸部片。頸部外外面ミガキ、内面ヘラナデ後オサコ。頭部内外面ミガキ。	長石、石英	やや不良	暗赤褐色	
13	土師器 壺	— — 7.1	底部片。底部木素痕。胴部内外面ミガキ。	長石、石英、薄 褐色針	良好	にぶい褐色	
14	土師器 壺	17.2 — —	口縁部片。複合口縁で、頸部外表面斜方向のミガキ、口縁部内側斜方向のミガキ。	長石、石英	良好	にぶい赤褐色	
15	土師器 壺	(14.0) (29.5) 6.6	口縫上半部欠損。直口縁で、胴部中位に最大径を持ち、底部は小さく突出する。胴部外表面斜方向のミガキ。底部外表面木素痕。	長石、石英、鐵 砂粒	普通	にぶい褐色	
16	土師器 壺	— 6.4	肩上半部欠損。底部高い木素痕。底部外外面ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英	やや不良	暗褐色	
17	土師器 壺	(13.8) — —	口縫部欠損。胴部外外面ミガキ、内面ヘラナデ。	長石繊、石英	良好	にぶい褐色	
18	土師器 壺	— — —	胴部上半部外外面ミガキ、内面ヘラナデ。	チャート、石英、 薄褐色針	良好	灰褐色	
19	土師器 壺	— — 7.6	底部片。底部外外面ナデ。底部外表面ハラケズリ後ミガキ。	長石粒・礫、石 英、薄褐色針微 量	普通	暗褐色	
20	土師器 甕	— — 5.1	平底の底部片。底部と胴部下端ヘラケズリ、内面雜 なミガキ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
21	土師器 壺	— (6.8)	頸部外外面ミガキ。胴部下端ヘラケズリ。内面ヘラナ デ。底部ヘラケズリ。	長石繊、石英	良好	にぶい褐色	
22	土師器 甕	(18.0) — —	短い複合口縁で、口縫部にキガミを入れる。口縫 部内外面ナデ。	石英、チャート	良好	にぶい褐色	
23	土師器 甕	(18.9) — —	口縫部内外面ヨコナデ、胴部外外面ヘラナデ。	長石、石英	良好	黒褐色	
24	土師器 甕	14.8 (22.5) 4.8	口縫～肩部斜片。口縫部は縫部で外反する。口縫部 外表面半部横曲方向に逆施する指彫痕、下半部ハケメ。 縫部外面ハケメ、内面ナデ。岩壁が傷い。	長石、金雲母	良好	黑色	
25	土師器 甕	15.4 18.3 5.4	半底で、胴下部の思入みがきい。口縫部は外斜し、 縫部で彫曲して高く。胴部外表面方向のハケメ、内 面ヘラナデ。口縫部外面ヨコナデ、内面ミガキ。底 部外表面凹いハケメ。	チャート、石英	良好	にぶい褐色	
26	土師器 粗製台	9.8 14.6 12.5	群部一部欠損。外面ハケメ、内面ハケメ：受け部・ 脚部とも底部を内面に折り返し複合化している。	長石、石英	普通	にぶい黄褐色	
27	土師器 粗製台	13.6 13.5	受け部1/2欠損。外面ハケメ、内面ハケメ。受け部・ 脚部とも底部を複合化させ、器盤を厚くしている。	長石、石英、薄 褐色針微量	普通	にぶい褐色	

図版番号	種別・器種	口径 深さ 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
28	土器部 粗製器台	(121) 163 141	受け部と眞の一部欠損。内外面ナデ。受け部は口縁部に一か所基部近くまで及ぶ逆三角形の切り込みがある。	長石、石英、海綿骨針微量	良好	にぶい褐色	
29	土器部 粗製器台	(127) 165 (128)	受け部と脚の一組欠損。内外面ナデ。受け部は口縁部に一か所基部近くまで及ぶ逆三角形の切り込みがある。	長石、石英、海綿骨針微量	普通	にぶい褐色	
30	土製品 土玉	— — —	径24、厚さ22、孔径0.42、重10.82g	微鉢粒	良好	にぶい褐色	
31	須恵器 甕	(200) — —	肩部外面横格子叩き、内面同心円文当て具痕。	長石	やや不良	灰白色	覆土上層



第24図 11号住居跡出土遺物（5）

第2節 古 墳

調査区の東側区域で2基（1・2号墳）、西側区域で3基（3-5号墳）、合わせて5基の古墳が見つかっている。1号墳は埴輪をもち、円墳ならば周濠の1/3を残す6世紀の古墳。2号墳は埴輪をもつ円墳で6世紀の古墳、3・4号墳は円墳で4世紀、5号墳は円墳で時期不明である。1号墳のみ墳丘の一部が残っていたが、いずれも墳丘と周濠の上部は削平されており、埋葬施設は確認できなかった。

1号墳（第25・26図）

周濠の北西部と墳丘の中央部分が残る推定円墳である。調査区をはずれる東南部は削平をうけるなどして墳丘や周濠の痕跡は確認できないため、前方部が調査区外へ延びる前方後円墳である可能性も否定できない。現存する墳丘および周濠には埋葬施設が見つかっておらず、関連する遺物や構築物の伝聞もない。

位置 調査区の東端に位置する（B2c4グリッド）。

規模 墳丘直径は推定19m。周濠の外縁は同じく25m。

墳丘 現存する墳丘は直径約8.5m、もっとも深い周濠底からの北高差は3.4mである。旧地表面（第25図19図）上に薄い層を重ねて墳丘を築いている。周濠内で数個の礫が見つかったものの、表土や周辺からはでおらず、葺石があった可能性は低い。

周濠 幅は現状で3-3.5m、深さは0.7-1.1m、西側では長さ13mにわたって深さ1.5mと深くなっているが、その中に特別な施設は見つからなかった。

埋葬施設 調査区内では、見つからなかったが、墳丘南側に残っている可能性がある。

出土遺物 土師器と埴輪（円筒、朝顔形円筒、形象）が出土している。

（1）土師器

土師器は1点見つかっている（表11、第31・32図1）。

ほぼ完形の坏で、西侧周濠のもっとも深い部分の底面上に横転した状態で出土した（第29・30図H-H'）。口縁部が外側に開く坏で、口縁は外傾して立ち上がり、上半途中を過ぎたところで屈曲して外側に開き、口唇端部でわずかにつまみあげている。赤く焼きあがる鉄分の多い胎土を使用し、橙色を呈す。内面は全体にミガキをかけており、口縁部では横方向に、体部上半部では往復する放射状に、体部内底面でやや乱れている。外面は口縁部がヨコナデで、体部はヘラケズリである。

出土状況は単独で、周間に共伴する遺物は認められなかった。周濠内から出土した遺物のはほとんどは、周濠にいくらかの土が堆積してから周濠に落ち込んだ状況を示しており、周濠底面から出土した遺物はこの土師器だけである。したがって、坏1は古墳築造時あるいは埋葬時の祭祀と関連する可能性が高い。

（2）埴輪

円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪が出土している。

埴輪のほとんどは周濠内からの出土で、出土分布は北側の周濠に少なく、西側に多く見つかっている。特に、調査区の南端に近い場所では密度が高い。

形象埴輪には、人物・馬形埴輪があるが、いずれも破片で全体が復元できるものはなかった。人物埴輪3点（51-53）が西側周濠南部墳丘寄り（第29・30図K-K'）から、馬形埴輪1点（66）が西側周濠中ほど（第27・28図G-G'）から出土している（第53図）。

埴輪はいずれも、周濠が一定量自然堆積した間に墳丘寄りに倒れこみ、さらにその上に土が堆積した状

C L=48.0



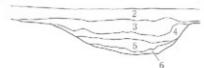
C'

D L=48.0



D'

E L=48.0

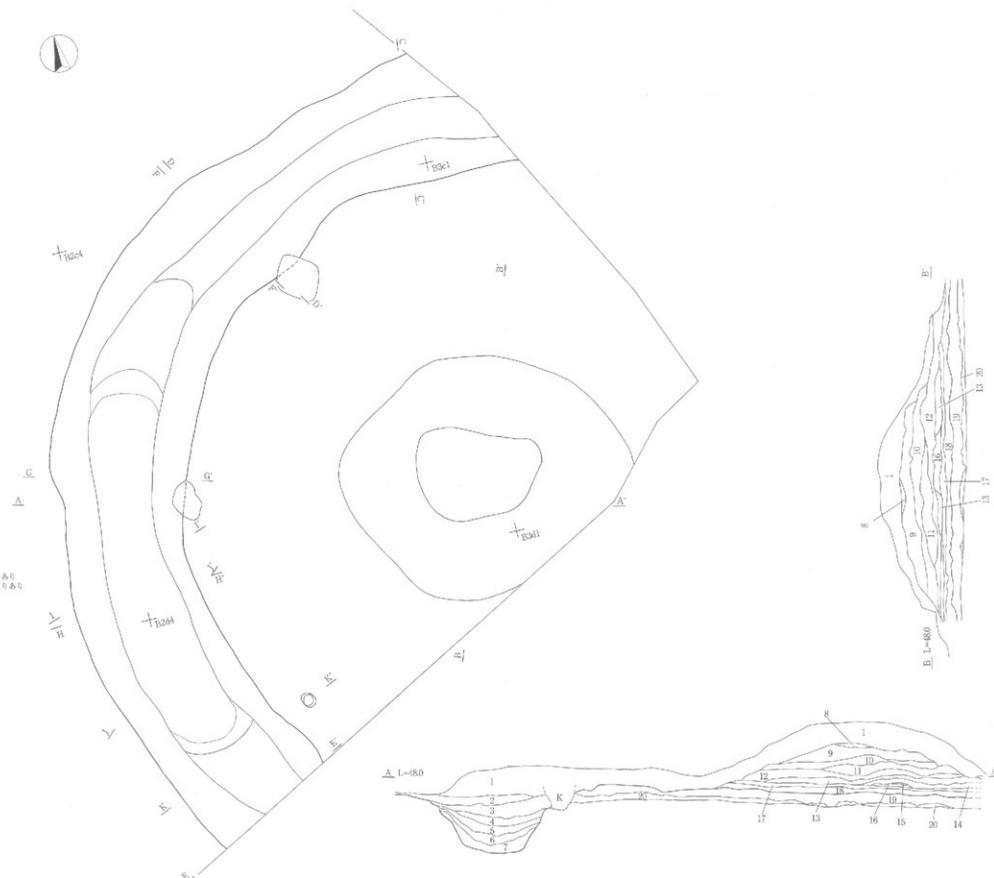


E'

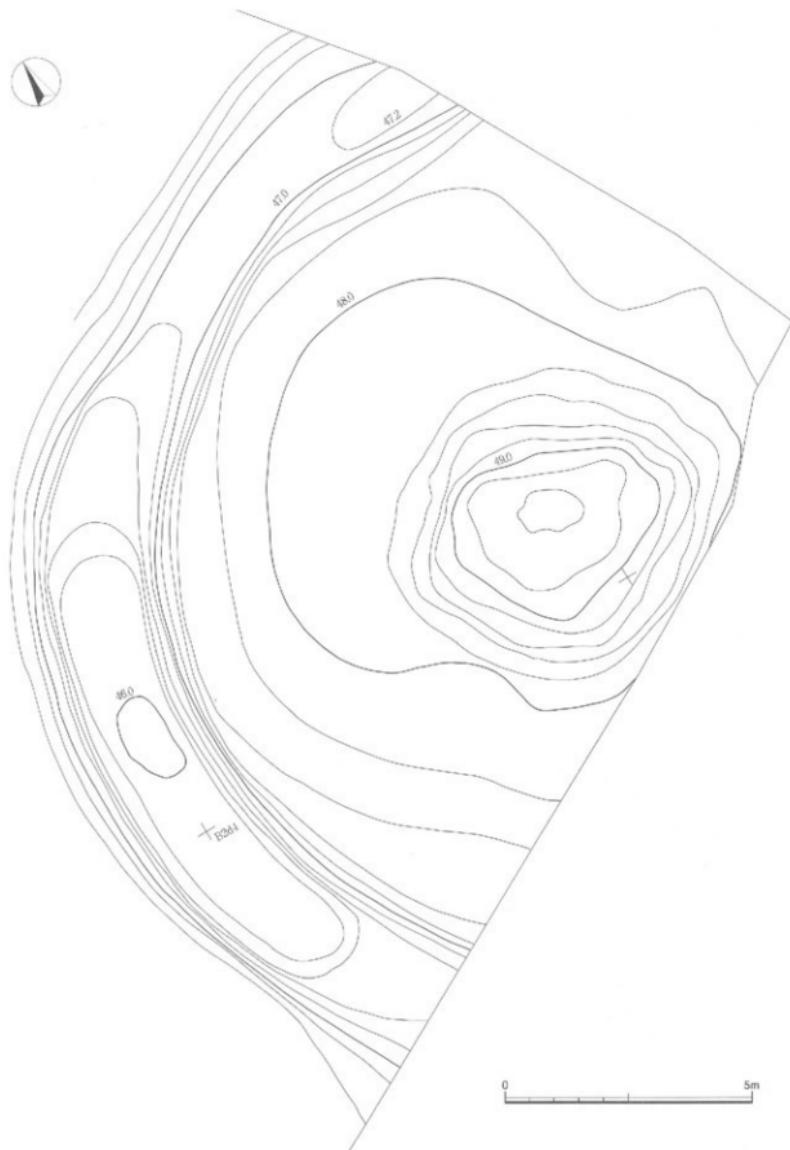
1号墳

- 1 黄褐色土 槙色土三等分の表土、均質で硬らかい、武土
- 2 黄褐色土 槃色土三等分の中土、均質で硬らかい
- 3 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、やや軟らかい
- 4 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、やや硬らかい
- 5 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、やや硬らかい
- 6 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、やや硬らかい
- 7 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、やや硬らかい
- 8 黑褐色土 黒色土合て
- 9 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、やや硬らかい
- 10 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、黄褐色土小ブロック多數、ややしまりあり
- 11 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、黄褐色土小ブロック多數、しまりあり
- 12 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、黄褐色土小ブロック多數、しまりあり
- 13 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、しまりあり
- 14 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、しまりあり
- 15 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、しまりあり
- 16 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、しまりあり
- 17 黄褐色土 粘土・砂利・石粉・砂利等を含む
- 18 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む
- 19 黄褐色土 ローム粒子・シルト・粘土・砂・石粉・砂利等を含む、黄褐色土
- 20 黄褐色土 地面コートへの耐候層、しまりあり

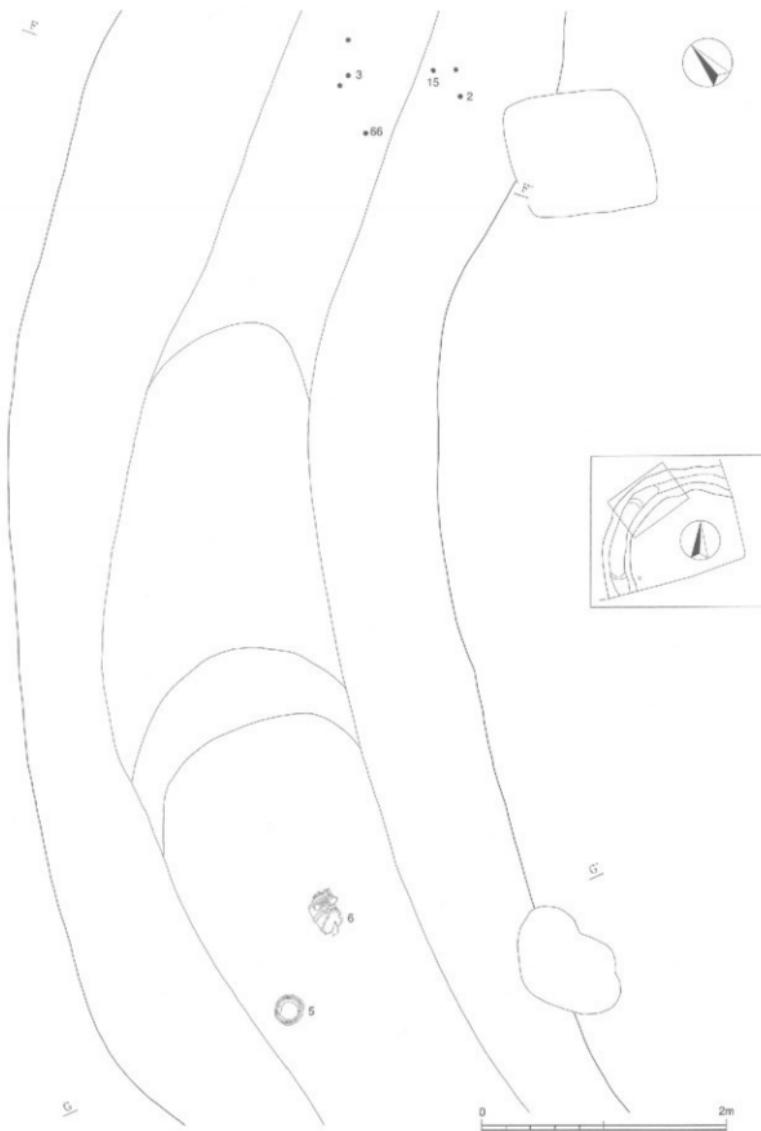
0 5m



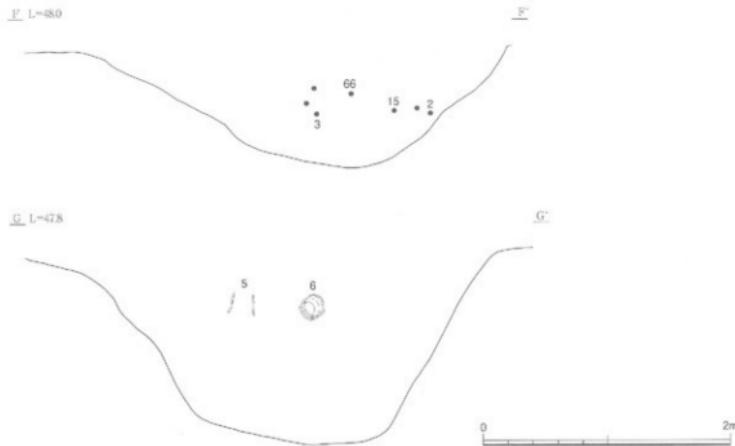
第25図 1号墳 墳丘実測図(1)



第26図 1号墳 墳丘実測図(2)



第27図 1号墳 遺物出土状況図（1）



第28図 1号墳 遺物出土状況図(2)

態で出土している(第27-30図)ことから、墳丘に立ち並んでいた埴輪は周濠が埋まりはじめしばらくして、墳丘から周濠に滑り落ち、その後さらに埋没したと考えられる。

西側の周濠内で30cmほどの大きさの礫が数個見つかったが、円筒埴輪とは垂直位置が大きく異なっていて、これらの礫と埴輪、あるいは墳丘との直接的な関係は見出しがたい(第29・30図J-J')。

円筒埴輪(表12-14、第32-37図2-43) 全体を復元できる円筒埴輪はすべて3条4段で、大きさや器形、色調、調整の特徴などは破片を含めて似かよっている。器形は底部からゆるやかに外傾し、口縁部に至ってややひらく。

復元できた6個体(10・11・14・21・28・29)の器高は47.6-51.7cm、口径は24.3-(27.3)cm、底径は14.4-(17.2)cmであり、やや細身である。

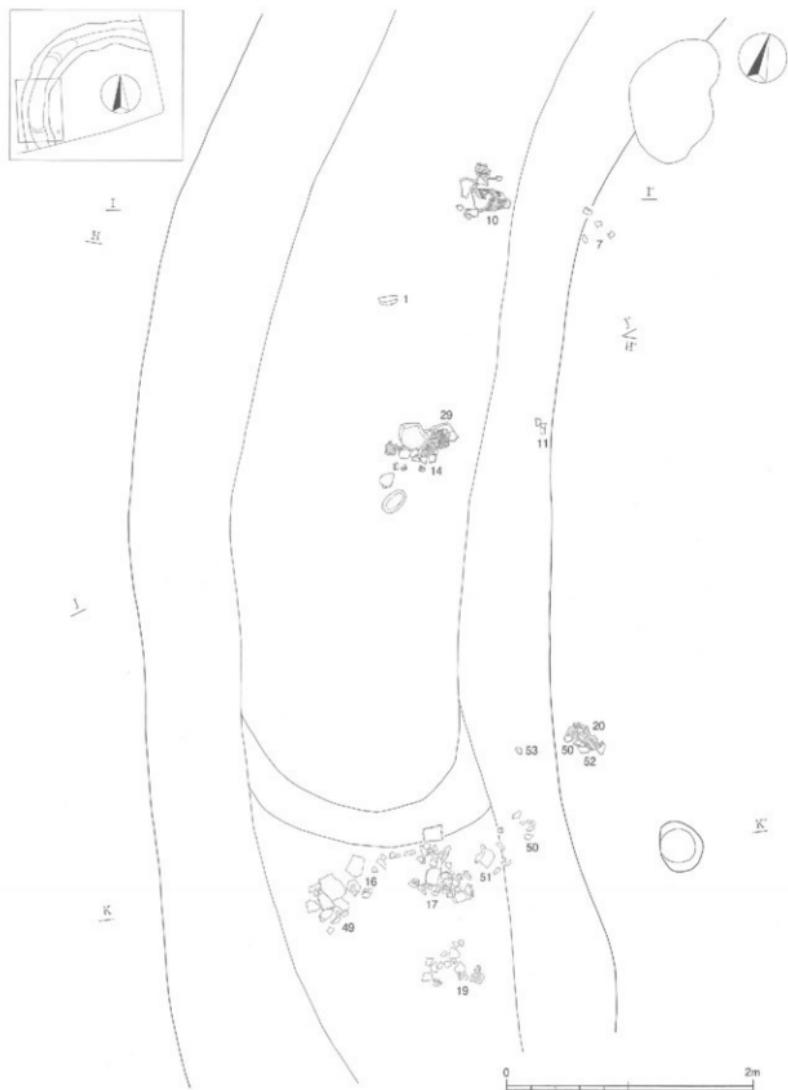
口縁部を第1段とし、下へ第2段、第3段と数えるとすると、円形の透孔は第2・3段にあけられており、それぞれの位置は直交している。突帯の断面形は低いM字形や台形である。段間(突帯間)が近似値を示す個体が多く、突帯設定をしていると考えられる。円筒下端に横方向のナデ、あるいは擦痕がみられるのは、突帯設定のための工具の当たりであろう。

外面はタテハケであるが、ハケメがはっきりしている。口縁部をナデる際、ヨコナデの下端が沈線状に残るものがある(20、21)。内面はハケ後ナデるが、口縁部周辺にはハケメの残るものがある。

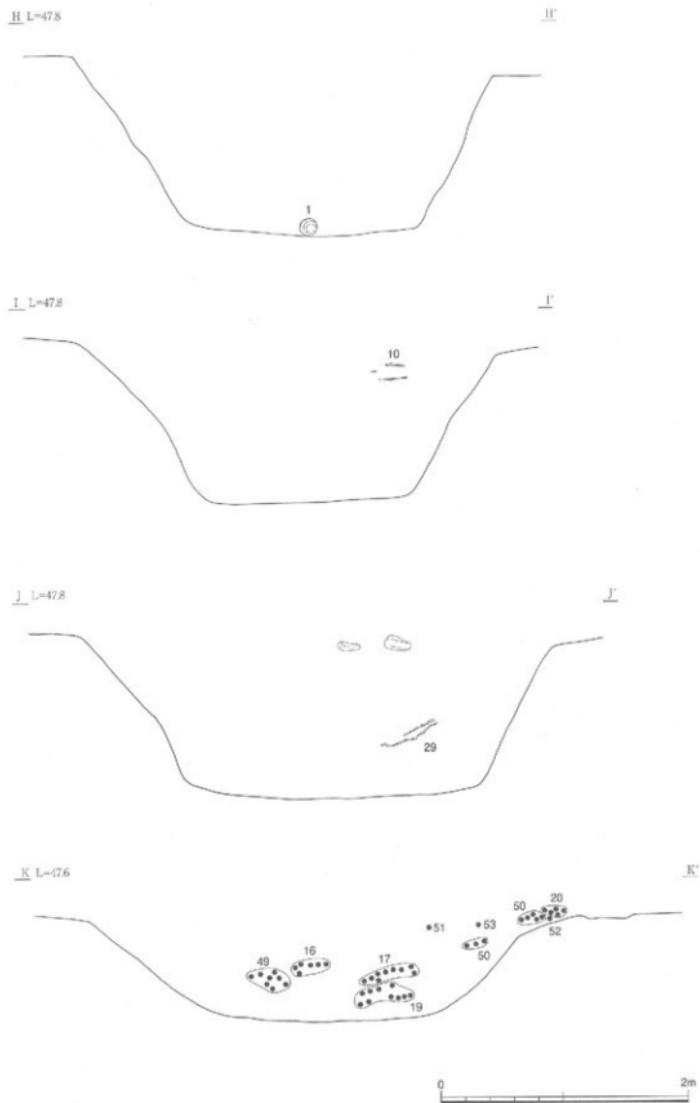
朝顔形円筒埴輪(表14、第37・38図44-50) 全体が復元できるものはなかった。5段目まで復元できたのは1点(49)で透孔は第3段と第5段にあけられており、6段以上あることは確実である。

第3段は肩がやや張っていて、短くひらく第2段を挟んで第1段は直線的に外傾し、口縁ではさらにひらく。透孔は円筒埴輪に比べて直径が小さい。口径のわかるもので40.0cmである。

外面はタテハケで、第3段のみタテハケ後横方向にナデを施す。内面はハケ後ナデする。



第29図 1号墳 遺物出土状況図(3)



第30図 1号墳 遺物出土状況図(4)

形像埴輪（表15、第39・40図51-73） 人物と馬形が出土している。51-54は人物埴輪。51は人物の腰部で、正面から左寄りに大刀を佩いている。脇に透孔があく。基部の直径は推定16.0cmである。52は人物の上着裾部分であるが、51とは別個体である。53は顔の下半部である。成形後、口を切り込むが、内面をナデる際にその一部が塞がってしまっている。鼻孔の表現はない。54は左手で、親指は欠損している。手の甲に刺突がある。53と54は胎土や色調、ナデの仕上げなどが似ていて、同一個体の可能性があるが、51・52とは別個体と考えられる。

55-73は馬形埴輪。55は馬形の鼻づらに近い部分と考えられる。56は馬形の鞍の一部。57,58は何から剥落したもので、馬形の馬具の飾り金具を表したものであろう。

59は種類不明である。何かから剥落している。



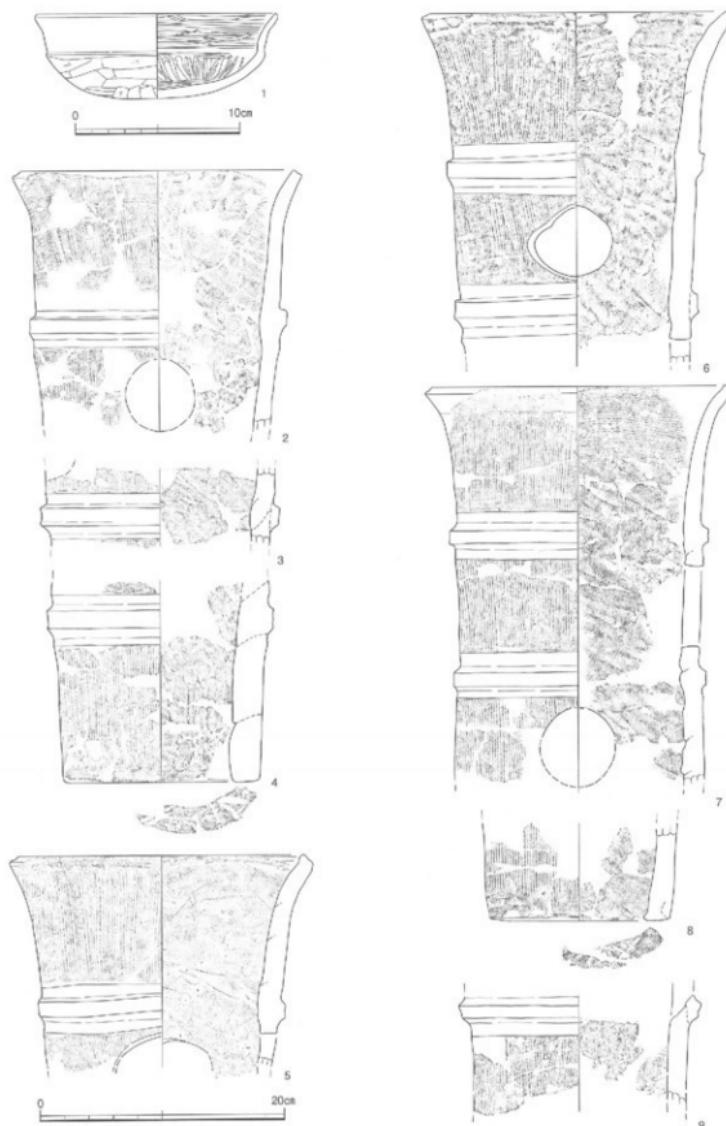
第31図 1号墳出土土器写真

表11 1号墳出土遺物観察表(1)

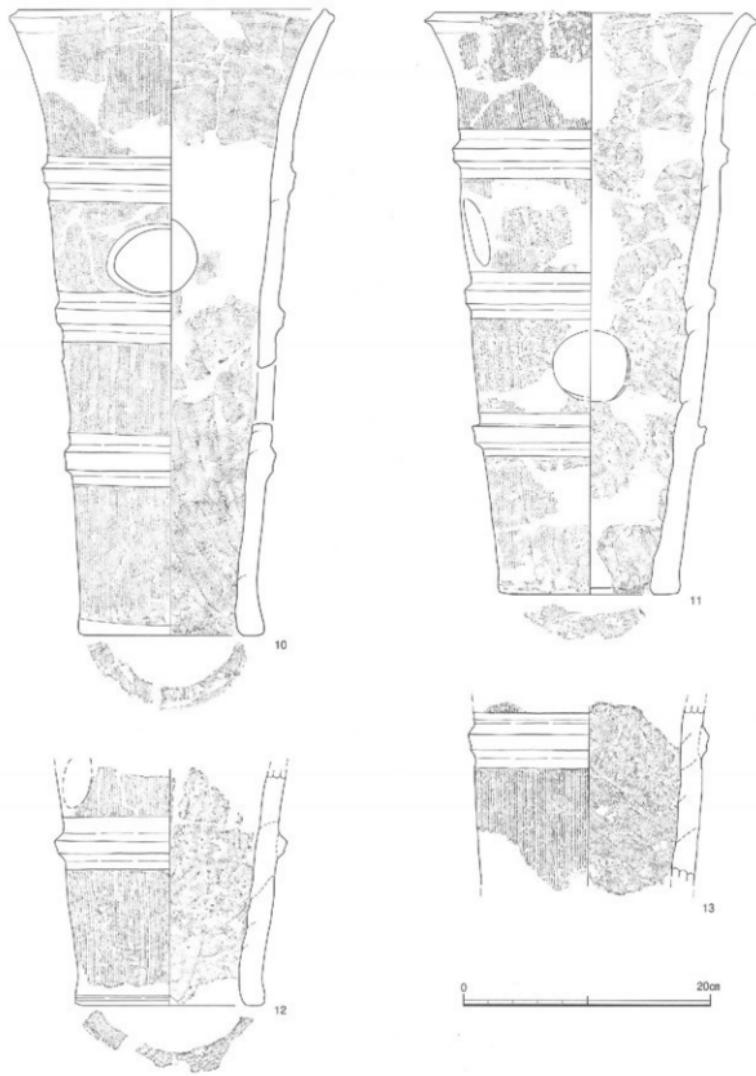
番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴			埴上	焼成	色調	備考
1	土器 壺	14.6 52 —	口縁部は外翫し、口唇部に向かって聞く曲面で開く。体部内面のミガキは中心部がやや乱れ、側面部は反射状。口縁部は横方向のミガキ。体部外面はラケヅリ。			金雲母	良好	橙色	

表12 1号墳出土遺物観察表(2)

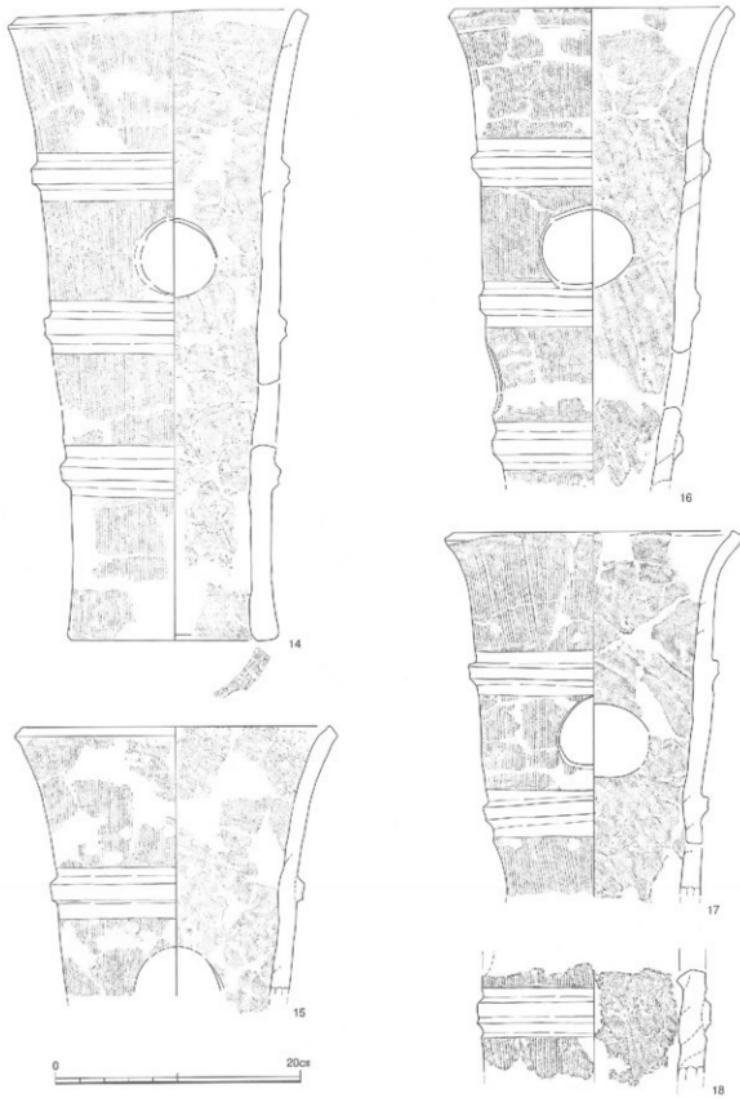
番号	基盤 種類	計測値(cm)	改変箇所(cm)	透 乳		断面	焼成	埴上・色調	成形・整形の特徴	備考	注記
				前 後	左右						
2	円筒	口径 底径 残高	23.4 21.4	1段	13.0		台形	良 好	石英、角閃石、長石 浅黄	外面 タテハケ後に縦ヨコナデ 内面 ナデ	No.7 屋3区 埴上
3	円筒	口径 底径 残高	— — 64	—	—		台形	良 好	石英、角閃石、白色粒、赤褐色 粒 にぶい粒	外面 タテハケ 内面 斜のナデ	No.6 黄
4	円筒	底径 残高	(16.0) 16.5	最高下段	23.5		台形	良 好	石英、角閃石、チャート、赤褐色 にぶい粒	外面 タテハケ、下端 程の捺痕 内面 ナデ	No.20 屋1区
5	円筒	底径 残高	24.0 17.3	—	1段 12.5		台形	良 好	石英、角閃石、チャート 練乳状の粒	外面 タテハク 後口縁ヨコナデ 内面 新のナデ	No.22
6	円筒	底径 残高	25.0 — 27.9	1段 — 2段	12.3 11.6	円 2段63×55	台形 底M字	良 好	石英、角閃石、チャート、赤褐色 (5mm, 15mm)	外面 タテハク 後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ	No.23
7	円筒	口径 底径 残高	(25.0) 27.9	1段 2段	12.5 11.5	円 2段68	台形 底M字	良 好	石英、角閃石、チャート、赤褐色 にぶい粒	外面 タテハケ 後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ、 焼成のハケ後に縦ヨコナデ、 新のナデ	No.8 屋3区
8	円筒	口径 底径 残高	(33.1) — 7.8	—	—			良 好	石英、角閃石、チャート にぶい粒	外面 タテハケ、下端 横の擦痕 内面 斜のナデ	No.9 屋3区 表土
9	円筒	口径 底径 残高	— — 9.5	—	—		底M字	良 好	石英、角閃石、白色粒 内: 深黄 外: 粉	外面 タテハケ 内面 粉のナデ	No.9
10	円筒	口径 底径 残高	(26.0) 14.9 51.2	1段 2段 3段 4段	14.0 11.4 11.6 14.2	円 2段64×72 3段55×64	台形	良 好	石英、角閃石、長石、赤褐色 にぶい粒	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ、 下端 横の擦痕 内面 新のナデ	第1改外周 壁2区表土



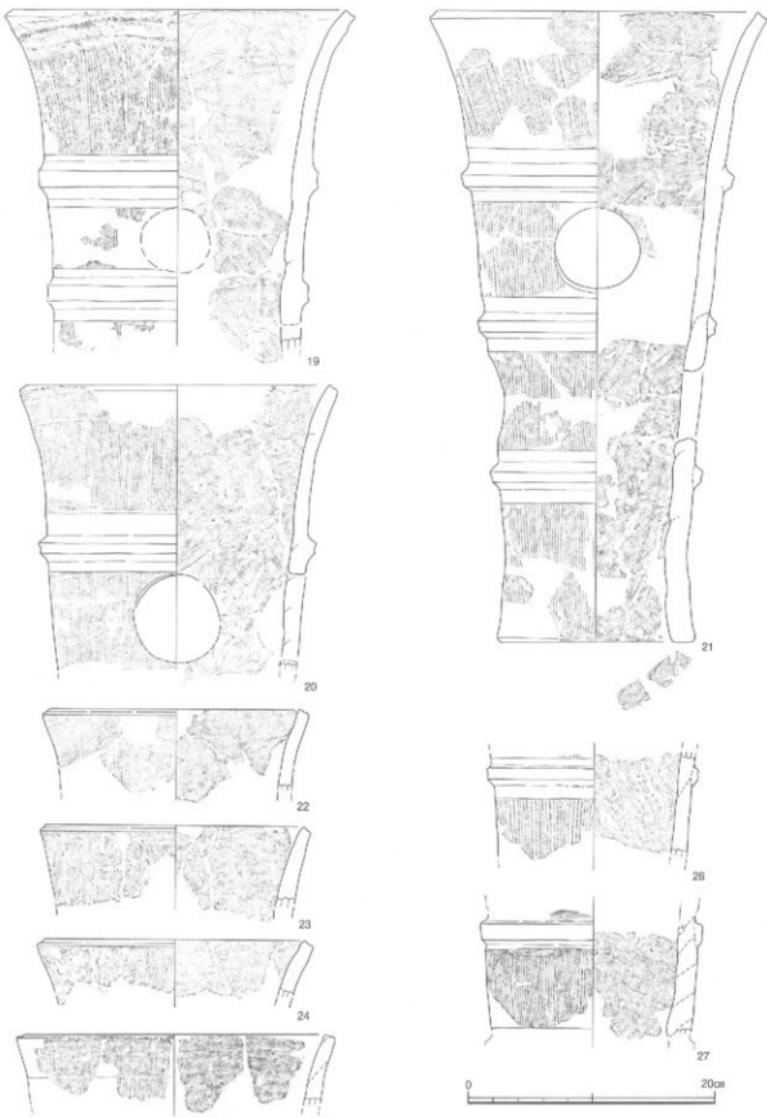
第32圖 1號墳出土遺物實測圖（1）



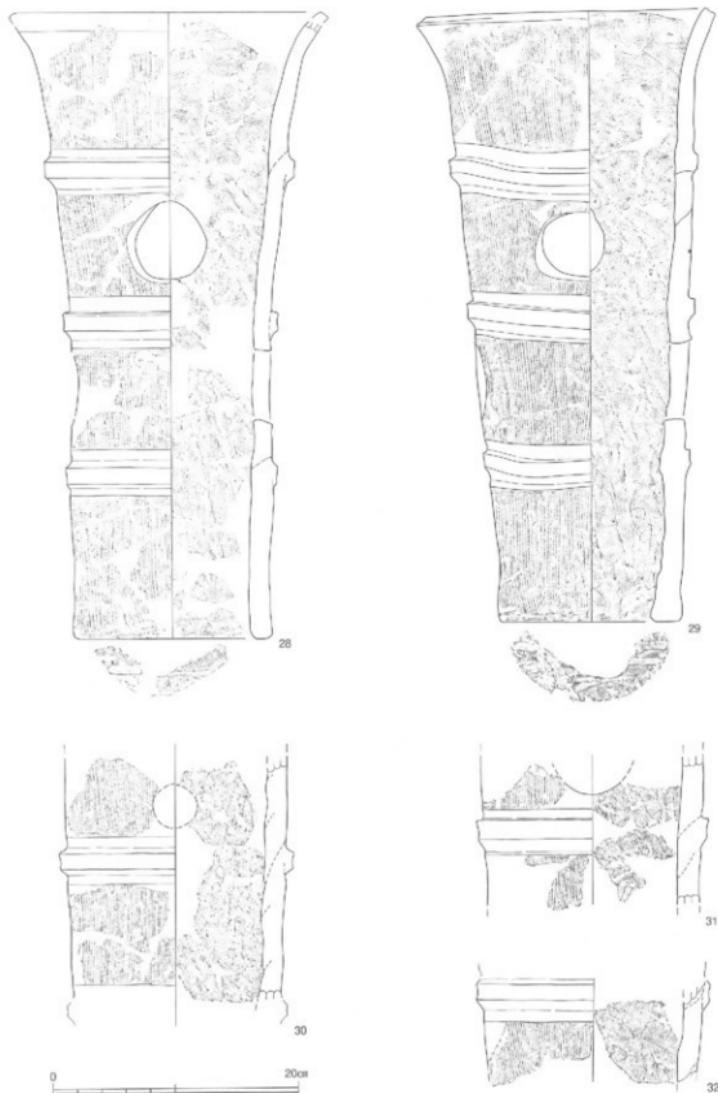
第33図 1号墳出土遺物実測図(2)



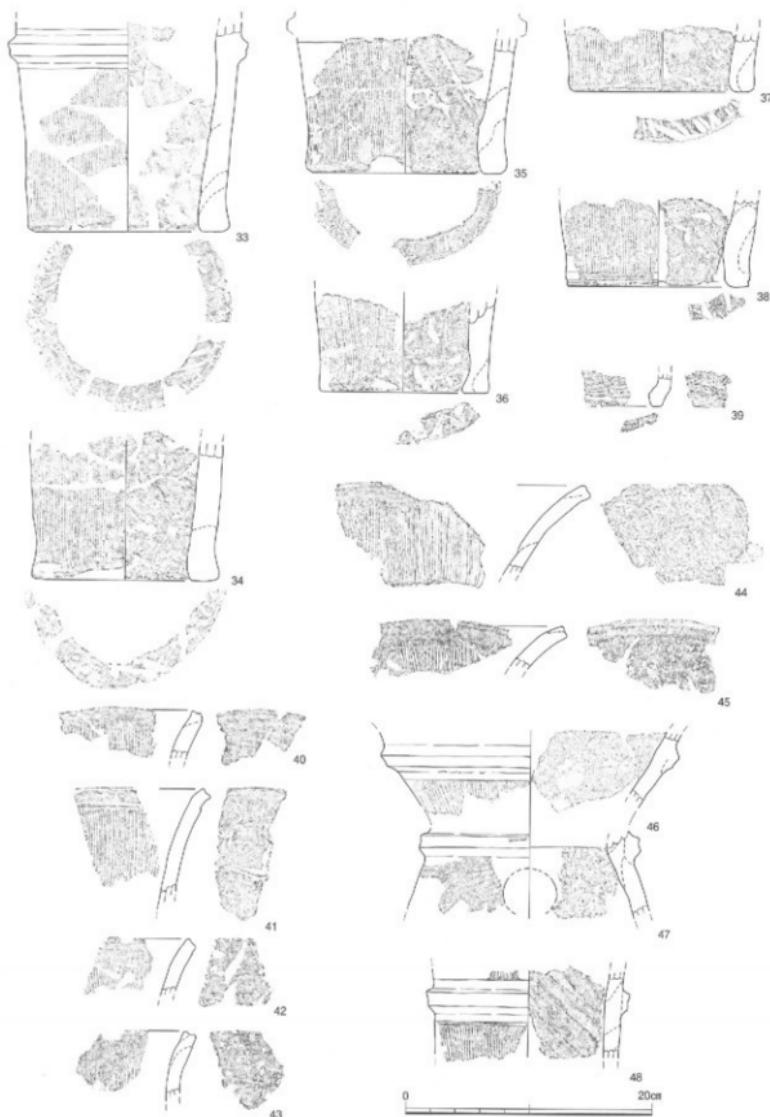
第34図 1号墳出土遺物実測図(3)



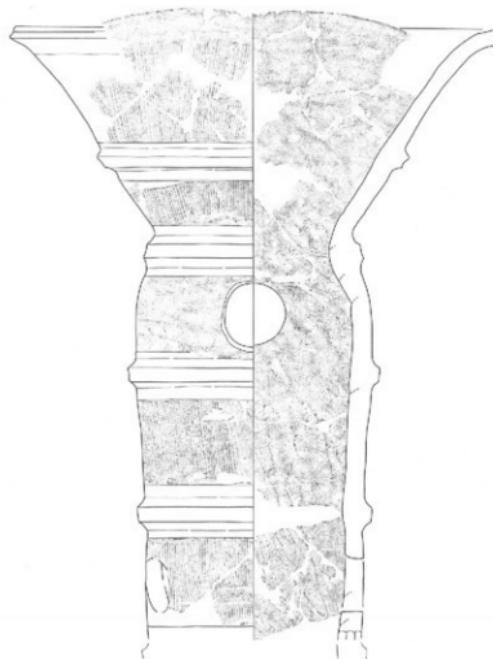
第35图 1号填出土遗物实测图(4)



第36図 1号墳出土遺物実測図（5）



第37図 1号墳出土遺物実測図（6）



49



50

第38図 1号墳出土遺物実測図(7)

表13 1号墳出土遺物調査表(3)

番号	地名 墓地	計測値(cm)	段間隔(cm)	通孔 径 直 径 (mm)	実寸 面積 (mm × mm)	形状 色	胎土・色調	成形・整形の特徴	備考	説明
11	円筒	口徑 底径 高さ	26.9 (4.4) 42.6	1段 2段 3段 4段	11.6 11.6 11.4 13.0	台形～ 底M字 好	石英、角閃石、チャート、赤褐色 色、位、黒曜石(8mm) 柱	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ、 下端 棚の振底 内面 斜のナデ	外側削割番 しい	No13・25、 周1・3区、 表土
12	円筒	口徑 底径 高さ	11.8 (15.5) 19.4	1段 2段 3段 4段	— — — 13.0	台形 好	石英、角閃石、チャート、赤褐色 色、位、黒曜石(8mm) 柱	外面 タテハケ、下端 棚の振底 内面 斜のナデ		No10・21、 周3区
13	円筒	口徑 底径 高さ	11.8 (15.5) 14.8	1段 2段 3段 4段	— — — 13.0	台形～ 底M字 好	石英、白色粒、淡石、やや粉粒 に似る	外端 タテハケ 内面 斜のナデ		No14
14	円筒	口徑 底径 高さ	24.3 (17.2) 51.7	1段 2段 3段 4段	13.6 12.6 12.1 12.4	台形～ 底M字 好	石英、角閃石、長石、チャート、赤褐色 色、位、赤褐色柱 柱	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ、 下端 棚の振底 内面 ナデ		No28・30、 33・35・36、 38、 周3区、表土、 No25・四2、 3・直3区、 塙表土
15	円筒	口徑 底径 高さ	26.2	1段	13.5	台形 好	石英、角閃石、チャート、赤褐色 色、位、チャート斑(11×5mm) 柱	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜、絆のナデ		No27・28、 30・31、 周3区、表土
16	円筒	口徑 底径 高さ	23.0	1段 2段	12.7 6.5×8.0	台形 好	石英、角閃石、赤褐色柱 柱	外端 タテハケ 内面 ナデ		No27・28、 35、 周3区
17	円筒	口徑 底径 高さ	24.0	1段	11.5	台形～ 底M字 好	石英、角閃石、赤褐色柱 柱	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ		
18	円筒	口徑 底径 高さ	29.9	1段	—	台形 好	石英、赤褐色柱 柱	外端 タテハケ 内面 斜のナデ		周1区
19	円筒	口徑 底径 高さ	26.4 22.5	1段 2段	13.9 9.4	台形 好	石英、角閃石、チャート、赤褐色 色、位、柱(7mm)	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 ナデ		No27、周3区
20	円筒	口徑 底径 高さ	25.8	1段	13.4	円 2段 底M字 好	石英、角閃石、チャート、赤褐色柱 柱	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ、 内面 棚から底部に沈線 内面 ナデ	削離者し い	No40、 周3・直3区、 塙表土
21	円筒	口徑 底径 高さ	(27.3) : 1段 (16.0) : 2段 51.7	1段 2段 3段	13.9 12.0 12.3	台形～ 底M字 好	石英、角閃石、長石、赤褐色柱 柱	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ、 内面 柱色柱 内面 ナデ		No28・33、 度1・3区
22	円筒	口徑 底径 高さ	21.5	1段	—	台形 好	石英、角閃石、長石、赤褐色柱 柱	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ		周2区、 塙表土
23	円筒	口徑 底径 高さ	(22.0)	1段	—	台形 好	石英、角閃石、赤褐色柱 柱	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ		周1・2区
24	円筒	口徑 底径 高さ	(22.5)	1段	—	台形 好	石英、角閃石、赤褐色柱、白色 柱	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ	外内面とも 剥離者し い	No31、 周3区
25	円筒	口徑 底径 高さ	26.0	1段	—	台形 好	石英、角閃石、赤褐色柱 柱	外端 タテハケ		
26	円筒	口徑 底径 高さ	57	1段	—	底M字 好	石英、角閃石、赤褐色柱、白色 柱	内面 斜のナデ		周表土、
27	円筒	口徑 底径 高さ	79	1段	—	底M字 好	石英、角閃石、赤褐色柱、白色 柱	外端 タテハケ、突唇部付にも 一端タテハケか 内面 斜のナデ		周表土、
28	円筒	口徑 底径 高さ	10.0	1段	—	台形 好	石英、角閃石、赤褐色柱、白色 柱	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ、 内面 上半 斜のナデ、下半 斜の ナデ		
29	円筒	口徑 底径 高さ	12.6 (16.0) 50.6	2段 3段 4段	12.5 12.6 13.4	台形 好	石英、角閃石、長石、赤褐色柱、 白色柱、柱(1~2mm)	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ、 下端 棚の振底 内面 斜のナデ		No34
30	円筒	口徑 底径 高さ	21.6 14.4 50.2	1段 2段 3段	12.6 11.9 12.3	台形 好	石英、角閃石、長石、赤褐色柱、 白色柱、柱(1~2mm)	外端 タテハケ後口縁ヨコナデ、 内面 斜のナデ	削離が基盤 の可能性あ り	周3区
31	円筒	口徑 底径 高さ	12.8	1段	—	台形 好	石英、角閃石、赤褐色柱、白色 柱	外端 タテハケ 内面 斜のナデ		周3区
32	円筒	口徑 底径 高さ	8.4	1段	—	台形 好	石英、角閃石、赤褐色柱、白色 柱	外端 タテハケ 内面 斜のナデ		周3区
33	円筒	口徑 底径 高さ	16.2 17.2	1段	—	台形 好	石英、角閃石、赤褐色柱、白色 柱	外端 タテハケ、下端 棚の振底 内面 ナデ		周3区
					縦下段 15.0					

表14 1号墳出土遺物観察表(4)

番号	車輪 種類	前測量(cm)	後測量(cm)	直 孔 径 (mm) (横×縦)	安 定 度 数	深 度	断面・色調	成形・形状の特徴	備考	記号
34	円筒 底深 底高	底深 (53.1) 底高 11.5		長 好	石英、チャートに赤い斑駁	外露 内側 斜めナダ	タテハケ、下端 横の擦痕		No31, 周34	
35	円筒 底深 底高	底深 (16.2) 底高 11.1		良 好	石英、角閃石、チャート に赤い斑駁	外露 内側 斜めナダ	タテハケ、下端 横の擦痕 斜めナダ		周2区	
36	円筒 底深 底高	底深 (44.0) 底高 8.2		良 好	石英、角閃石、長石、赤褐色 斑	外露 内側 ナダ	タテハケ		周2区	
37	円筒 底深 底高	底深 (13.0) 底高 5.4		良 好	石英、チャート、赤褐色 斑	外露 内側 斜めナダ	タテハケ、下端 横の擦痕		周2区	
38	円筒 底深 底高	底深 (15.0) 底高 7.1		良 好	石英、チャート、長石、赤褐色 斑	外露 内側 斜めナダ	タテハケ、下端 横の擦痕			
39	円筒 底深 底高	底深 2.6		良 好	石英、角閃石、赤褐色斑、白色 斑	外露 内側 ナダ	横の粗いナダ		周2区	
40	円筒 底深 底高	底深 3.9		良 好	石英、角閃石、赤褐色斑、白色 斑 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケ後口端ヨコナダ		周2区、 頂正丸上	
41	円筒 底深 底高	底深 9.7		良 好	石英、角閃石、赤褐色斑、白色 斑 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケ後口端ヨコナダ に赤い斑駁		周3区	
42	円筒 底深 底高	底深 4.8		良 好	石英、角閃石、白色 内 外 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケ後口端ヨコナダ		周	
43	円筒 底深 底高	底深 5.7		良 好	角閃石、赤褐色斑、白色 内 外 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケ後口端ヨコナダ		周2区	
44	馬蹄形 円筒	底深 底高		良 好	石英、角閃石、白色 内 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケ後口端ヨコナダ		周3区	
45	馬蹄形 円筒	底深 底高		良 好	石英、角閃石、赤褐色斑、白色 内 外 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケ後口端ヨコナダ		No12, 周3区	
46	馬蹄形 円筒	底深 底高		低M字 数段	石英、角閃石、赤褐色斑、白色 内 外 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケ	2段目内側 ナダ	周2区	
47	馬蹄形 円筒	底深 底高		低M字 数段	石英、角閃石、赤褐色斑、白色 内 外 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケにハケ現あり	3段目	周2区	
48	馬蹄形 円筒	底深 底高		高M字 数段	石英、角閃石、白色 内 外 に赤い斑駁	外露 内側 ナダ	タテハケ	3段目 内側 ナダ	周2区	
49	馬蹄形 円筒	底深 底高	4段 50.3	1段 3段 109 73 115.4	直 孔 径 3段 56×52	外形 直 孔 径 5段 42	タテハケ後口端ヨコナダ ビスピルのナダ 内側 第1・2段横のナダ、上 半 斜めナダ、下半 斜めナダ	No27・28・ 29・30・37、 周3区		
50	馬蹄形 円筒	底深 底高	26.4	1段 3段	白形一 低M字 数段	石英、角閃石、チャート、赤褐色 斑	タテハケ後口端ヨコナダ 3段タテハケ後ヨコナダ 内側 横・斜めナダ	No27・33・ 34・35・38、 周3・西4、 埴丘裏2		

60は緩く曲がる突帯が貼りついた破片で、馬形あるいは人物が想定できるが胎上の類似から馬形の可能性が高い。61・62は馬形の皮帶表現の一部。63は馬形につく鈴である。

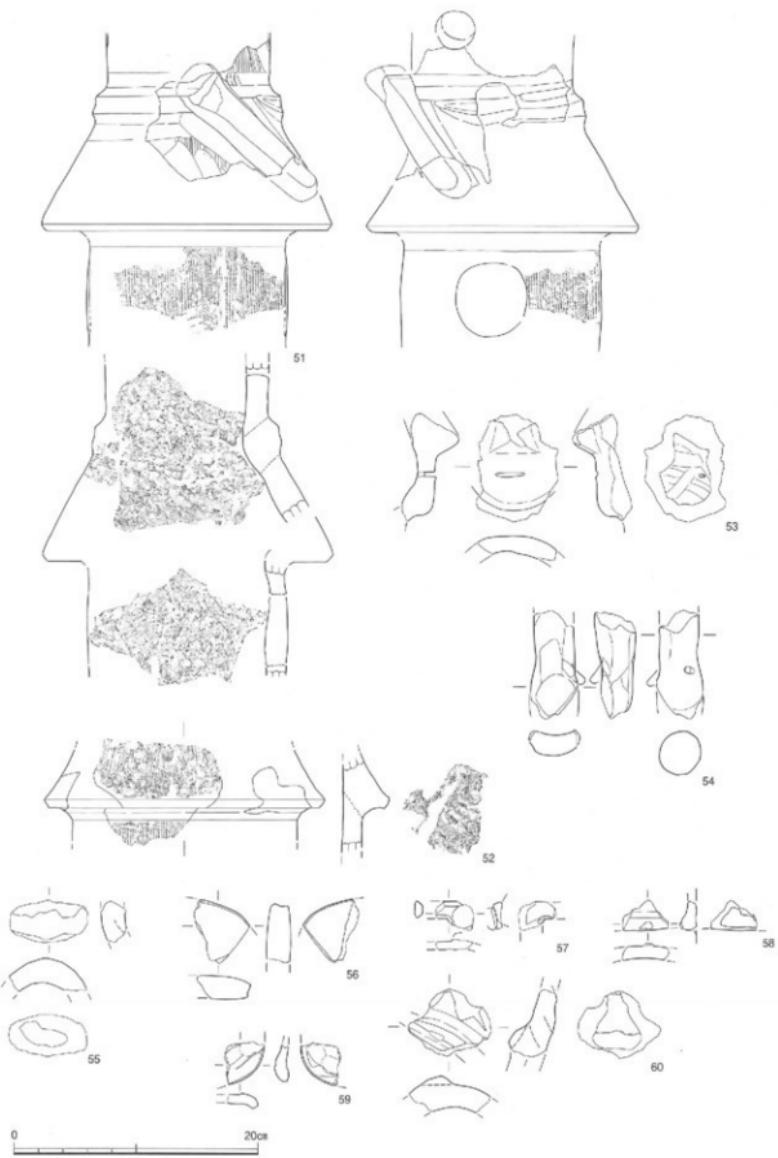
64は馬形の前股左脚側で、腹孔がある。65は同じ個体の後股で、両脚付け根で欠損している。66は別個体の前股で、右脚側である。64と同様腹孔がある。

67は帶が貼りついた胴の一部、68も帶の貼りつきが剥離している。69は貼りつく粘土板が伸びていくところで欠損しているもので、隙泥の取りつき部分と考えられる。

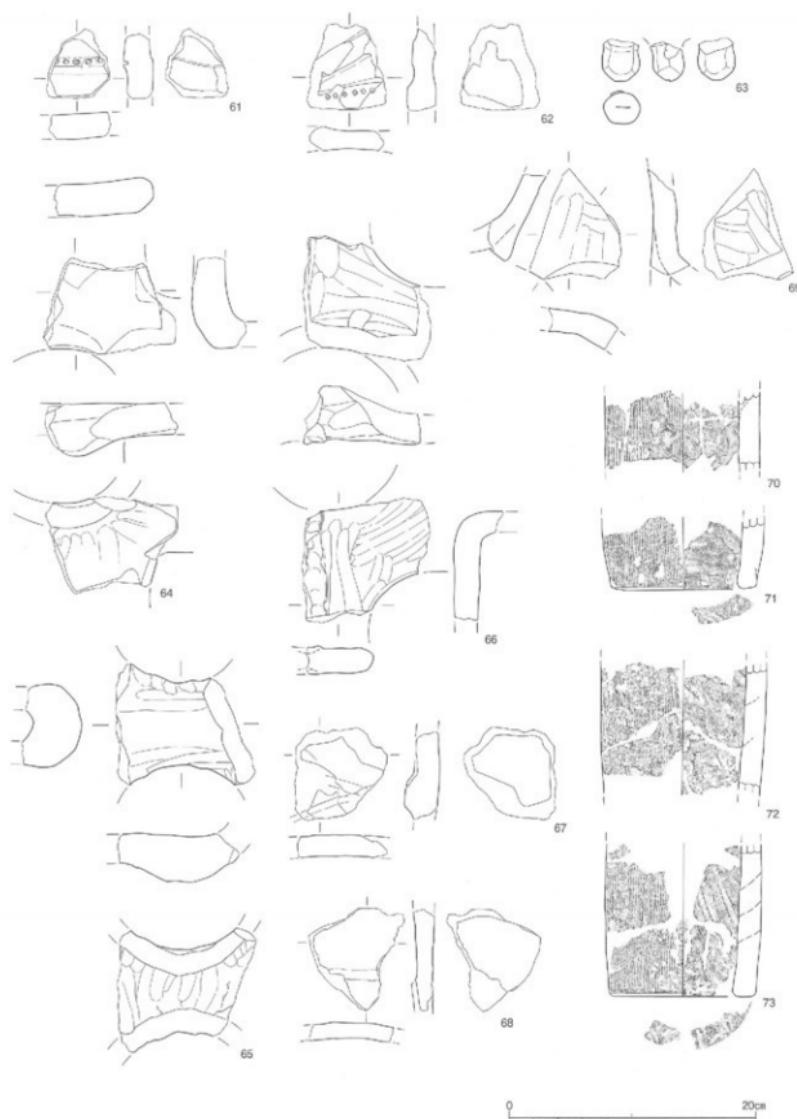
70-73は馬の脚でいずれも直徑はおよそ13cmである。

(55-59)、(60-65、67、71-73)、(69・70)はそれぞれ同一個体。

68の胎土・焼成は後述する1号土坑の馬形埴輪(表21、第55図)に類似している。



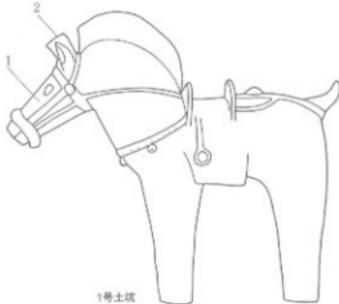
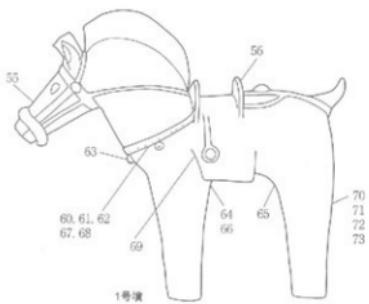
第39図 1号墳出土遺物実測図（8）



第40図 1号墳出土遺物実測図（9）

表 15 1号墳出土遺物観察表(5)

番号	取締 標題	計測値(cm)	施或	黏土、色調	成形・施彩の特徴	註記
51	人物	残長 13.0×15.0	良好	石英、チャート、赤褐色 板=12.5cm	人物横部分、内面は模化による彫刻が著しい。外側ハケ後一部ナ ゲ、内面ナゲ、添出部前タハケ、内面前のナゲ。	No32. 西高3区
52	人物	最大径 6.30 基部径 18.0	良好	石英、角閃石、チャート 灰質	人物上顎部分、外側タハケ、内面ナゲ。	No41. 湖東区
53	人物	残具 8.8×6.7	良好	良 石英、角閃石、共石、赤褐色 切出板	人物頭の下顎部、鼻孔・乳頭は白い。口元へて削りこむが、口元だけ眞鍛 している。各の骨盤が取ぐるるので、頭は赤目してて可能がある。内面ナゲ。	No19. 門司区
54	人物	残長 8.8×3.0	良好	破損 石英、角閃石、長石 板	左手、腕部は欠損。粘土で中央に成形し、ナゲで仕上げる。掌は ややくびれ。	埴丘表土
55	馬形	残長 3.5×6.3	良好	細密 石英、角閃石、チャート、硬質白色粘 土	馬の頭、鼻に近い部分、内外面ともナゲ。	埴丘表土
56	馬形	残長 4.8×4.5	良好	細密 石英、角閃石、赤褐色、硬質白色粘 土	タチガミが頬の一筋、内外面ともナゲ、上端面ナゲ。	埴丘表土
57	馬形	残長 3.0×2.4	良好	細密 石英 板	細長い骨盆か、粘土円筒の背筋は欠落している。削離面がある。部位 不明。	表土
58	馬形	残長 2.4×3.8	良好	細密 石英 板	円形の彫りが欠落している。削離面がある。部位不明。	周
59	馬形	残長 3.1×3.3	良好	細密 石英 板	舌で成形し、内面とも指ナゲ。削離面あり、部位不明。	3号ファン 明治期
60	馬形	残長 5.5×6.9	良好	石英、角閃石、長石、赤褐色粘 土に赤い赤斑	体部に凸上筋を貼りつける。部位不明。人物面部の可能性もある。	周2、3区
61	馬形	残長 5.6×5.1	良好	やや密 石英、角閃石、赤褐色粘、硬質白色粘 土	粘土膏脂付し、方形切突を施す。内外面ともナゲ。部位不明。	埴丘表土
62	馬形	残長 7.0×6.4	良好	やや密 石英、赤褐色粘、硬質白色粘 土	全部をナゲで仕上げる。方形切突を施すと泡さない帯とを貼り つける。部位不明。	3号ファン 表土
63	馬形	残長 3.2×3.0	良好	細密 石英、角閃石、赤褐色粘、硬質白色粘 土	頭部をもつ隕。全体をナゲでなめらかに仕上げている。	埴丘表土
64	馬形	残長 10.7×8.0	良好	石英、角閃石、長石、赤褐色粘 土	前駄(左脚側) 裏面、裏孔がある。内外面ともナゲ。	No2
65	馬形	残長 11.4×10.0	良好	やや密 石英、角閃石、長石、赤褐色粘 土	後股部分、内外面ともナゲ。	埴1
66	馬形	残長 10.4×10.2	良好	細密 石英、角閃石、赤褐色粘 土	前駄(右脚側)。前脚は粘土のつぎ目で所持しているが粘土を尾 して強調した痕跡がある。脚孔がある。内外面ともナゲ。	北東表土
67	馬形	残長 7.4×7.4	良好	やや密 石英、角閃石、硬質白色粘 土	粘土膏脂付が一部残る。部位不明。	2号表土
68	馬形	残長 8.3×7.7	良好	細密 石英、角閃石、チャート、硬質白色粘 土	粘土膏脂を貼りつけるが、削離している。内外面ともナゲ。部位不明。	表土
69	馬形	残長 9.2×7.4	良好	石英、角閃石、長石、赤褐色粘、硬質白色粘 土	左耳部の頭とりつき部分、内外面ともナゲ。	周2
70	馬形	残長 6.4	良好	石英、角閃石、赤褐色粘 土に赤い模外、神	飼の一部。	埴丘表土
71	馬形	底径 (11.7) 残高 6.0	良好	石英、角閃石 板	飼の一部、外側タハケ、内面ナゲ。	埴丘表土
72	馬形	残長 10.9	良好	石英、角閃石、チャート 板	飼の一部、外側タハケ、内面ナゲ。	北東2区、 西高3区
73	馬形	底径 (11.7) 残高 12.5	良好	石英、角閃石、チャート、赤褐色粘 内: 硬質粘 外: 灰質粘	飼の一部、外側タハケ、内面ナゲ。	周3区、 西高3区



2号墳（第42・43図）

墳丘を完全に削平された円墳である。周濠の上部も削平を受けている。東側周濠は一部調査区をはずれている。遺構検出状況では埋葬施設の痕跡ではなく、構築物や遺物に関する仮説もない。

位置 調査区の東寄り、1号墳の西側7.5mに位置する（C2a2グリッド）。

規模 墳丘直径16.5m。周濠の外縁で22mである。

墳丘 地山まで削られた状況で、墳丘だけでなく周濠上部も残っていない。北から南に傾斜する台地縁にあり、南半分は緩やかに下がっている。南北の周濠上端の比高差は約1mである。

周濠 幅は現状で3.0-3.5m、深さは1.4-1.8m。

埋葬施設 見つからなかった。

出土遺物 土師器と埴輪が出土している。

（1）土師器

周濠内の覆土中から小片で坏が出土している（表16、第47図1）。赤く焼きあがる鉄分の多い胎土を使用し、橙色を呈す。内面のミガキは整った放射状である。体部外面はヘラケズリ後弱いミガキをかけてていねいに仕上げる。口縁部の外反は屈曲がなく、復元径は小さく器高は高い。

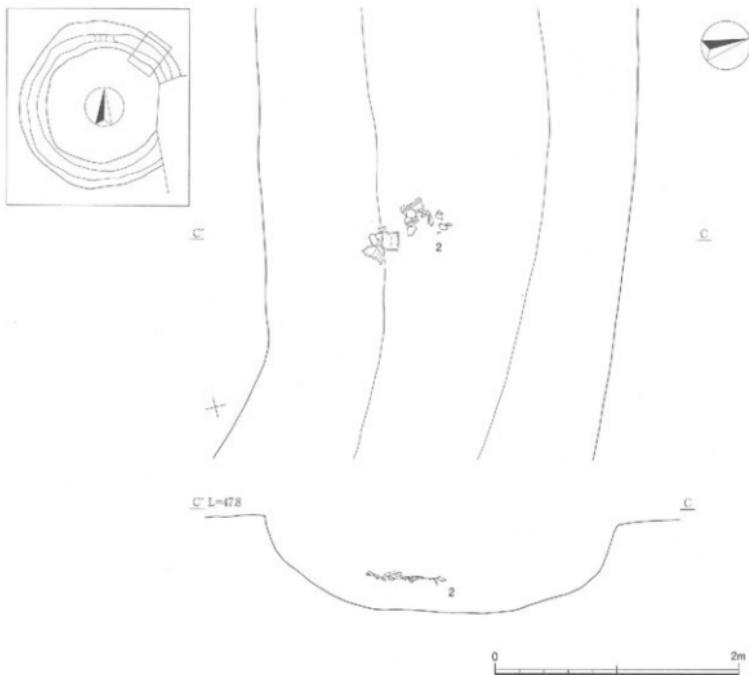
（2）埴輪

円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪が出土している。埴輪のほとんどは周濠内からの出土で、出土分布は北半分に少なく、南半分に多く見つかっている（第54図）。出土状況はいずれも、周濠が一定量自然堆積した面に墳丘寄りに横たわり、さらにその上に土が堆積している（第41・44-46図）。この状況は1号墳と共に通しており、2号墳でも周濠が埋まりはじめてしばらくして、墳丘に立ち並んでいた埴輪が周濠に滑り落ち、その後さらに埋没したと考えられる。

円筒埴輪（表17-20、第47-52図2-49） 全体を復元できる円筒埴輪はすべて2条3段で、大きさや器形、色調、調整の特徴などは破片を含めて似かよっている。器形は底部から直線的にやや外傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反するものが多い。復元できた8個体（4、5、6、7、11、12、15、16）での器高は37.2-40.5cm、口径は16.0-22.5cm、底径は11.1-（14.7）cmで、1号墳の埴輪と比較すると、小型で細い。器壁も薄くつくられている。色調も全体に赤褐色のものが多く、橙色が多くて白っぽく見える1号墳とは様子が異なる。口縁部を第1段とし、下へ第2段、最下段を第3段とすると、第1・2段の段間が約10cmであるのに対し、第3段では16-18cmと長く、脚高の器形である。

円形の透孔は第2段にあけられている。突帯の断面形は低いM字形、台形、ほぼ三角形に近いものがある。円筒下端に横方向のナデ、あるいは擦痕がみられ、突帯設定のための工具の当たりと推測できるので、突帯設定をおこなっていると考えられる。また、第2段の段間と同じ間隔の沈線が、第1段にもはいるものがあり（3、7、9）、その沈線は口縁とは平行せず、第1突帯と平行しているので、なんらかの理由で突帯をまわさない第1段にも突帯設定線をいれてしまったと考えられる。第2段にも沈線がまわっているものが2点ある（12、16）。12では高さ23.5cm、16では21.5cmの位置に認められるが、16では幅広くひきずっと一部が沈線のようにみえている。

ハケメは凹凸が少なく明瞭ではない。基本的にタテハケのみであるが、第2段にタテハケ後に横方向のナデを全面（8）あるいは透孔周辺に施すものがある（11、16、21、33）。ヨコハケの技法のようであるがハケメは見えない。口縁部の破片でタテハケ後、継方向のナデを施したもののが1点ある（32）。口縁部のヨコナデは口唇部に限られるものが多い。



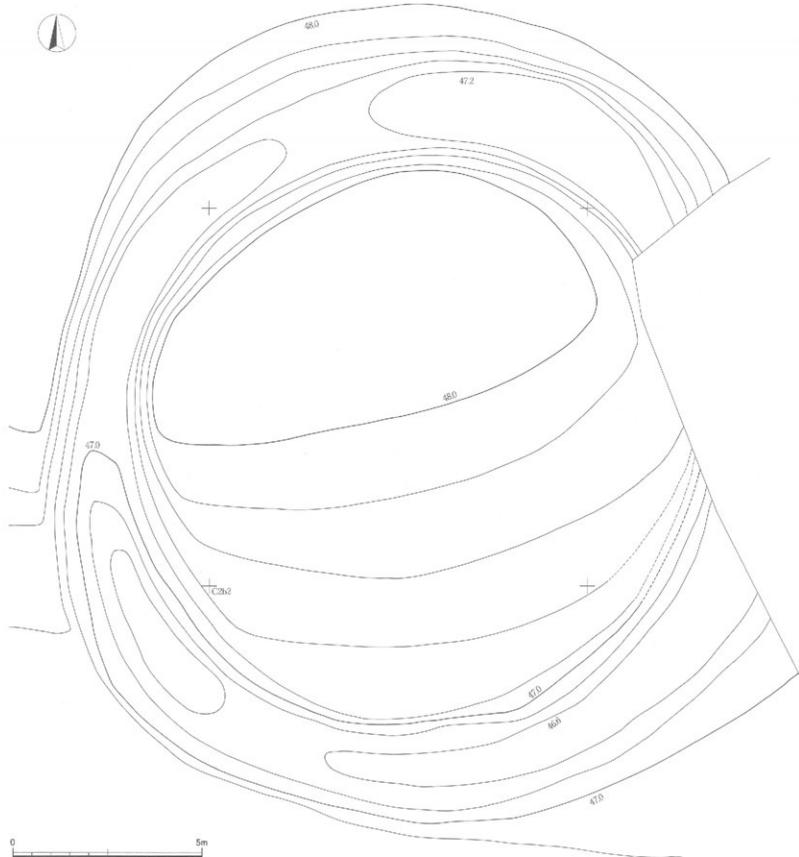
第41図 2号墳 遺物出土状況図(1)

表16 2号墳出土遺物観察表(1)

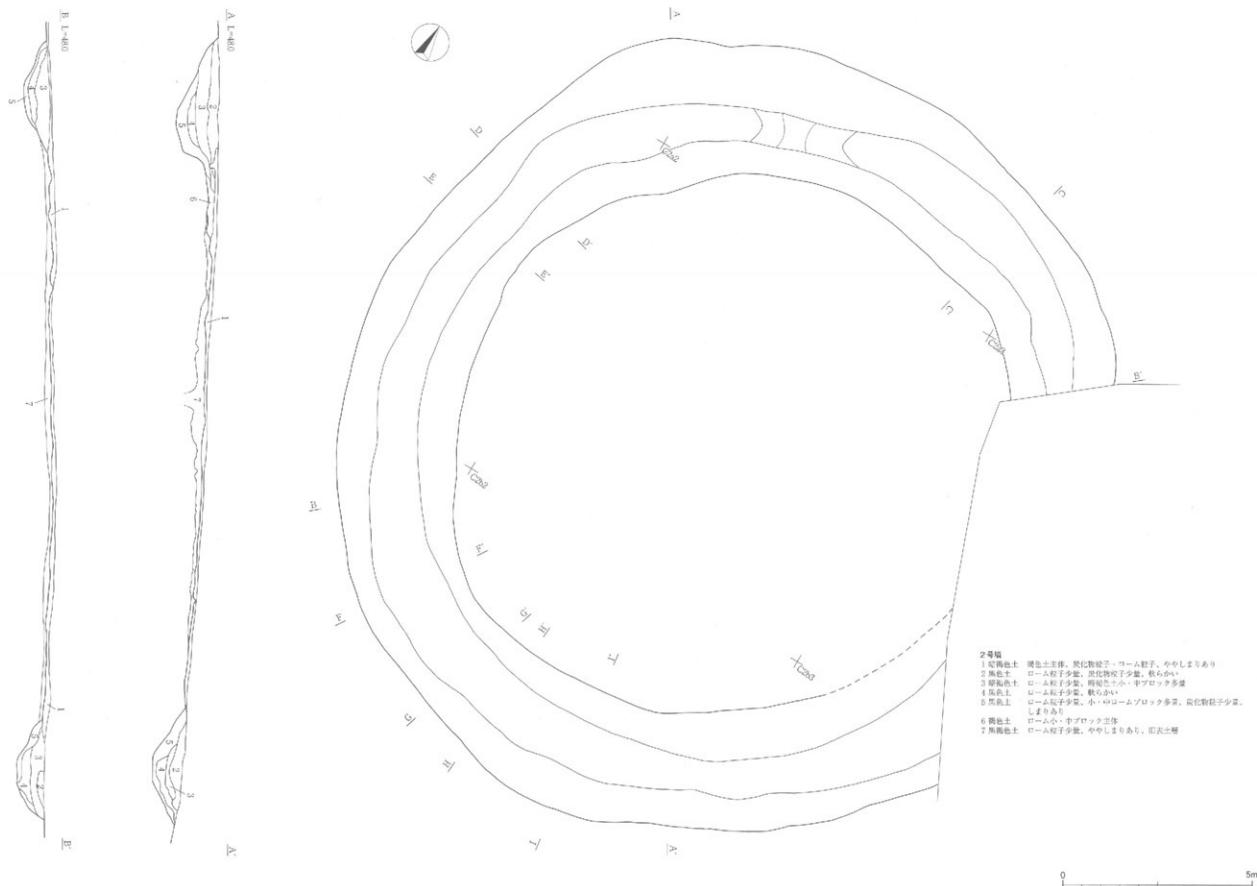
番号	種別・器種	計測値(cm)	特徴	出土	測定	色調	備考
1	土器 環	口徑 器高 底径	— — —	口縁部が外反して開く、体部内側、放射状のミガキ。口縁部は後方向のミガキ。底盤外面へラケズリ模様いミガキ。	金雲母微粒	良好 明赤褐色	

表17 2号墳出土遺物観察表(2)

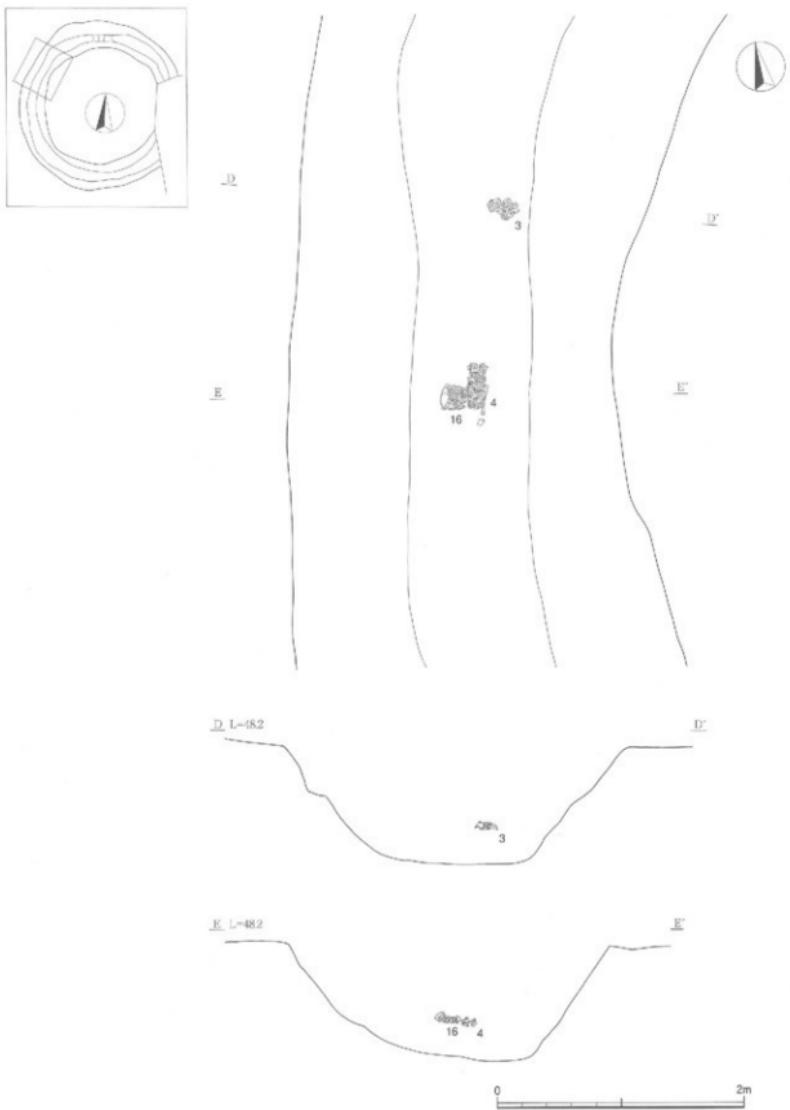
番号	埴輪 體積	計測値(cm)	段間隔(cm)	透 孔		粘土・色調	成形・装飾の特徴	備考	注記	
				形状	大きさ (幅×奥行)					
2	円筒	口径 底径 高さ	22.5 — 24.5	1段 2段	10.9 10.5	円 2段 59×65	台形～ 三角形	良好 好 内：赤鐵 外：明赤褐	外面部 内面部 上半 横のハケ・ナデ、下半 斜のナデ	No24. 段4区
3	円筒	口径 底径 高さ	18.6 — 36.9	1段 2段	11.6 10.3	円 2段 53×57	台形	良好 好 内：明黄褐 外：明赤褐	外面部 内面部 上半 横のハケ後ナデ	No21. 段2区
4	円筒	口径 底径 高さ	16.0 (10.9) 40.5	1段 2段 3段	10.9 10.4 19.2	円 2段 60×67	台形	良好 好 内：暗赤褐 外：赤褐	外面部 内面部 上半は斜のハケ、下2/3は斜のナデ、下端 粗削り	No25. 段3区
5	円筒	口径 底径 高さ	20.4 (13.4) 37.9	1段 2段 3段	10.4 11.1 16.3	円 2段 58×62	台形	良好 好 内：白	外面部 内面部 上半 横のハケ、下半 斜のナデ	No25
6	円筒	口径 底径 高さ	20.8 11.1 37.4	1段 2段 3段	10.4 9.4 17.1	円 2段 57×50	台形～ 三角形	良好 好 内：明赤褐	外面部 内面部 上半 横～斜のハケ、下半 斜のナデ	No26. 12. 段2区



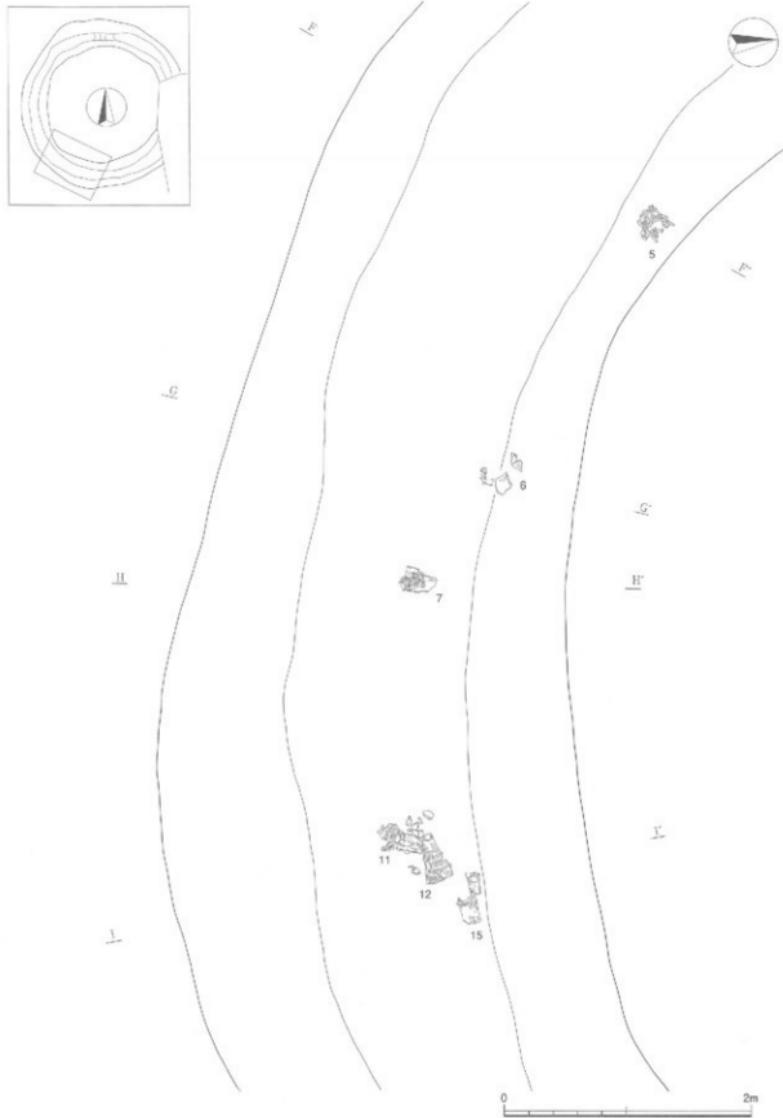
第42図 2号墳 墓丘実測図(1)



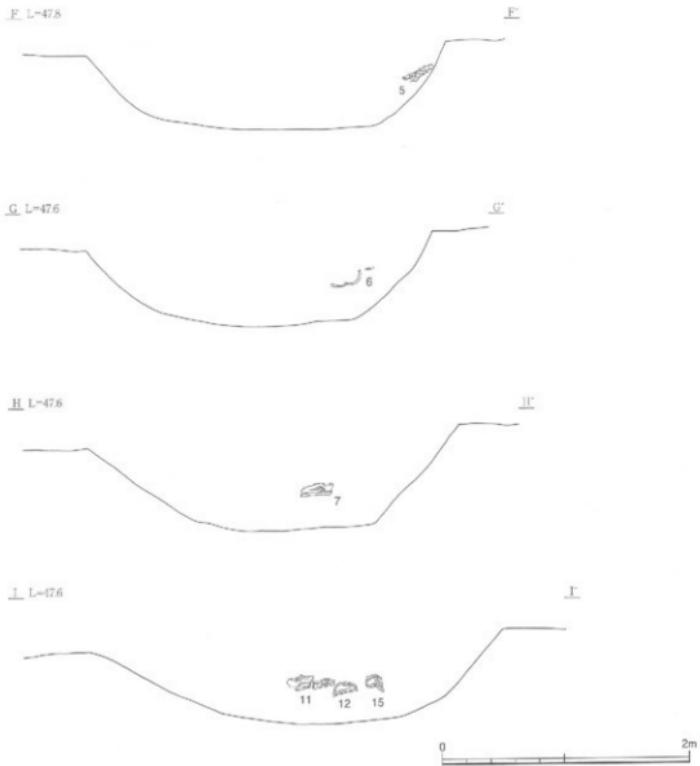
第43図 2号墳 墳丘実測図(2)



第44図 2号墳 遺物出土状況図(2)



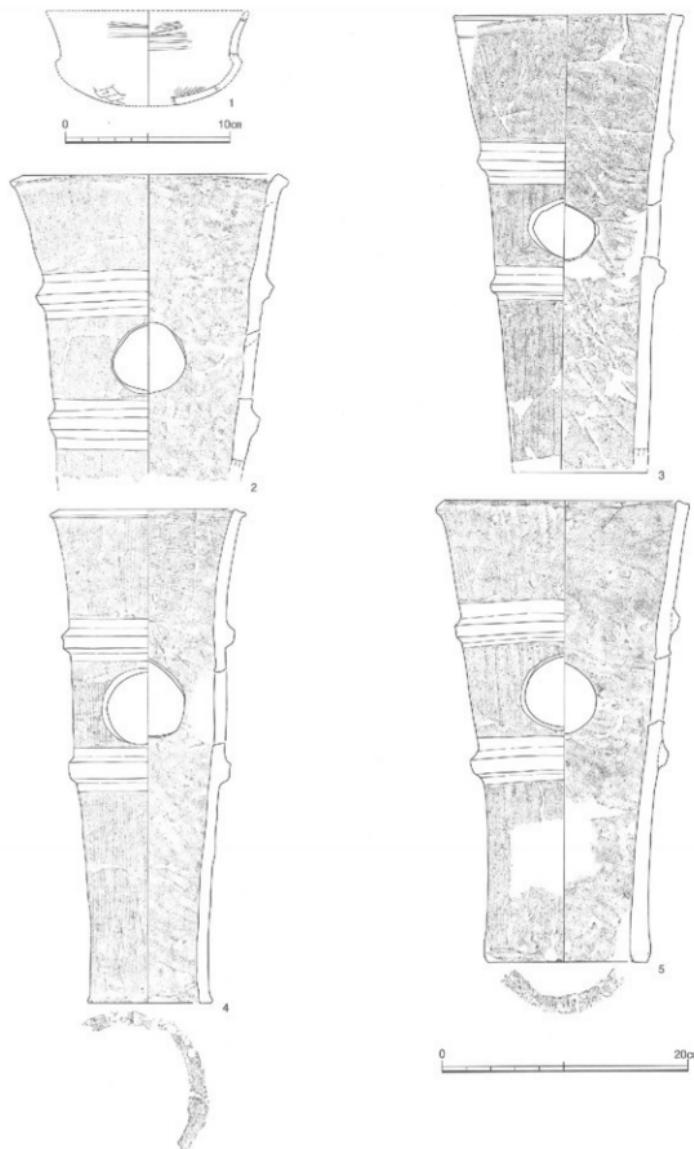
第45図 2号墳 遺物出土状況図（3）



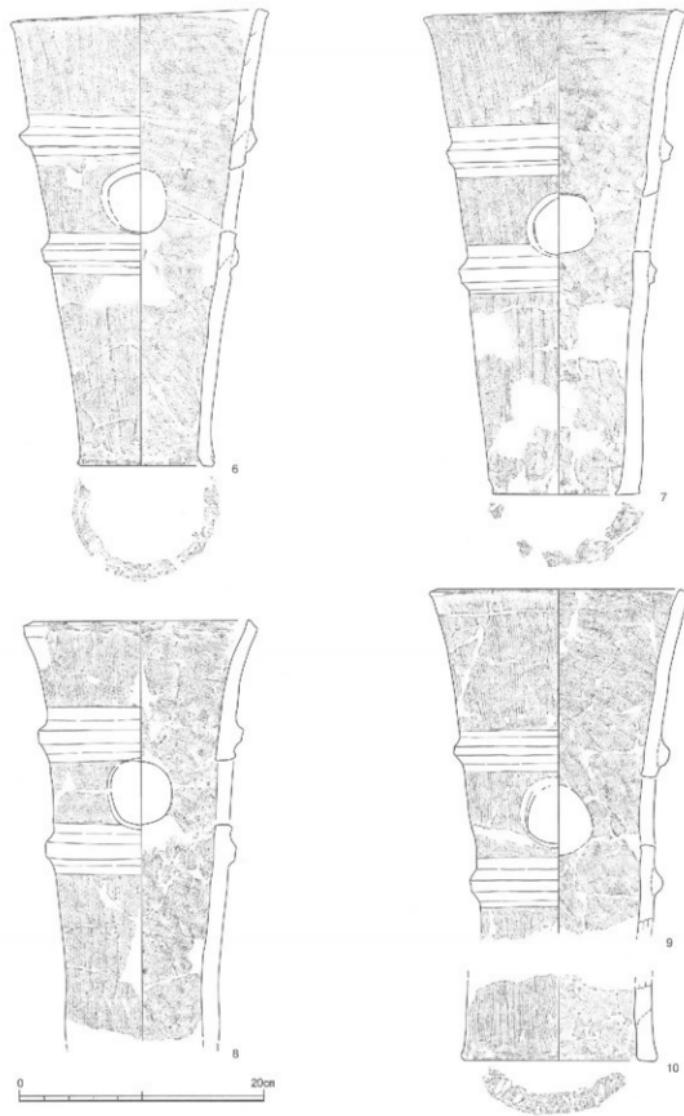
第46図 2号墳 遺物出土状況図(4)

表18 2号墳出土遺物観察表(3)

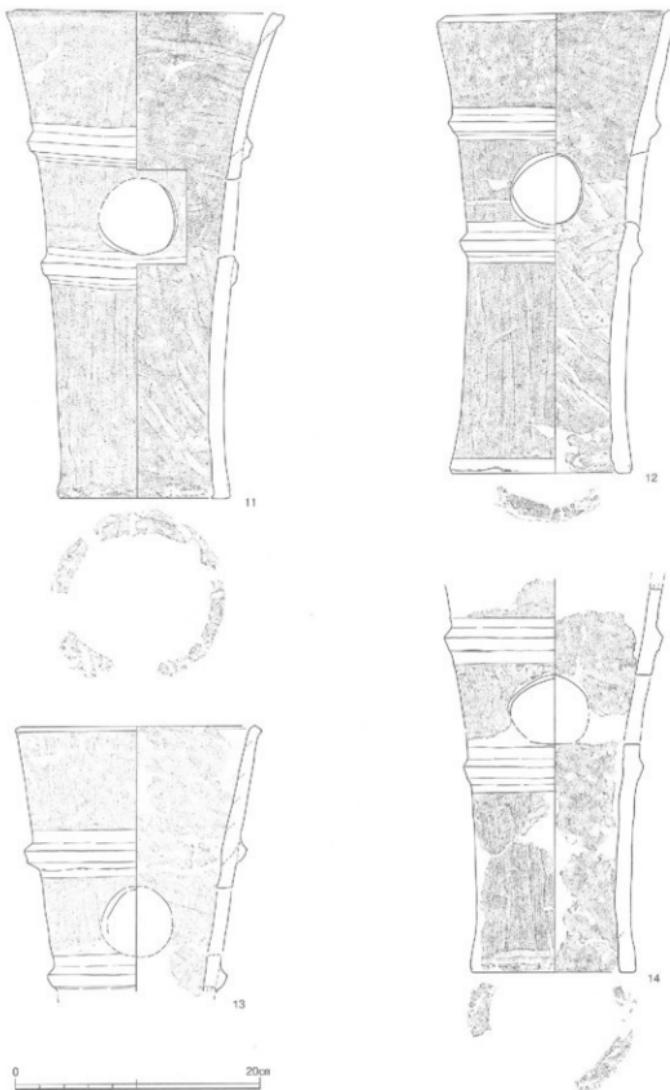
番号	埴輪 種類	計測値(cm)	段高値(cm)	透 孔		発 現 部 位 数値 表 (cm×横cm)	施 設	植土・色調	成形・型形の特徴	備考	注記
				直 径	深 度						
7 円筒	口徑 21.2 底径 12.0 段高 39.8	1段 117 2段 99 3段 180	円 2段 55×64	台形～ 弧形	石英・角閃石・長石・チャート・ 帆貫乳白色絵 赤褐色	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ、口縁に 第1突起と平行する10cmの広縁状堆積、 第2段下半 横の粗粒、下端 摺痕 内面 新のナデ				No8・ No2・3区	
8 円筒	口径 49.0 底径 34.5	1段 94 2段 94	円 2段 56×47	台形 横	石英・角閃石・チャート	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ、第2段タ テハケ後溝のナデ 内面 上1/3側・斜のハケ、下2/3側のナデ				南41区	
9 円筒	口径 21.1 底径 16.0 段高 28.3	1段 133 2段 110	円 2段 58×60	台形～ 三尖形	石英・角閃石・長石・チャート 内: 明褐色 外: 黄褐色	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ、口縁に 第1突起と平行する10cmの広縁 内面 上半 銀のハラ、下半 摺痕のナデ				埋由1・2 区	
10 円筒	口径 一 底径 16.0 段高 6.7				石英・長石・チャート にぶい赤鐵	外面 タテハケ、下端 横の摺痕 内面 横のナデ				埋2区	
11 円筒	LH 22.5 底径 14.0 段高 40.2	1段 112 2段 101 3段 185	円 2段 50	台形～ 弧形	石英・角閃石・長石・ チャート 明褐色	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ、下端 横 の摺痕 内面 上半 横～斜のナデ、下半 斜のナデ				No5・6	
12 円筒	口径 19.4 底径 14.2 段高 37.2	1段 95 2段 101 3段 182	円 2段 63×57	台形 良好	石英・長石・チャート・帆貫乳 白色絵 赤褐色	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ、下から 23.5cmの高さに沈像、下端 横の摺痕 内面 新のナデ				No18・ 埋2区	



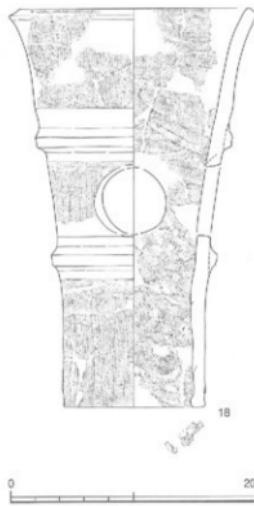
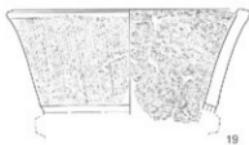
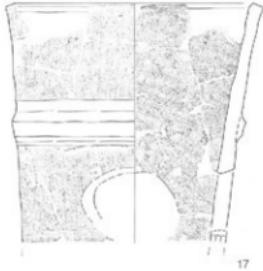
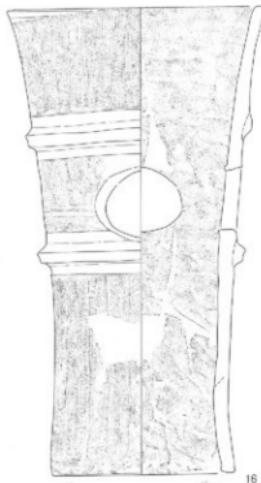
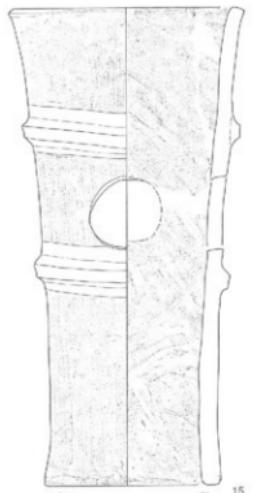
第47図 2号墳出土遺物実測図（1）



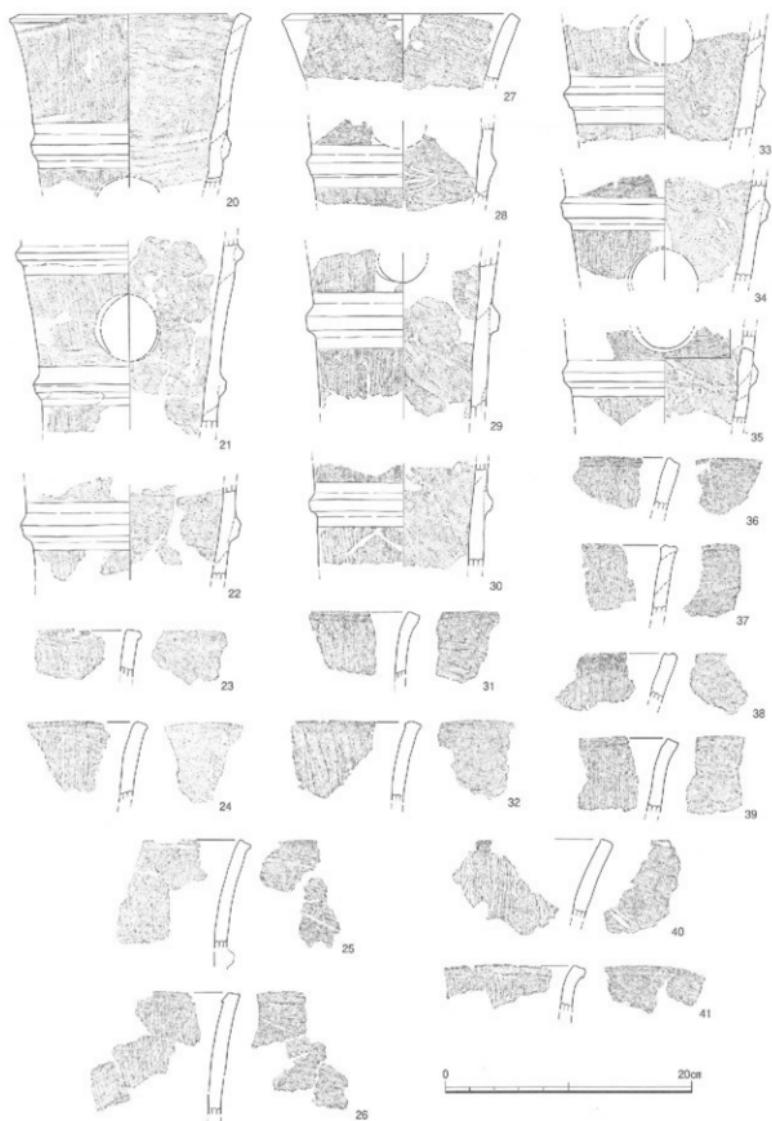
第48図 2号墳出土遺物実測図（2）



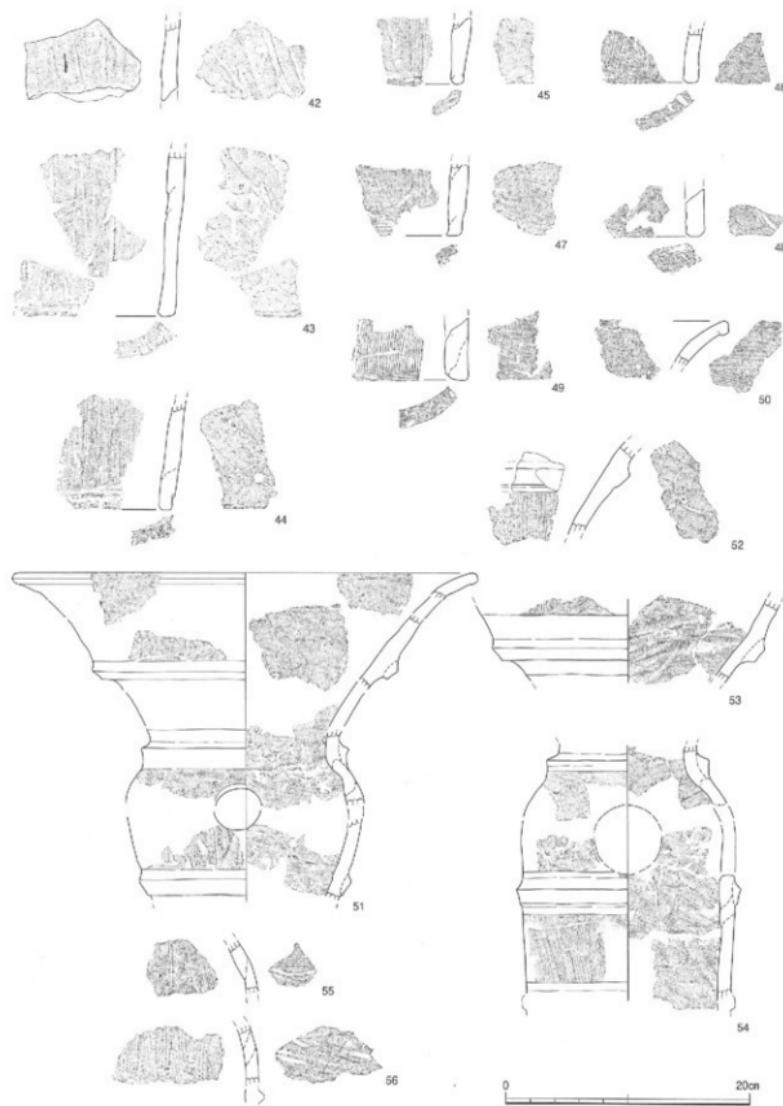
第49图 2号填出土遗物实测图(3)



第50図 2号墳出土遺物実測図(4)



第51図 2号墳出土遺物実測図（5）



第52図 2号墳出土遺物実測図（6）

表19 2号墳出土遺物観察表(4)

番号	場所 後頭	前頭部(cm)	段間隔(cm)	柱 軸 幅 厚 高 度 度	通 風 孔 形状 好 好	突 起 部 形状 好 好	焼 成 度 好 好	形状・色調 好 好	成形・整形の特徴		備考	注記
									外 面	内 面		
13. 円筒	口径 底径 残高	20.0 1段 21.7	1段 2段	20.6 10.3 円 2段 6.0	白石英 角閃石 チヤート 好	右石英、角閃石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 口縁 横のナデ、下平 斜のナデ	No1・2・8、 周2区				
14. 円筒	口径 底径 残高	13.0 31.9 3段	2段	10.6 16.4	白石英 三角形 好	右石英、角閃石、チヤート 好	外層 タテハケ、下層 横の他直 内面 斜のナデ、次第 横・斜のハケ	周1区				
15. 円筒	口径 底径 残高	19.0 14.2 3段	1段 2段	10.3 11.7 円 2段 58×57	白石英 風呂形 好	右石英、角閃石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ、下層 横 の接縫 内面 斜のハケ後口縁ヨコナデ、一部さ らに斜のナデ、下平 斜のナデ	No3・4・ 18				
16. 円筒	口径 底径 残高	21.9 (14.7) 38.5	1段 2段 3段	10.2 10.1 6.0×6.5	白石英 風呂形 好	右石英、角閃石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ、下から 島々25cmに沈殿状の構造 内面 斜のハケ、下平 斜のナデ	No16・ 20、 周3区				
17. 円筒	口径 底径 残高	21.0 19.6 3段	1段	10.3 12.1	白石英 好	右石英、角閃石、長石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 滲・滴のハケ、ナデ	No22、 周3区				
18. 円筒	口径 底径 残高	(20.2) 11.5 32.7	1段 2段	10.9 9.7 円 2段 5.7	白石英 良 M字 好	右石英、角閃石、チヤート、赤鉄 色調 後質變	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ、下層 横 の接縫 内面 白壁 横のハケ後 斜のナデ	No5、 周1・2 区				
19. 円筒	口径 底径 残高	8.5 8.4 14.6	-	-	白石英 好	右石英、長石、硫黄丸白色塗 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 滲・滴のハケ	No23				
20. 円筒	口径 底径 残高	9.4 11.0 15.6	-	-	白石英 好	右石英、長石、チヤート 好	外層 タテハケ尾口縫ヨコナデ 内面 橋・舟のハケ	周1区				
21. 円筒	口径 底径 残高	- 10.8 15.6	-	-	白石英 好	右石英、角内石 好	外層 タテハケ後口縫2段透れにかけて斜 の接縫 内面 上平 斜のハケ、下平 斜のナデ	周1区				
22. 円筒	口径 底径 残高	- 7.6	-	-	白石英 好	右石英、角閃石、長石、チヤート 好	外層 タテハケ 内面 横のハケ	周1区				
23. 円筒	口径 底径 残高	10.0 4.7	-	-	白石英 好	右石英、長石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 滲のハケ	周1区				
24. 円筒	口径 底径 残高	- 6.6	-	-	白石英 好	右石英、角閃石、長石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 滲のハケ後口縁ヨコナデ	No4				
25. 円筒	口径 底径 残高	- 8.9	-	-	白石英 好	右石英、角閃石、長石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 滲のハケ、斜のナデ	周1区				
26. 円筒	口径 底径 残高	- 10.0	-	-	白石英 好	右石英、長石 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 滲のハケ	周2区				
27. 円筒	口径 底径 残高	(19.9) 5.5	-	-	白石英 好	右石英、角閃石 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 滲・滴のハケ	周1区				
28. 円筒	口径 底径 残高	- 6.5	-	-	白石英 好	右石英、角内石 好	外層 タテハケ後口縫2段前のナデ 内面 横のナデ	周1区				
29. 円筒	口径 底径 残高	- 13.6	-	-	白石英 好	右石英、長石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 滲のナデ	No5、 周2・3区、 周7				
30. 円筒	口径 底径 残高	- 8.3	-	-	白石英 好	右石英、角閃石、チヤート 好	外層 タテハケ 内面 斜のハケ後 斜のナデ	周1区				
31. 円筒	口径 底径 残高	- 5.8	-	-	白石英 好	右石英、チャート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 横のハケ、ナデ	周4区				
32. 円筒	口径 底径 残高	- 6.9	-	-	白石英 好	右石英、角内石 好	外層 タテハケ後口縫のナデ、口縁ヨコナ デ 内面 滲のハケ	周1区				
33. 円筒	口径 底径 残高	- 9.2	-	-	白石英 好	右石英、長石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縫2段後のナデ 内面 斜のナデ	周1区				
34. 円筒	口径 底径 残高	- 8.3	-	-	白石英 好	右石英、チャート 好	外層 タテハケ 内面 斜のナデ	周1区				
35. 円筒	口径 底径 残高	- 7.7	-	-	白石英 好	右石英、角内石、チヤート 好	外層 タテハケ後口縫のナデ 内面 斜のナデ	周1区				
36. 円筒	口径 底径 残高	- 4.7	-	-	白石英 好	右石英、長石、チャート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ後口縁ヨコナデ	周2区				
37. 円筒	口径 底径 残高	- 5.8	-	-	白石英 好	右石英、純白 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ	周2区				
38. 円筒	口径 底径 残高	- 4.3	-	-	白石英 好	右石英、長石 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ	周1区				
39. 円筒	口径 底径 残高	- 6.0	-	-	白石英 好	右石英、長石、チャート 好	外層 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ	No22				

表20 2号墳出土遺物観察表(5)

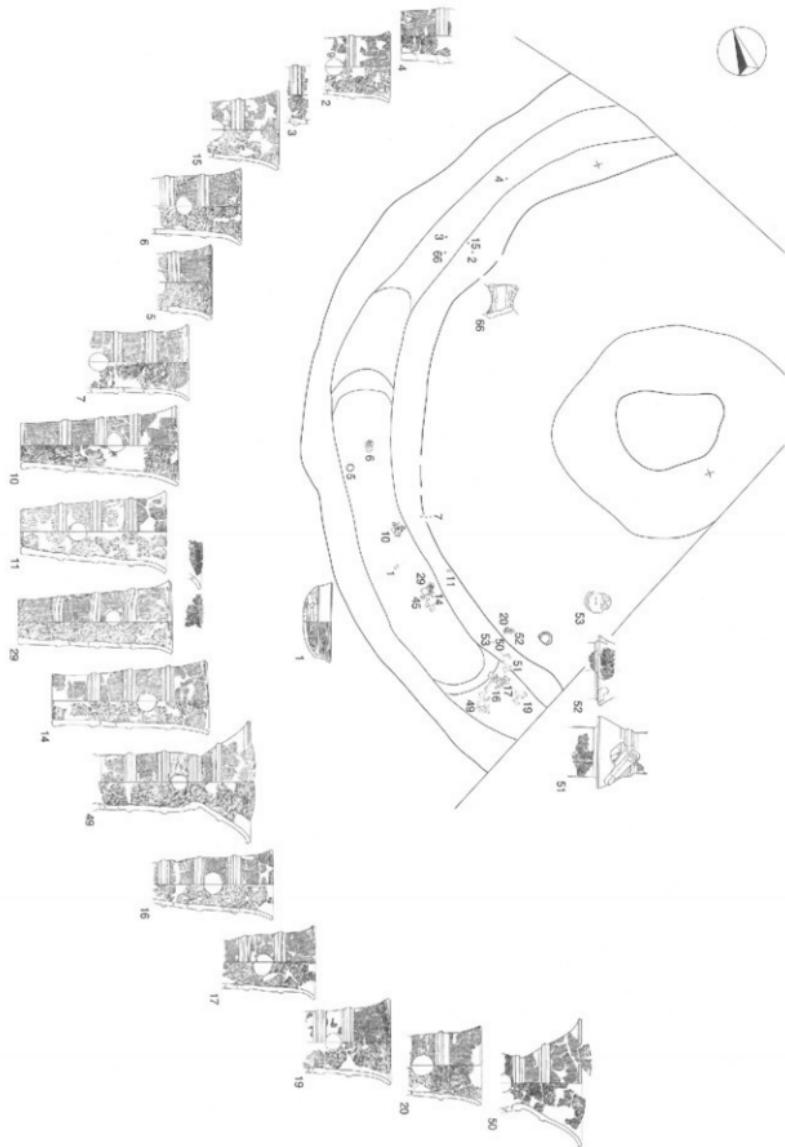
番号	地名	計画径(cm)	実測径(cm)	造形 形状 寸法 (幅×高さ) (mm×mm)	実施 時期	地質	船上・色調	式形・整形の特徴	備考	注記
40	円筒	白堊 底盤 焼成	-	良 好	石英・長石 内:赤褐色 外:赤	外壁 内面	タテハケ後口縁ヨコナデ 斜のナデ		周辺	
41	円筒	白堊 底盤 焼成	-	良 好	石英・長石・チャート 内:赤褐色	外壁 内面	タテハケ後口縁ヨコナデ 斜のナデ		周辺	
42	円筒	白堊 底盤 焼成	-	良 好	石英・長石・チャート 内:赤褐色 外:赤	外壁 内面	タテハケ 斜のナデ	黒色の 底面		
43	円筒	白堊 底盤 焼成	135	良 好	石英・長石・チャート 内:明褐色 外:赤	外壁 内面	タテハケ、下縁 縁の擦痕 斜のナデ		周辺 周	
44	円筒	白堊 底盤 焼成	90	良 好	石英・長石・チャート 内:明褐色	外壁 内面	タテハケ、下縁 縁の擦痕 斜のナデ		周	
45	円筒	白堊 底盤 焼成	56	良 好	石英・長石・チャート 内:赤 外:赤褐色	外壁 内面	タテハケ、二部タテハケ後 縁のナデ 斜のナデ		周	
46	円筒	白堊 底盤 焼成	45	良 好	石英・長石 赤褐色	外壁 内面	タテハケ、下縁 摩擦 横・斜のナデ		周辺	
47	円筒	白堊 底盤 焼成	63	良 好	石英・長石・チャート種 内:赤褐色	外壁 内面	タテハケ後 縁の擦痕 斜のナデ		周	
48	円筒	白堊 底盤 焼成	40	良 好	石英・角閃石・長石 内:赤褐色	外壁 内面	タテハケ 横・斜のナデ		周	
49	円筒	白堊 底盤 焼成	52	良 好	石英・長石・角閃石・長石 内:赤褐色	外壁 内面	タテハケ底底部ナデ 後のナデ		周辺	
50	羽根型 円筒	白堊 底盤 焼成	36	良 好	石英・長石 内:赤褐色 外:赤褐色	外壁 内面	タテハケ後口縁ヨコナデ 横のナデ後口縁ヨコナデ		周辺	
51	羽根型 円筒	白堊 (38.1) 底盤 焼成	26.7	良 好	石英・角閃石・長石・チャート 内:赤褐色	外壁 内面	タテハケ後口縁ヨコナデ、第3段 タテハケ後口縁ヨコナデ 横のナデ	N.6 周辺 1号・周辺		
52	羽根形 円筒	白堊 底盤 焼成	7.6	台形	良 好	石英・長石・チャート 内:赤褐色	外壁 内面	タテハケ 斜のナデ	第2段 周辺	
53	羽根形 円筒	白堊 底盤 焼成	7.0	台形	良 好	石英・長石・チャート 内:赤褐色	外壁 内面	タテハケ 横のナデ	第2段 周辺 上	
54	羽根形 円筒	白堊 底盤 焼成	20.8・3段 107	2段・ 3段 三角形	良 好	石英・角閃石・長石・チャート 内:赤褐色	外壁 内面	タテハケ、第3段タテハケ後 斜のナデ 横のナデ	馬区	
55	羽根形 円筒	白堊 底盤 焼成	4.4	台形	良 好	石英・赤褐色粘土	外壁 内面	タテハケ 横のナデ	第3段 周辺	
56	羽根形 円筒	白堊 底盤 焼成	5.0	台形	良 好	石英・角閃石・長石・チャート 赤褐色粘土	外壁 内面	タテハケ 横のナデ	第3段 表七	

朝顔形円筒埴輪（表20、第52図50-54） 全体を復元できるものはなかった。第3段のよく張った肩から第2段に直線的にひらき、口縁部でさらにひらいている。第3段は綫方向にハケを施した後、上半を横方向にナデしている。透孔は第3段にあけるが、ほかは不明である。復元できた口径は38.1cmである。

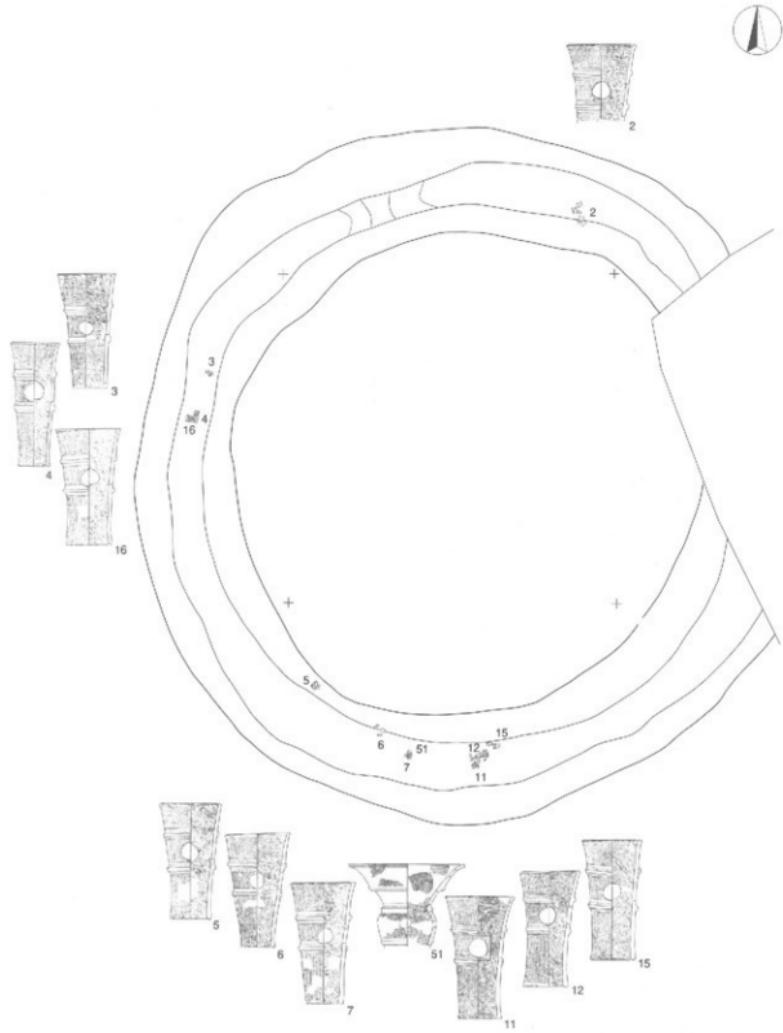
小 結

1・2号墳は台地の東端に立地し、近接した位置にある。1号墳を直径19mの円墳とすると、2号墳は直径16.5mで、1号墳がやや大きいけれども現状での周濠幅や深さなども差はあまりない。またどちらも埴輪をもつ点で共通するが、埴輪の器形・段数・大きさ・色調などの特徴は1号墳と2号墳で異なっている。つまり2つの古墳は似た立地・規模でありながら、違うタイプの埴輪をそれぞれ立て並べていたのである。また、1号墳には形象埴輪（人物・馬形）があるが、2号墳には確認できなかった。

埴輪の出土状況はどちらも埴丘から周濠に転落した状態で見つかっており、埴丘の平坦面（埴丘が段築をもたない場合は埴頂平坦面）に埴輪が並べられていたと予想できる（第53・54図）。朝顔形円筒埴輪は少ないが、出土状況からみると円筒埴輪数本につき1本を組み合わせ、埴輪列を構成していたと考えられ



第53図 1号墳 墓輸配置図



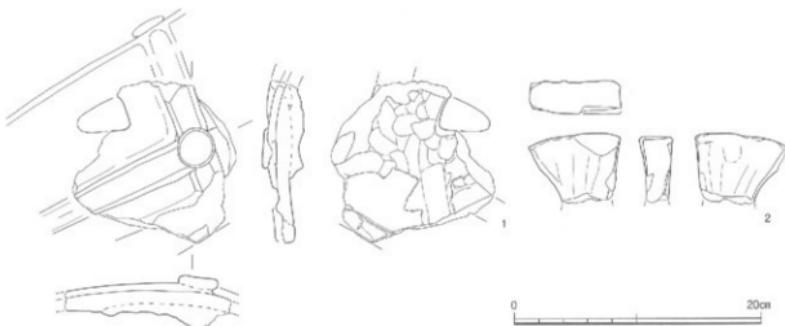
第54図 2号墳 填縫配置図

る。1・2号墳とも南寄りに埴輪の出土量が多く、南に篤い樹立を想定させる。ただし埋葬施設がみつかっていないため、それとの位置関係あるいは関連性は不明である。1号墳の人物・馬形埴輪は円筒・朝顔形円筒埴輪に混じって出土していることから、円筒埴輪列と同列あるいは平行する列を墳丘の南西寄りに展開していたのであろう。胎土や焼成の類似性から人物埴輪は3体以上、馬形埴輪も3体以上あったと考えられる。馬形埴輪についてはさらに1号土坑（第60図）から出土した馬形埴輪の破片2点（表21、第55図1-2）と1号墳68の胎土・焼成などがよく似ており、1号土坑の破片が1号墳の馬形埴輪のものであるとすれば、全部で4体の馬形埴輪が樹立されていたことになる。

1・2号墳の円筒埴輪は外面タテハケの1次調整で川西編年V期（川西1978）にある。ただし2号墳ではタテハケ後2段目に限って横方向に工具によるナデを施すものが数点あり、ヨコハケではないものの2次調整を考えると1号墳よりも古くみることができる。それぞれから出土している上部器坏をみると2号墳の坏は器形やていねいな放射状ミガキなど、1号墳のものより古い要素をもっている。土器からみて両古墳は前方後円墳集成畿内編年9期（広瀬1992）であり、およそ6世紀前半と考えられる。2号墳は9期の古いところ、1号墳は9期でも新しいところであり、埴輪の時期とも対応すると考えられる。

行者遺跡と同じ丘陵に連なるすぐ西側には8基の円墳が確認されている高寺古墳群がある。調査が行われた2号墳は埋葬施設が横穴式石室であり、時期が下ることがわかっている。そうするとこの丘陵上に小型の古墳が作られ始めたのは行者2号墳の頃からで、丘陵の東側にある行者遺跡からはじまり、西へと場所を遡し時期を下りながら古墳造営が高寺古墳群まで続いたということであろう。

6世紀前半には、円筒埴輪列だけでなく人物や馬形などの形象埴輪を墳丘平坦面に列状に樹立するようになる。高寺古墳群を含むこの一群においては、古墳群形成の初めから墳丘に埴輪を樹立し、行者1号墳で形象埴輪を含む列状の埴輪配列を採用したと考えられる。



第55図 1号土坑出土遺物実測図

表21 1号土坑出土遺物観察表

番号	埴輪種類	計測値(cm)	状成	胎土・色調	成形・整形の特徴	社記
1	馬形	残長 135×14.0	良好	石英・角閃石・長石・白色粒 糊	触の左側面、外側は丁寧なタテ、内面は下から上に胎土を足して指でナデついている。	No1
2	馬形	残長 54×7.5	良好	石英・角閃石・長石・赤褐色・白色粒 糊	躰うたがみか、外側はタテで望える、端面の仕上げはやや粗。	No1

3号墳 (第56・57図)

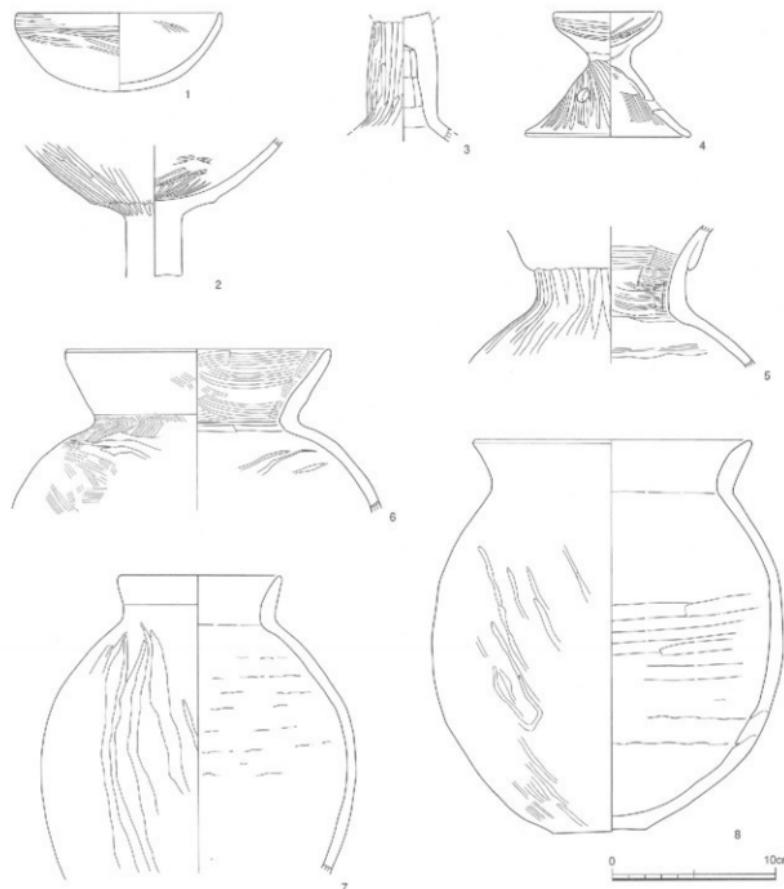
位置 調査区の南西部C1d2グリッドを中心とした位置にある。4号墳の南に隣接している。

墳丘 墳丘直径は10.60m、墳丘は確認面より上部は削平されて残存していない。

周濠 周濠は外縁径12.9m、幅0.7~1.5m、深さ0.07~0.38mで、平面形はほぼ円形である。周濠覆土は2層で、下層は暗褐色土、上層は土師器片を含んだ黒褐色土層である。

出土遺物 周濠南部底面から、土師器の7の壺、8の甕が出土している。

所見 周濠出土土器から、古墳時代前期4世紀代の古墳と考えられる。



第56図 3号墳出土遺物

表22 3号墳出土遺物観察表

回収番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器鉢	124 48 -	半球形状の体。外縁横方向のミガキ、内面斜方向のミガキ。	石英	良好	明赤褐色	
2	土師器高壺	-	脚部は中実形状。壺部内外面、脚部ミガキ。全箇所赤褐色。	石英	良好	赤褐色	
3	土師器高壺	-	脚部片。別器は柱状で外周ミガキ、内面ヘラケズリ。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
4	土師器 小型器台	6.0 7.6 10.1	受け部は鉢のように開いて立ち上がり、端部を上方に向ける。裏部は「ハ」の字状に溝き、三方向に円窓を開ける。受け部内外面、脚部外周ミガキ。	長石、石英、薄 緑骨針	良好	にぶい褐色	
5	土師器壺	-	複合口縁唇の口縁部片。頭部～脚部外面ミガキ。内 縫横方向のヘナナデ。	長石、石英、薄 緑骨針	良好	褐色	
6	土師器壺	(16.0) -	口縁～肩部破片。口縁部は外側する單口縁。口縫部 外面ヨコナデ、内面ハケメ。胴部は内外面ともハケ メ後ミガキ。	石英、角閃石	良好	灰褐色～黒色	
7	土師器壺	10.0	口縁部内外面ヨコナデ。腰部外周ナデ状のミガキ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
8	土師器壺	17.0 24.0 5.7	脚部外周ミガキ、内面横位のヘナナデ。	長石、石英、薄 緑骨針、チャート	普通	にぶい橙色	

4号墳 (第58図)

位置 調査区の南西部C1d2グリッドを中心とした位置にある。3号墳の北に隣接している。

墳丘 墳丘直径は推定11.4m、墳丘は削平されて残存していない。

周濠 周濠は推定外径13.4m、幅1.0～1.8m、深さ0.26～0.38mで、全体の約4/5の範囲を調査で確認したが、残りは調査区外に延びている。周濠覆土は3層で、やや軟らかい暗褐色土層が堆積している。

出土遺物 周濠覆土から1のミニチュア土器の鉢と2の小形壺底部片が出土している。

所見 周濠出土土器は古墳時代前期の土器であり、古墳時代前期4世紀代の古墳と考えられる。

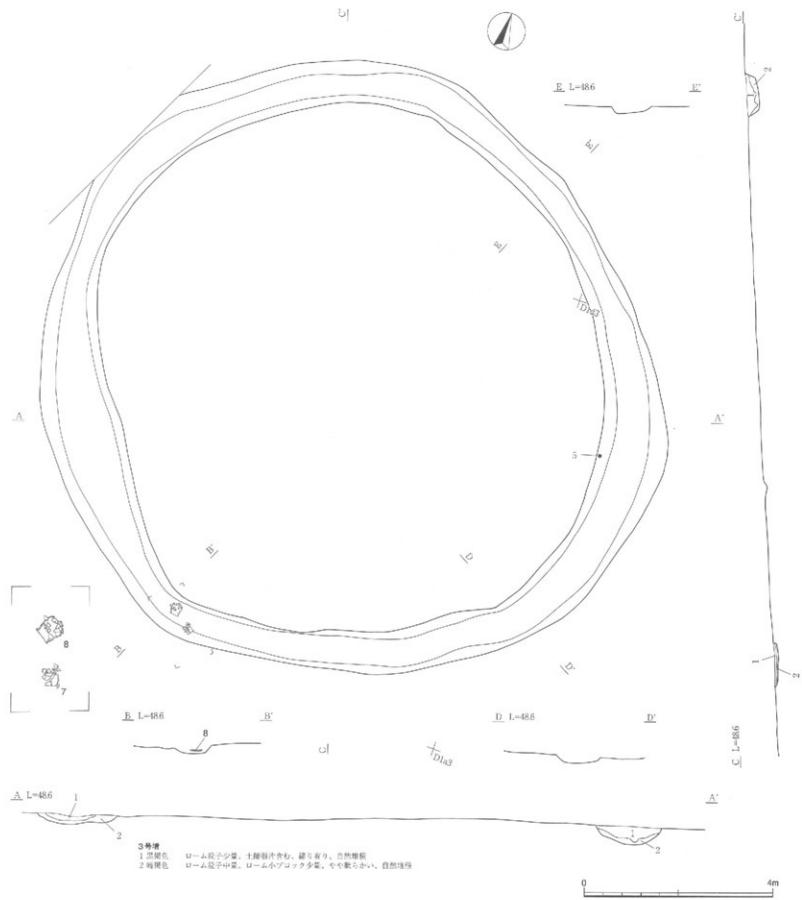
表23 4号墳出土遺物観察表

回収番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 ミニチュア壺	- (1.6)	平底。柄部外周横位ミガキ。	長石	良好	にぶい橙色	
2	土師器 ミニチュア土器	- (2.0)	平底。側部外周ナデ。	長石	良好	にぶい橙色	

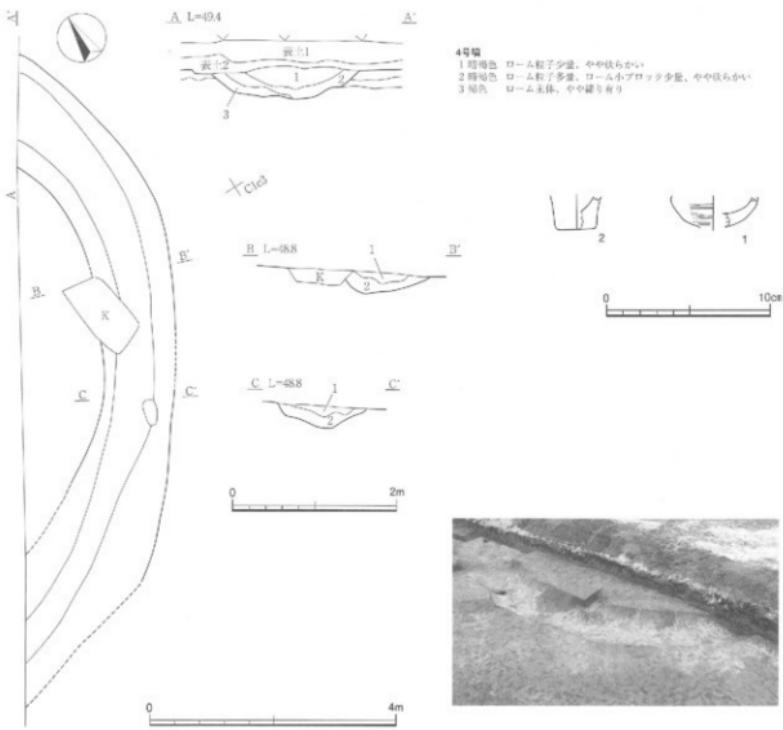
5号墳 (第59図)

位置 調査区の東部C1a1グリッドを中心とした位置にある。4号墳の北側にある。

墳丘 墳丘直径は13.5m、墳丘は削平されて残存していない。



第57図 3号墳



第58図 4号墳

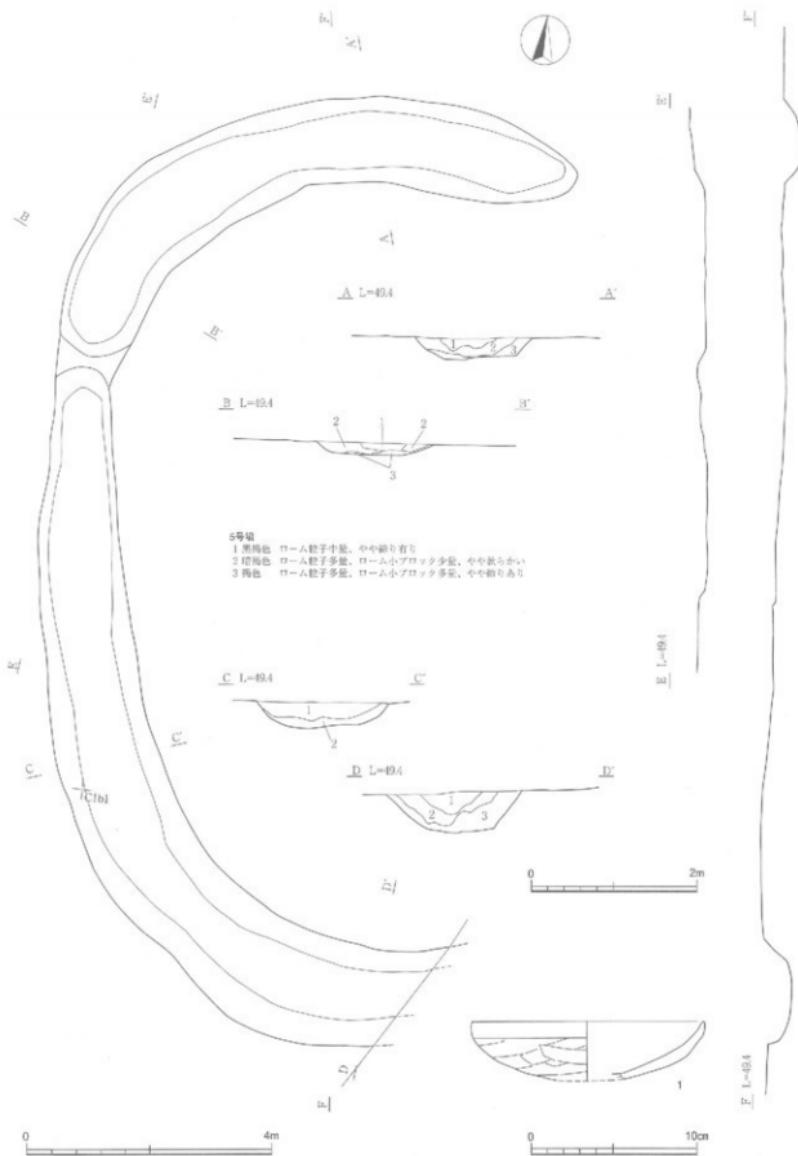
周濠 周濠は外縁径15.4m、幅1.0~1.9m、深さ0.14~0.47mで、全体の約2/3の範囲を調査で確認した。南東側周濠が調査区外に延び、北側周濠が途中で浅くなり途切れてしまっているので墳形は不明である。周濠の北西部が一部ブリッジ状に浅くなっている。周濠覆土は3層で、下層の3層はロームの小ブロックを多量に含む。

出土遺物 周溝覆土から土師器の壊が出土している。

所見 出土遺物1点は古墳時代後期の土器であるが、周溝の東側中央部の上~中層は、近代の搅乱が入っており、搅乱中の混入遺物の可能性もある。

表24 5号墳出土遺物観察表

団版番号	種別・海抜	口径 最高峰 底径	性 質	埴土	流成	色調	備考
1	土師器 环	(14.4) — —	丸底壊。口縁内外面ヨコナギ。底部ヘラケズリ。	石英、海綿骨針	良好	にぶい黄色	



第59図 5号墳



第60図 土坑

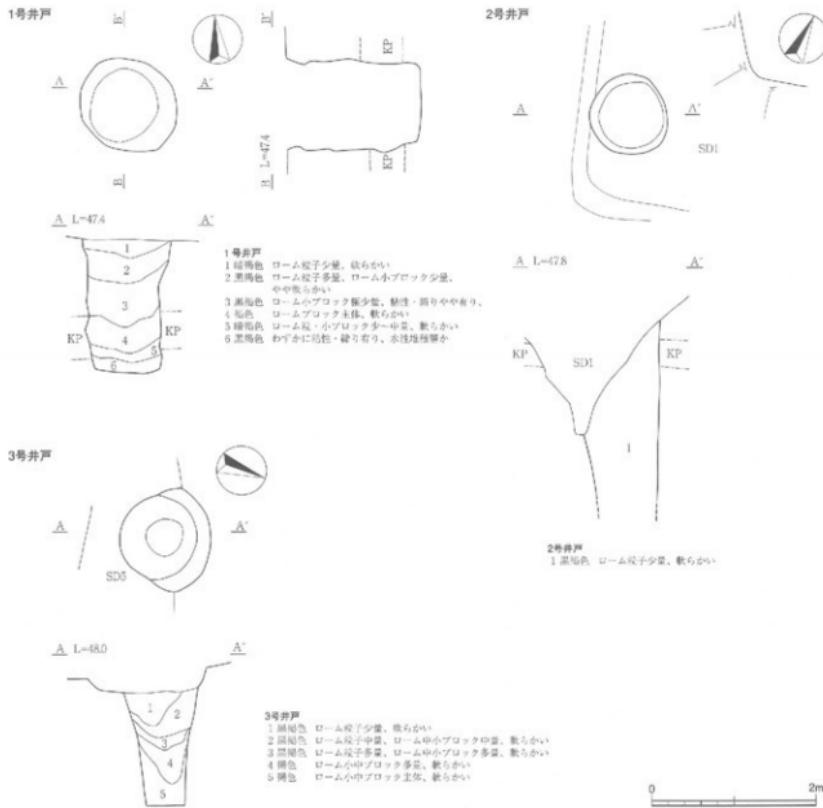
第3節 土坑、井戸、地下式坑

土坑（第60図）

土坑は調査区内から9基確認されている。1号土坑は、馬形の形像埴輪片（第55図）を出土しており、表25 土坑一覧表

表25 土坑一览表

遺構名	位置	規模(均径×徑往×深さ)cm	備考
1号土坑	B2a3	110	74
2号土坑	B2c2~B2b3	190	86
3号土坑	C2a4	160	74
4号土坑	C1d3~C1d4	123	106
5号土坑	B2e2	356	136
6号土坑	B2e2	326	134
7号土坑	B2e2	125	106
8号土坑	B2e2	148	142
9号土坑	D1a2	182	118



第61図 井戸

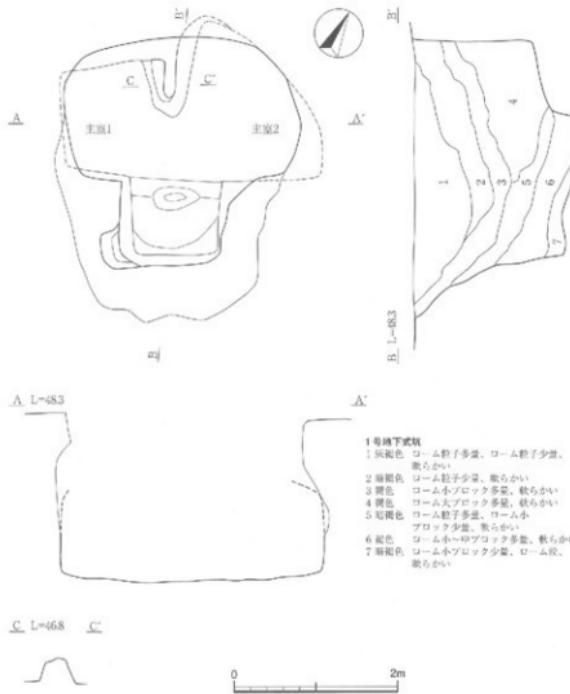
古墳時代の土坑の可能性が考えられる。中央部北西寄りには、長方形の土坑がまとまっており、覆土のようすから見て中世のものかと思われる。この他の土坑は単独で、分散した状態で確認されており、時期的には近世以降のものと思われる。表25に概要をまとめている。

井戸（第61図）

井戸は調査区の南東部に3基確認されている。3基とも素掘りの井戸で15~23m程の距離をあけて掘られている。出土遺物がないが、2号井戸は1号堀を壊して掘り込んでおり、近世以降の井戸と見られる。表26に概要を掲載している。

地下式坑（第62図）

地下式坑は、1基確認されている。やや大きめの堅坑と天井部の落下している主室は複式構造で、主室の平面形は左側第1主室がほぼ方形、幅110cm、奥行き140cm、開口部幅90cm。右側の第2主室が扇形で、開口部幅100cm、奥行き120~130cmである。床面から天井部までの推定の高さは、壁から天井部へ向かう立ち上がりのよく残存している部分で見ると、いずれも130cm余りとなる。出土遺物は、埴輪片が堅坑覆土上層から、第2主室奥壁際底面から約3cm浮いて、長さ19cm、幅11cm、厚さ8cmの板状の自然礫が出土している。通常見られる主室形態と異なり、地下式坑としてよいかどうか問題はある。天井部の落下層や堅坑側からの埋土の流入、遺物がないこと等、平面形以外は通常の地下式坑と共通している。



第62図 1号地下式坑

表26 井戸一覧表

遺構名	位置	規模(長さ×幅×深さ)cm			備考
1号井戸	D1d4	128	—	108	163
2号井戸	C1e3	98	—	90	(220)
3号井戸	D1a1	102	—	93	180

第4節 堀跡・溝跡と盛り土遺構

調査区中央には中世後半代の時期とみられる断面薬研状の規模の大きな堀が南北に走っており、堀の北端部西側には、盛り土遺構が残存している。その他、調査区内からは6条の溝が確認されている。切り合い関係や出土遺物、配置等から近世以降の時期のものを主体としていると見られる。溝は遺構一覧表にまとめている(表27)。

1号堀(第63~66図)

位置 調査区の北西部B1e2グリッドからC1e4グリッドに向かって直線的に45m延び、東へ90°屈曲し約10m延びて再度南東方向に90°屈曲しさらに直線的に38m延び、調査区外へ至る。

規模と形状 全体の長さは調査範囲内で約93m、幅2.5~2.7m、深さ1.9~2.1m、壁面の立ち上がり角度は西側約65°、東側約62°。底面が山の狭い平坦面をつくる薬研状である。

ピット 堀の屈曲部から南東へ伸びる部分の堀斜面両側から、70基余りのピットが確認されている。柱状のものを傾斜面に立てた穴の跡と見られるが、橋脚や建物性にしては、十分な深さと企画性が乏しく、何らかの別の施設の痕跡と見られる。

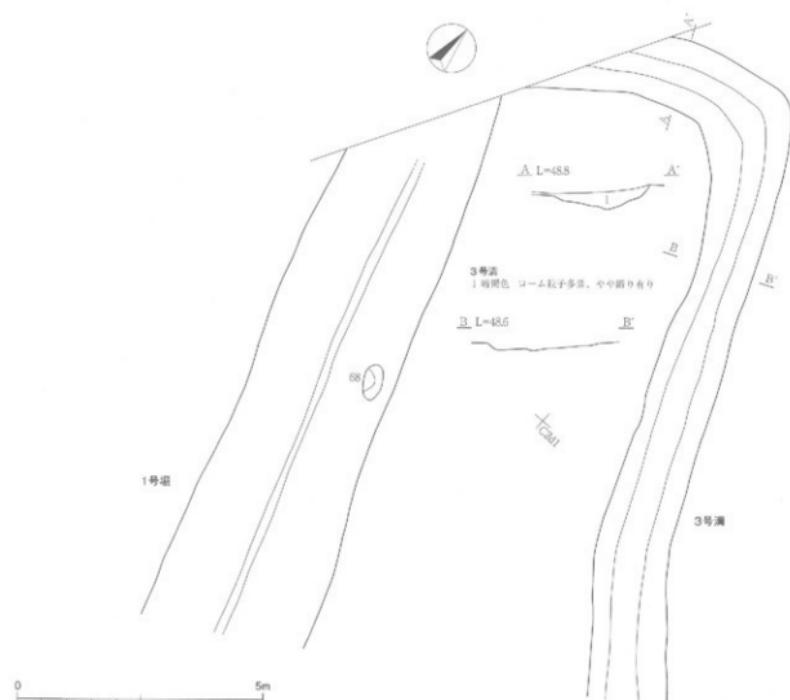
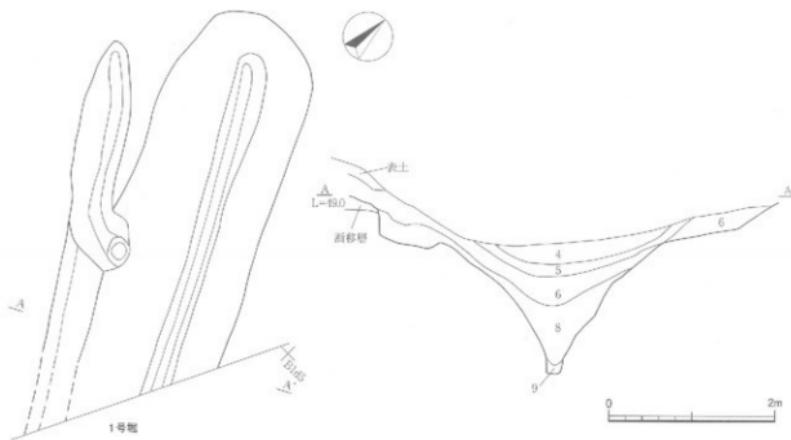
覆土 9層に分かれる。上層の1~4層は暗褐色土層主体、下層は褐色土主体で、6・8層は一時期の埋め戻し層と見られる。

出土遺物 屈曲部の下層の9層から「洪武通寶」が、上層の3層から瀬戸産の陶器皿が出土している。その他に覆土中からは、中世後半代の内耳壺や寛永通寶等近世遺物も出土している。

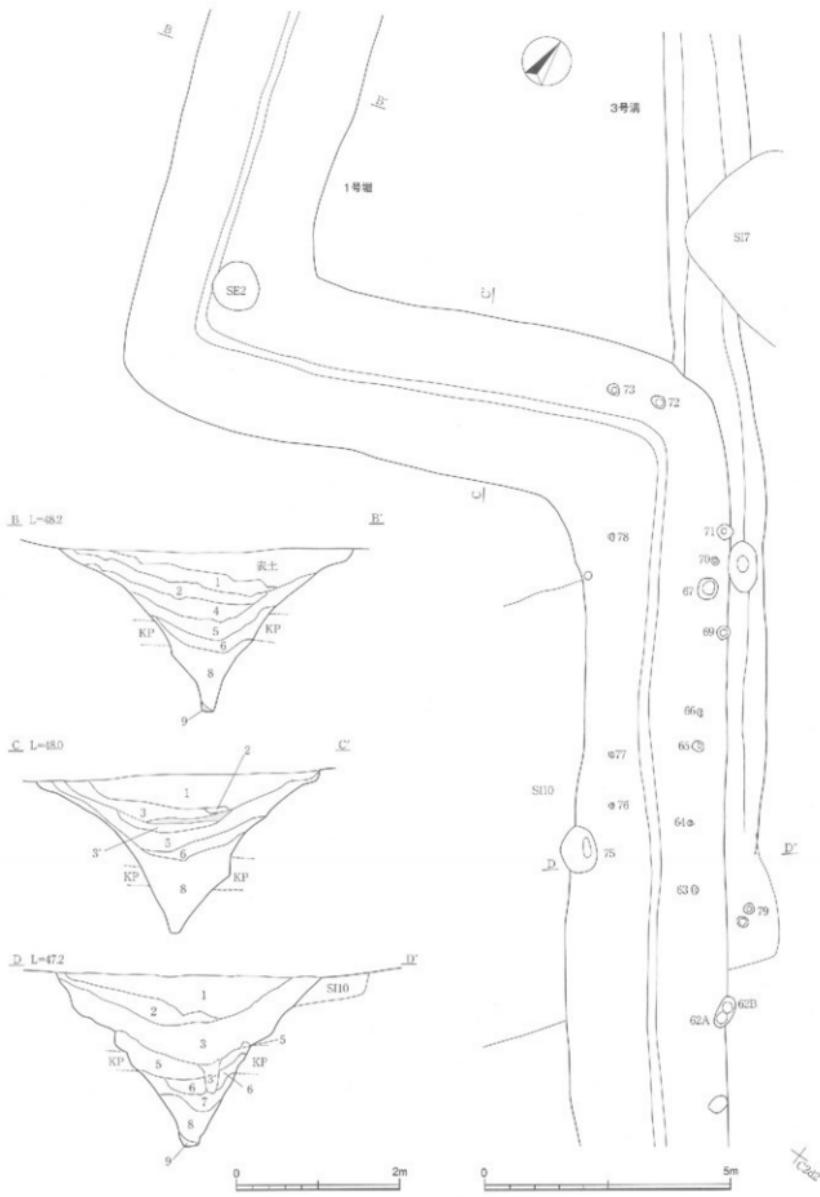
所見 出土遺物から中世後半に掘削され、近世前半頃にはしだいに埋没し、後半代には別の近世の溝が上部に造られていることから完全に埋まっていたものと見られる。形状や出土遺物から戰国期に掘られた防備のための掘り割りと考えられる。堀の南半部の堀傾斜面に穿たれたピットは、図のD-D'土層断面に見られるピット状の穴が同じものとすると、溝を中層まで埋めた後の行為によるものと考えられ、逆茂木のようなものを埋め込んだ跡の可能性も考えられる。

表27 溝一覧表

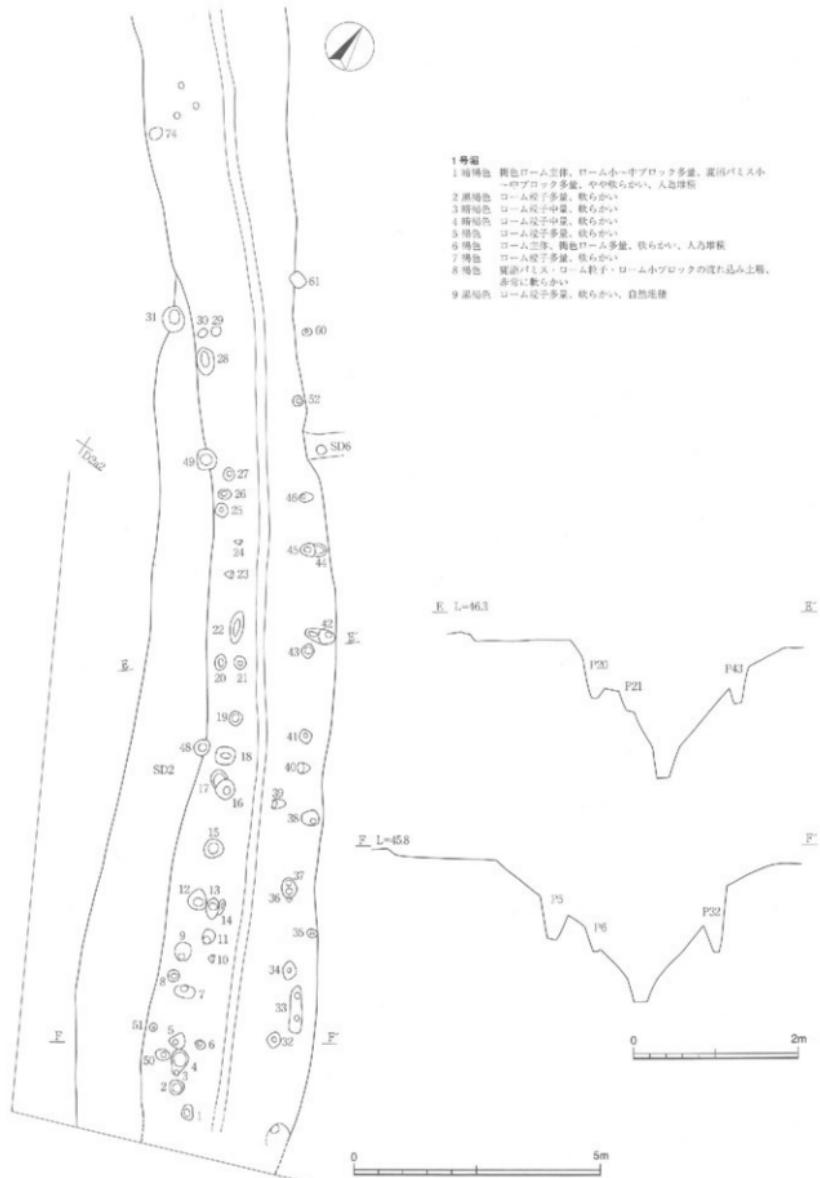
遺構名	位置	規模(長さ×幅×深さ)m			備考
1号溝	—	—	—	—	欠番 1号溝に変更
2号溝	C2d3~D2s2	30	—	2.20~4.20	0.16
3号溝	C1a3~C2e1	24.4	—	1.1~1.7	0.05~0.20
4A号溝	B1d1~C1d3	12.5~14.1	—	0.85~1.95	0.22~0.59
4B号溝	B1a1~C1b2	15	—	0.58~0.84	0.22~0.54
5号溝	D1a2~C1d1	32.5	—	0.5~1.2	0.27~0.36
6号溝	C2e2~C2d3	17.1	—	0.30~0.50	0.1



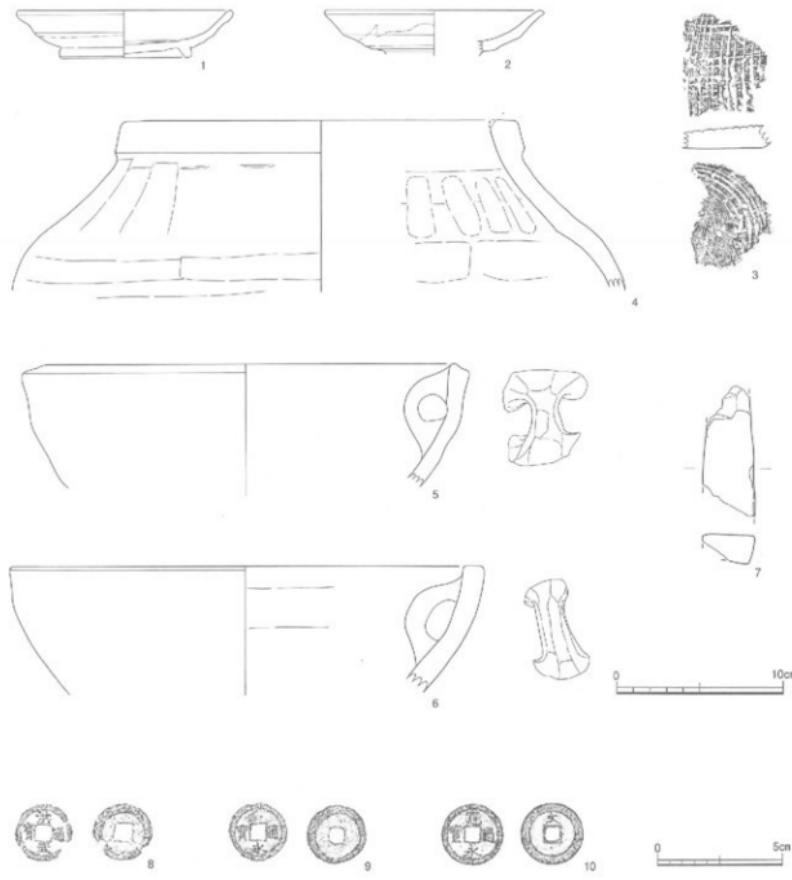
第63図 1号掘 (1)・3号掘



第64図 1号探 (2)・3号溝



第65図 1号窪 (3)



第66図 1号堀出土遺物

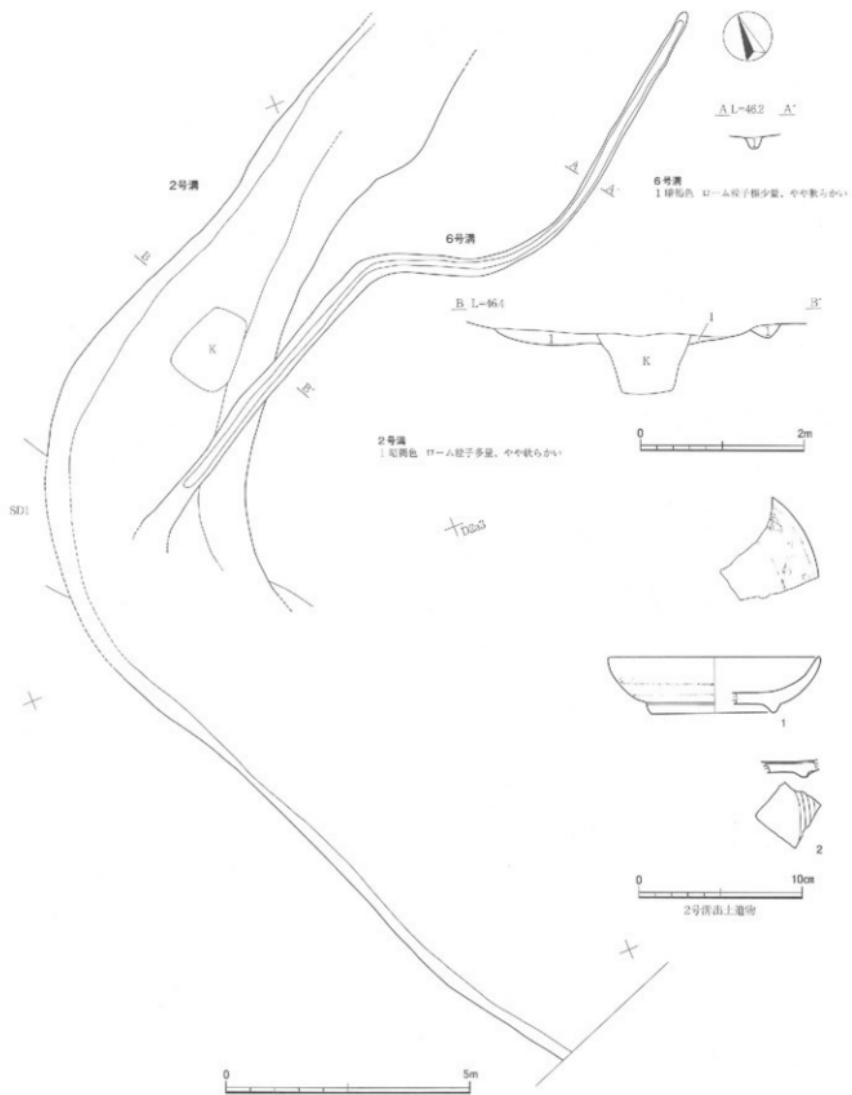
表28 1号堀出土遺物観察表

図版 番号	種別・器種	口径 容積 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	樹考
1	頸口 皿	13.3 3.0 7.9	外面中位から内面底座剥け、内面重ね焼き高台部粘 柔弱。	長石砂少量	良好	灰白色	
2	陶器 皿	(13.4) — —	外面中位から内面底座剥け。	粗良	良好	灰白色	
3	腹口 鉢皿	— — —	内面鉢口、底部外周縁部角切り板。	長石砂少量	良好	灰白色	

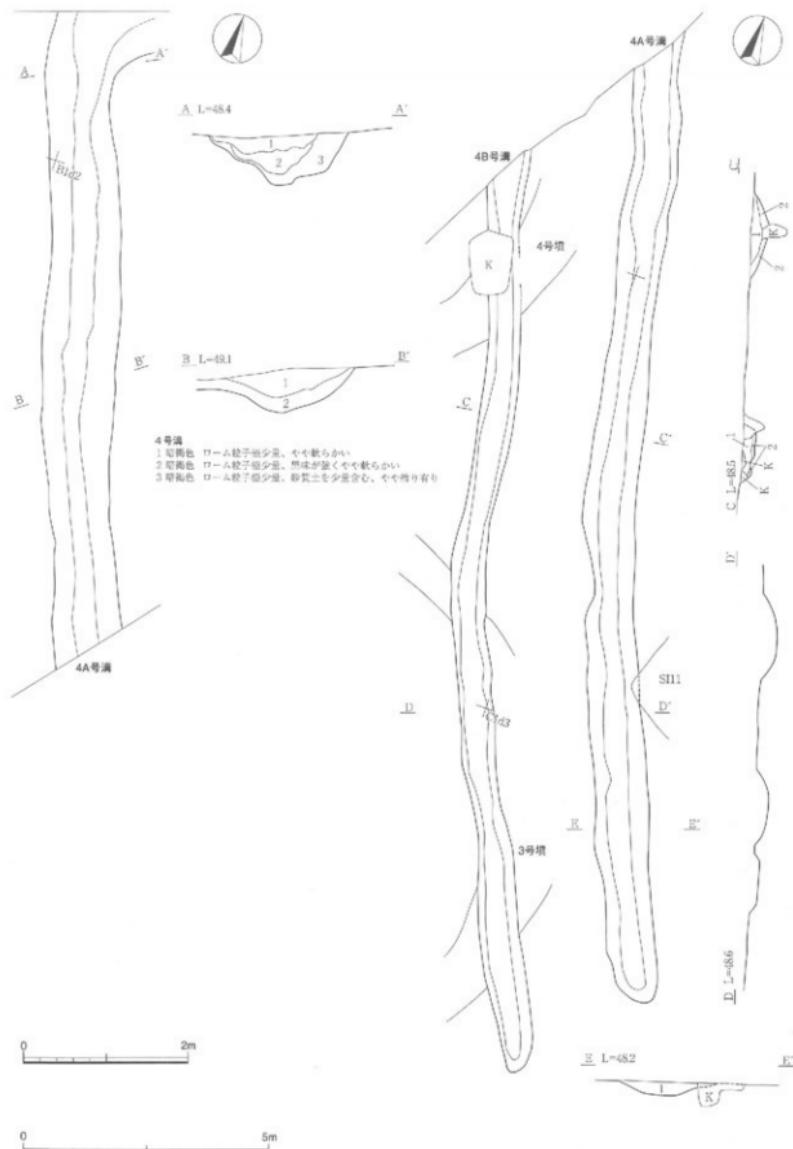
因数 番号	種別・器種	口径 等高 底径	特 徴	底土	焼成	色調	備考
4	土師質土器 広口盤	(23.5) —	口縁部内外両ヨコナデ、側部内外面ヘラナデ。	長石、石英、陶 器骨針、チャコ ト	青褐色	灰褐色	
5	土師質土器 内耳皿	(27.6) —	外面焼付帯。	長石、石英	良好	灰白色(内)、黑 色(外)	
6	土師質土器 内耳皿	(28.7) —	内外面焼付帯。	長石、石英	良好	黑色	
7	砥石	長7.9cm、幅3.1cm、厚さ1.8cm、重48.28g、海灰岩					
8	浜式通貫	外径2.24、内径0.62、厚さ0.12、重208g、1968年~					
9	荒次通貫	外径2.42、内径0.61、厚さ0.08、重1.98g					
10	窓水溝寶	外径2.53、内径0.57、厚さ0.11、重2.96g、1668年~、新寛永「文」鉢					

表29 1号塙斜面部ピット一覧表

ピット名	位 置	模様 (長径×短径×深さ)cm	備 考	ピット名	位 置	模様 (長径×短径×深さ)cm	備 考		
1号ピット	D2a2	31	20	24	38号ピット	D2a2	34	33	67
2号ピット	D2a2	30	30	48	39号ピット	D2a2	25	22	51
3号ピット	D2a2	16	15	37	40号ピット	D2a2	25	25	19
4号ピット	D2a2	37	35	42	41号ピット	D2a2	27	25	27
5号ピット	D2a2	32	31	54	42号ピット	D2a2	36	28	57
6号ピット	D2a2	19	17	34	43号ピット	D2a2	25	27	44
7号ピット	D2a2	42	23	61	44号ピット	C2d2	28	27	32
8号ピット	D2a2	23	22	28	45号ピット	C2d2	33	27	35
9号ピット	D2a2	31	33	35	46号ピット	C2d2	31	18	38
10号ピット	D2a2	17	11	26	47号ピット	D2a3	45	36	52
11号ピット	D2a2	29	24	34	48号ピット	D2a2	33	32	13
12号ピット	D2a2	43	39	28	49号ピット	D2a2	45	38	32
13号ピット	D2a2	42	24	37	50号ピット	D2a2	30	21	
14号ピット	D2a2	31	13	33	51号ピット	D2a2	15	13	
15号ピット	D2a2	39	37	45	52号ピット	C2d2	21	21	
16号ピット	D2a2	43	37	52	53~59号ピット			欠番	
17号ピット	D2a2	39	23	62	60号ピット	C2d2	21	15	10
18号ピット	D2a2	39	37	77	61号ピット	C2d2	34	24	20
19号ピット	D2a2	32	23	53	62号ピット	C2c1	34	33	47
20号ピット	D2a2	33	23	43	63号ピット	C2c1	33	32	47
21号ピット	D2a2	27	21	32	64号ピット	C2c1	19	11	31
22号ピット	D2a2	63	27	55	65号ピット	C2c1	10	8	46
23号ピット	D2a2	18	17	30	66号ピット	C2c1	23	20	41
24号ピット	C2d2	15	11	38	67号ピット	C2c1	17	12	21
25号ピット	C2d2	30	27	21	68号ピット	C2c1	45	40	31
26号ピット	C2d2	27	23	45	69号ピット	C1b3	72	37	36
27号ピット	C2d2	27	23	42	70号ピット	C2c1	27	25	39
28号ピット	C2d2	57	33	68	71号ピット	C2c1	19	13	17
29号ピット	C2d2	21	18	33	72号ピット	C1b4	32	23	48
30号ピット	C2d2	21	15	44	73号ピット	C1b4	30	23	45
31号ピット	C2d2	55	43	30	74号ピット	C2d1	26	24	1
32号ピット	D2a3	33	29	34	75号ピット	C2c1	97	73	96
33号ピット	D2a3	95	24	31	76号ピット	C2c1	13	9	1
34号ピット	D2a2	41	29	34	77号ピット	C2c1	12	8	5
35号ピット	D2a2	19	19	26	78号ピット	C1c4	17	13	3
36号ピット	D2a2	29	25	40	79号ピット	C2c1	19	18	76
37号ピット	D2a2	24	23	70					



第67図 2・6号溝



第68図 4号溝

表30 2号溝出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	肥前陶器 丸皿	129 33 76	波佐見の五寸皿。見込み二重蓋内に菊唐草文。窓台内に一意四線。	緻密	良好	灰白色	
2	陶器 皿	— — —	底部小片。白濁色の志野絞掛け。	緻密	良好	灰白色	



第69図 4号溝出土遺物

表31 4号溝出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	常滑 甕	— —	外側平行叩き、「×」文スタンプ押印。	長石輝、黒色鉄 分粒	良好	灰色	4A号溝 (北側)
2	常滑 甕	— —	外側平行叩き。	長石輝	良好	灰色	4A号溝 (北側)

盛り土遺構（第71図）

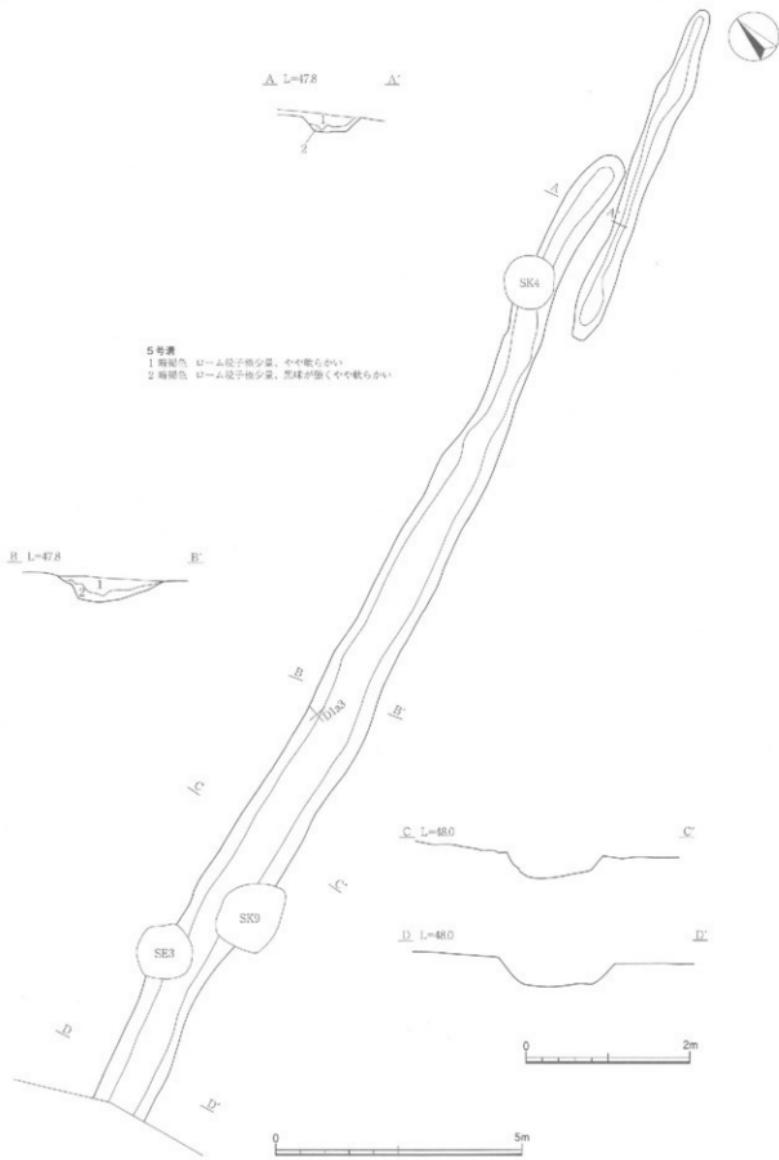
位置 調査区の東部B1d2グリッドにある。1号堀北端部の西側にある。4A号溝を埋めて盛り土がされている。

規模 南北方向12m、東西方向5.0m、高さ1.2m。東側が緩やかで、西側は堀のラインに沿うように傾斜角度がある。

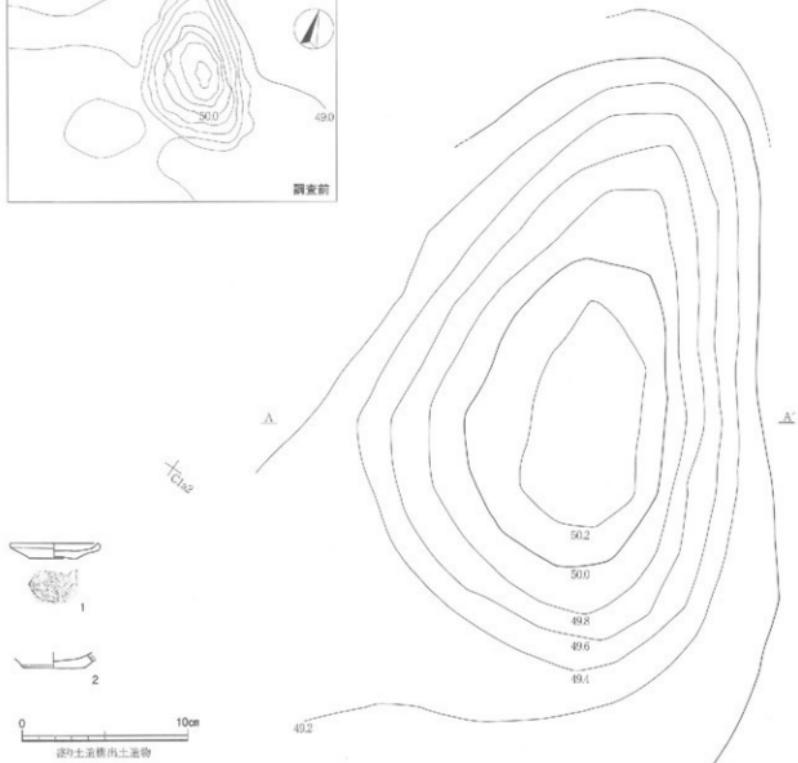
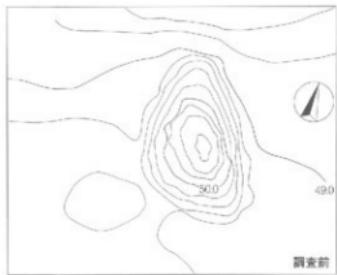
盛り土の堆積状況 表土を含めず、大きく3枚の盛り土層（1～3層）とその下に盛り土構築前の旧表土層（4層）、その下に4号溝を埋める堆積層（5・6層）がある。

出土遺物 盛り土表土層から土師質土器の小皿片が2点出土している。

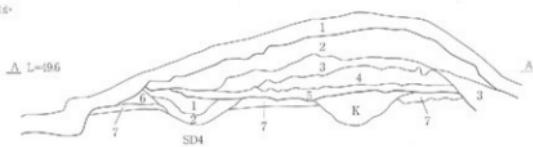
所見 1号堀の北端部にあり、堀に伴う土壠の残存とも考えられたが、表層から出土したかわらけの年代観が近世前半頃と見られる。そのため近世前半頃の盛り土遺構で、近世の時期に塚のようなものとして新たに造られたと考えられる。



第70図 5号池



- 盛り土遺構**
- 1 黄褐色 光澤層、成層性が著しく非常に數々かい
 - 2 黄色 ローム少層、軟らかい
 - 3 黄色 ローム小・中ブロック多量、やや軟らかい
 - 4 緑褐色 ローム混少量、やや硬らかい
 - 5 緑褐色 ローム混少量、やや硬りたり
 - 6 緑褐色 ローム混少量、やや硬りたり。旧灰土に相当か
 - 7 黄色 ローム原形層



第71図 盛り土遺構

表32 盛り土遺構出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師質土器 小皿	5.5 1.0 2.8	底部回転系切り。口縁部で肥厚する小形で浅身の器形。クロコ右回転。	石英	良好	にぶい褐色	
2	土師質土器 小皿	— — 3.8	内外面擦摩地。底部ヘラケズリか。	石英	良好	浅黄褐色	

第5節 遺構外遺物

縄文土器は遺構外遺物（1）の中の第72図に、その他の時期の遺物は、土器、石器、金属製品と種別毎に遺構外遺物（2）として第73図に掲載している。

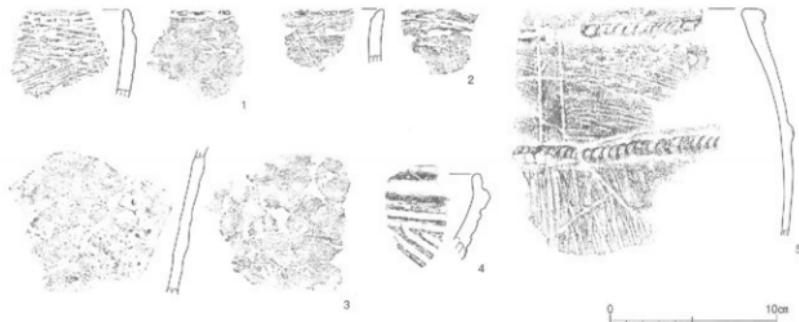
縄文土器

1～3は前期黒浜式土器で、1の口縁部は、爪形文と羽状構成の撚糸文が施されている。4は堀之内1式の口縁部、5は安行2式土器の粗製深鉢である。

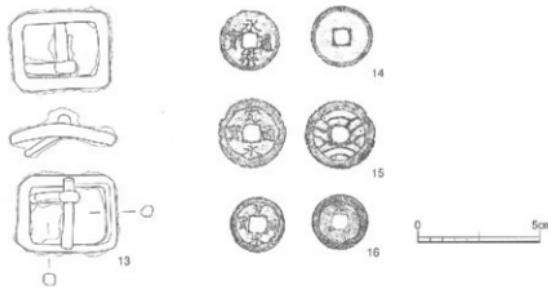
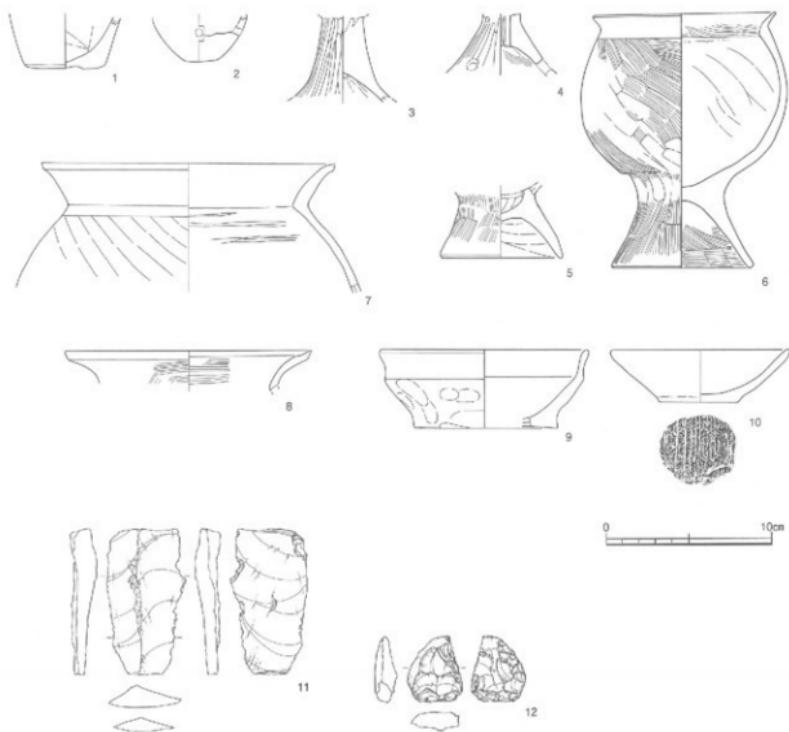
その他の時期の土器

第73図の1～8は古墳時代前期の土器、7・8の甕は口縁部に面取りを行っている。9は体部調整に指頭痕を残し、手捏ね土器の範疇に入る古墳時代後期の坏か。10は、中世のかわらけで、底部は回転系切り後板目圧痕が付く。11の瑪瑙製の削器は、2号墳の表土から出土したものである。両設打面石核から剥離した綾長剥片を素材とし、打面側と縁端部を接断し、微細な剥離痕を残す2次加工が認められる。石材や剥離技術などから旧石器時代のものと思われる。

12のチャート製の石鎌未製品は2号墳周溝覆土上層から出土したもので、縄文時代のものと考えられる。金属製品では、鉄製の鉗具が2号墳の埴丘表土から出土している。表土からは、永楽通寶、寛永通寶も出土している。



第72図 遺構外出土遺物（1）



第73図 遺構外出土遺物（2）

表33 遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	施上	焼成	色調	備考
1	土師器 ミニチュア鉢	— — 48	外同ナデ、内面ヘラナデ。	石英	良好	にぶい褐色	
2	土師器 ミニチュア壺	— — 18	脚部外面ナデ、下半部に焼成前穿孔による小孔あり。長石、石英	良好	にぶい褐色		
3	土師器 小型窯环	— — —	体部外面ミガキ、脚部は中実で脚部は強く開く。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
4	土師器 小形器台	— — —	脚部。脚部外面ミガキ・赤彩、内面ハケメ。三方	長石繩、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
5	土師器 小丸台付壺	— — 74	脚部。脚部外面ハケメ、内面ヘラナデ。腹部との接合部内面擦ナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい黄褐色	
6	土師器 小型台付壺	(11.0) 15.5 8.0	山縫部外面ヨコナデ、内面ハケメ。脚部～脚部外面ハケメ、脚部内面ヘラナデ、脚部内面ハケメ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
7	土師器 壺	(17.8) — —	山縫～脚部破片。口縫部は外反し、漏部に僅かに外輪する平坦面を持つ。口縫部外面ヨコナデ、脚部外側ヘラナデ、内面ミガキ。	石英、長石繩、海綿骨針	良好	明黄色	
8	土師器 壺	(15.0) —	口縫部破片。口縫部は強く外反し、漏部を掩込み、外側に凹取りする。山縫部内外面ハケメ。	長石	良好	褐色	
9	土師器 外	(12.8) — (8.6)	口縫部ヨコナデ。体部指ナデ、指オサエ。底部ヘラクズリ。	海綿骨針	良好	外面明黄色、内面黒褐色	
10	土師質土器 小皿	10.9 3.2 4.6	底部粗糸切り、後板目丁痕。	石英、角閃石、海綿骨針	普通	外面白褐色、内面暗灰褐色	
11	削器	及さ6.0、幅3.2、厚さ1.05、重13.7g、環底製					
12	石礫未製品	長さ27.2、幅2.25、厚さ0.89、重5.30g、チャート製					
13	鐵製足駒具	長さ4.0、幅3.15、厚さ0.85、重19.8g					
14	水梨溝賓	外径2.42、内径0.57、厚さ0.11、重2.73g、倒立文鏡、1769年～					
15	竈水溝賓	外径2.81、内径0.64、厚さ0.1、重4.926g、倒立文鏡、1769年～					
16	竈水溝賓	外径2.30、内径0.62、厚さ0.1、重2.29g、「元」字鏡、1741年～					

第V章 総括

旧石器～縄文時代の遺構は検出されなかつたが、表土からナイフ形石器、縄文土器では前期前半の黒浜式土器、後期の堀之内式土器、加曾利B式土器が出土している。

行者遺跡から確認された遺構は、住居跡は弥生時代後期1軒、古墳時代前期から古墳時代中期初め5軒、奈良・平安時代3軒、時期不明2軒である。古墳は前期が2基、後期が2基、不明1基である。土坑は古墳時代後期の可能性のあるもの1基、中近世以降のもの8基である。堀は中世1条で、堀に伴うと思われるビット53基が確認されている。溝は中・近世5条、井戸は近世3基である。

弥生時代後期の1号住居跡からは、十手台式土器と炭化した椎の実が出土している。

古墳時代前期には、径約12mの規模の小円墳が少なくとも2～3基、遺跡の西寄りに造られている。同じころ竪穴住居からなる集落も始まり、古墳が南北方向に並び、その東側の空間に集落が展開している。

古墳時代前期～中期初め頃の集落の住居跡では、一辺8.5mの大型住居（10号住）があり、この地域の最大規模の住居跡と思われる。この他の住居跡は、主柱を竪穴床面に立てない簡易な構造の住居である。出土遺物は土師器、土製品、鉄製品があり、ほとんど住居跡からの出土である。前期古墳の周溝内から、土師器の壺と壺が出土しているが、集落からの廐棄土器かと思われる。古墳時代中期初め頃の3号住居跡では、覆土上層から短冊型鉄斧とヤリガンナ片が出土している。短冊型鉄斧は古墳の埋葬施設から発見される例が多く、竪穴住居跡から出土した例は非常に珍しい。

古墳時代中期から後期の初めにかけては、遺物も遺構もほとんど見られない。古墳時代前期の11号住居跡は、廐棄後埋め戻されることなく放置され、自然埋没し塗地の状態であったようである。そこに須恵器の中型壺が細片化して廐棄されている。須恵壺は、6世紀頃のものと見られる。

6世紀前半になると、遺跡の東側に埴輪を伴う埴丘直径20m弱の円墳2基が造られる。先に造られたのは2号墳で、赤褐色を呈する2条3段の円筒埴輪を樹立していた。続いて築造された1号墳は前方後円墳である可能性も否定できない。周濠底から土師器壺がほぼ完形で出土している。埴輪は3条4段の円筒埴輪のほか、形象埴輪（人物・馬形）が見つかっている。これら2基の古墳は、同じ丘陵に占地する高寺古墳群の一部を構成すると考えてよく、時期的には先行するものである。古墳から少し離れた北東側斜面の肩部付近に小型の土坑があり、ここから馬形埴輪片が2片出土している。

奈良・平安時代の住居跡は、9世紀前葉頃、9世紀後葉頃、10世紀前葉頃のものが1軒ずつあり、同じ時期の集落は北側の谷を挟んだ寺上遺跡に集中して在るので、集落としては寺上遺跡の集落の周縁部に当たるのかもしれない。奈良・平安時代の出土遺物では、5号住居の須恵器の盤に『刀良』と読める墨書き文字が記されており人物名と思われる。

その後、中世には地下式坑が1基つくられ、台地中央には、台地を東西に分断する、薬研堀が掘削されている。地下式坑は主室が複室構造で方形と扇形の平面形に特徴がある。薬研堀は、底面が狭小で16世紀頃の掘削と考えられ、堀底から洪武通寶が出土している。堀は17世紀には埋め戻されていることが瀬戸・美濃皿等の出土遺物から判明している。戦国時代地域の中核となっていた小原城との関連が考えられる遺構となるものと思われる。

写 真 図 版



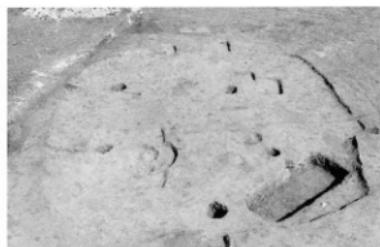
北部全景（北から）



南部全景（西から）



1号住居跡



2号住居跡



2号住居跡遺物出土状況



2号住居跡出土遺物



3号住居跡遺物出土状況



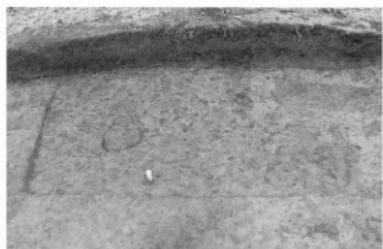
3号住居跡遺物出土状況（短冊形鉄斧）



3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡掘り方



4号住居跡



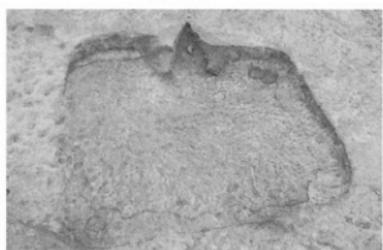
5号住居跡



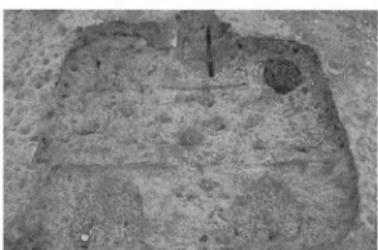
5号住居跡カマド



6号住居跡遺物出土状況



7号住居跡



7号住居跡掘り方



8号住居跡



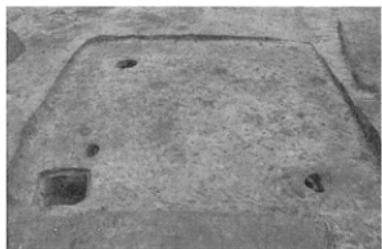
10号住居跡



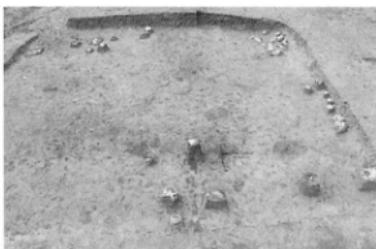
10号住居跡炉



10号住居跡貯藏穴



11号住居跡



11号住居跡遺物出土状況



11号住居跡遺物出土状況



11号住居跡貯藏穴



11号住居跡貯藏穴遺物出土状況



11号住居跡掘り方



1号墳調査前の状況



1号墳埴丘断面



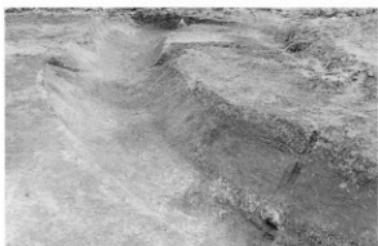
1号墳完掘状況



1号墳盛り土土層及び下層整地層面の状況



1号墳周溝西側（南から）



1号墳周溝北側（西から）



周溝西側遺物出土状況



周溝西側底面遺物出土状況



周溝西側遺物出土状況



周溝西側遺物出土状況



周溝内側墳丘肩部遺物出土状況



2号墳完掘状況



2号墳周溝円筒埴輪出土状況



2号墳周溝円筒埴輪出土状況



3号墳



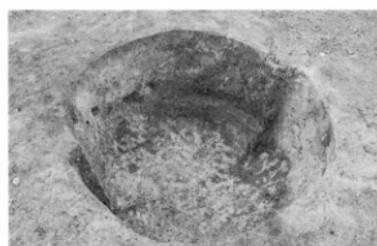
3号墳出土遺物



5号墳



1号土坑遺物出土状況



4号土坑



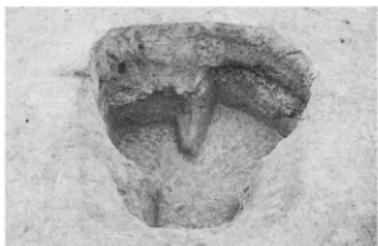
1号井戸



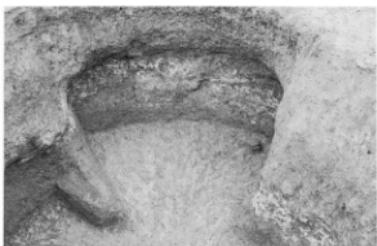
2号井戸



3号井戸



1号地下式坑



1号地下式坑主室2



1号地下式坑主室1



1号堀全景（北から）



1号堀南部全景（北から）



1号堀南部斜面のピット群（西から）



1号堀北端部（北から）



盛り土遺構（西から）



SI 2-1



SI 2-11



SI 3-2



SI 3-7



SI 3-9



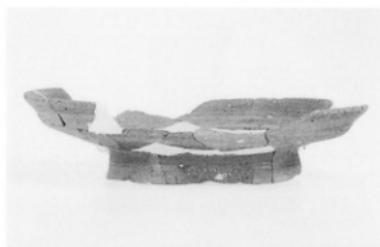
SI 3-11, 12, 13



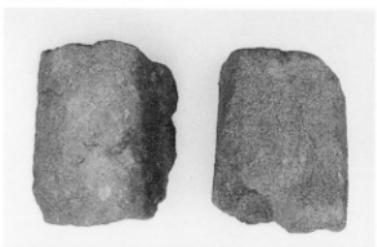
SI 5-1



SI 5-4



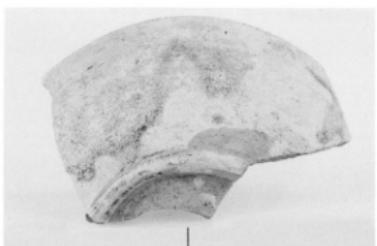
SI 5-5



SI 6-6, 7



SI 7-1



SI 7-10



SI 10-4



SI 10-11



SI 10-9



SI 11-2



SI 11-4



SI 11-5



SI 11-15



SI 11-25



SI 11-26



SI 11-29



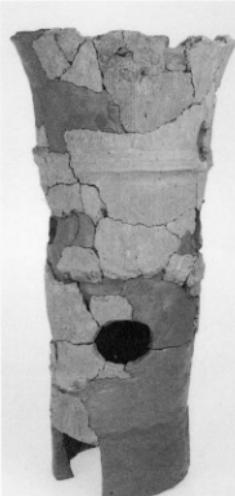
SI 11-26, 29, 27



1号埴埴輪 10



1号埴埴輪 11



1号埴埴輪 14



1号埴埴輪 6



1号埴埴輪 7



1号埴埴輪 16



1号墳埴輪 21



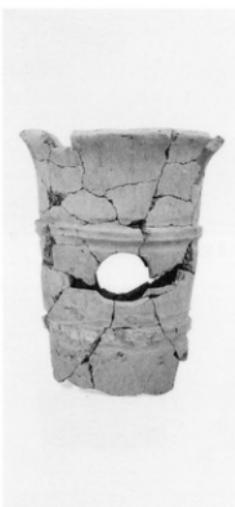
1号墳埴輪 29



1号墳埴輪 2



1号墳埴輪 5



1号墳埴輪 17



1号墳埴輪 19



1号墳埴輪 20



1号埴埴輪 49



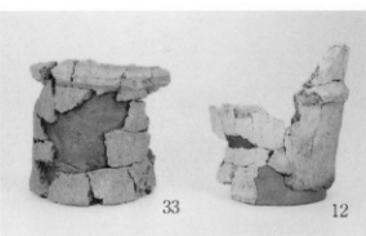
1号埴埴輪 4



1号埴埴輪 15



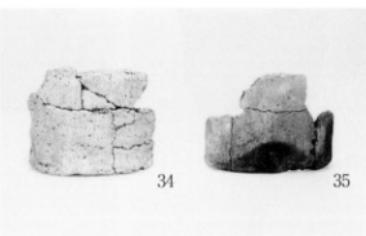
1号埴埴輪 50



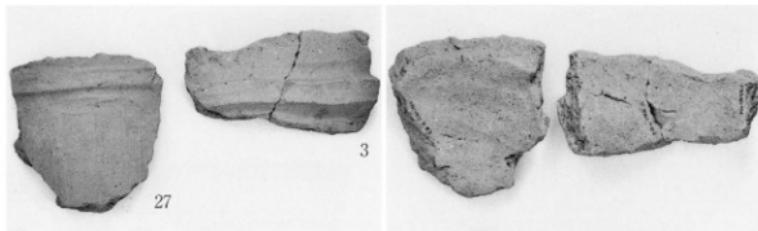
1号埴埴輪 33·12



1号埴埴輪 28



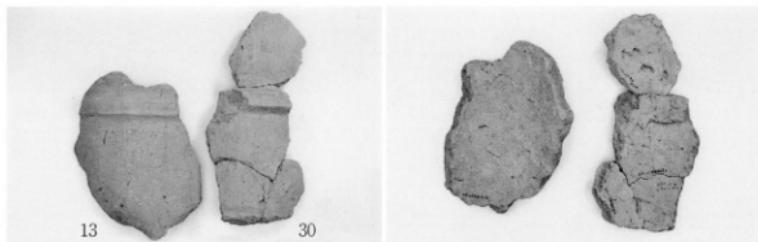
1号埴埴輪 34·35



1号墳埴輪 3・27 (外面)



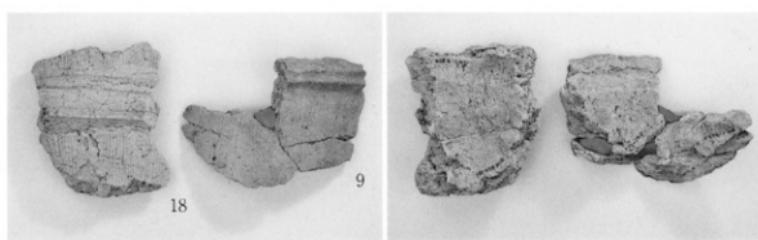
1号墳埴輪 3・27 (内面)



1号墳埴輪 13・30 (外面)



1号墳埴輪 13・30 (内面)



1号墳埴輪 9・18 (外面)



1号墳埴輪 9・18 (内面)



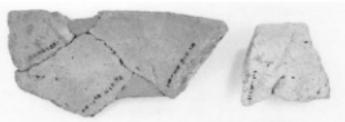
1号墳埴輪 26 (外面)



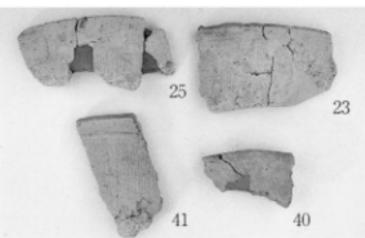
1号墳埴輪 26 (内面)



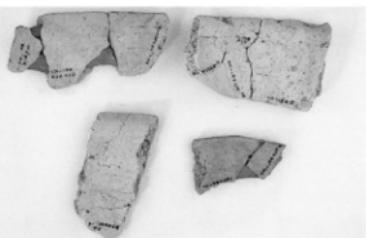
1号埴埴輪 22・24・42・43（外面）



1号埴埴輪 22・24・42・43（内面）



1号埴埴輪 23・25・40・41（外面）



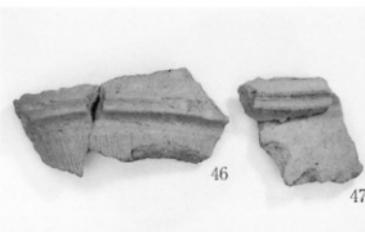
1号埴埴輪 23・25・40・41（内面）



1号埴埴輪 44・45（外面）



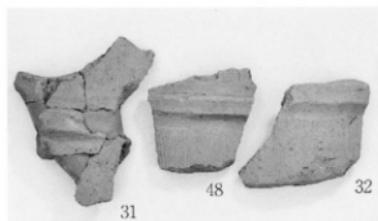
1号埴埴輪 44・45（内面）



1号埴埴輪 46・47（外面）



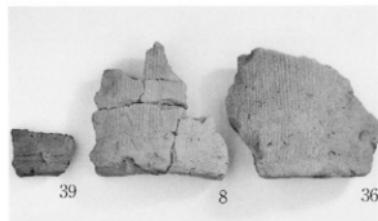
1号埴埴輪 46・47（内面）



1号埴埴輪 31・32・48(外面)



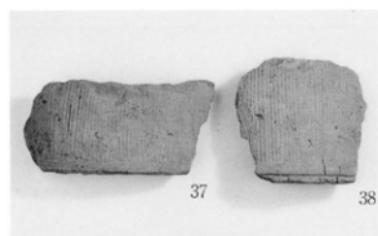
1号埴埴輪 31・32・48(内面)



1号埴埴輪 8・36・39(外面)



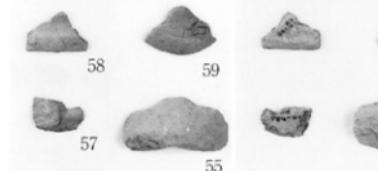
1号埴埴輪 8・36・39(内面)



1号埴埴輪 37・38(外面)

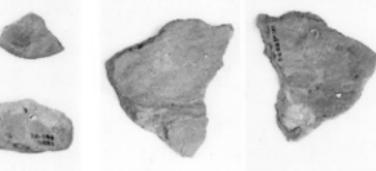


1号埴埴輪 37・38(内面)



(外面)

1号埴埴輪 55・57・58・59



(外面)

(内面)

1号埴埴輪 68



1号埴埴輪 51 (外面)



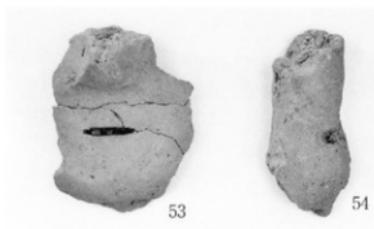
1号埴埴輪 51 (内面)



1号埴埴輪 52 (外面)



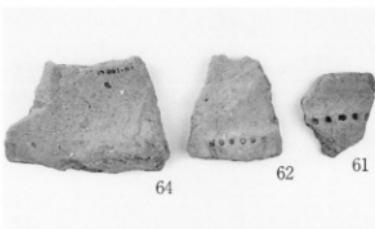
1号埴埴輪 52 (内面)



1号埴埴輪 53・54 (外面)



1号埴埴輪 53・54 (内面)



1号埴埴輪 61・62・64（外面）



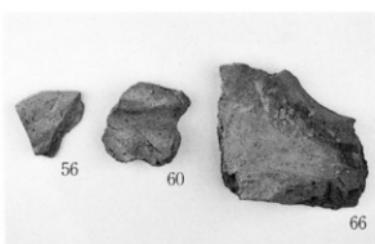
1号埴埴輪 61・62・64（内面）



1号埴埴輪 65（外面）



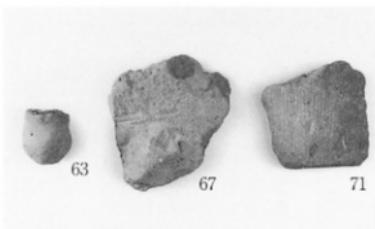
1号埴埴輪 65（内面）



1号埴埴輪 56・60・66（外面）



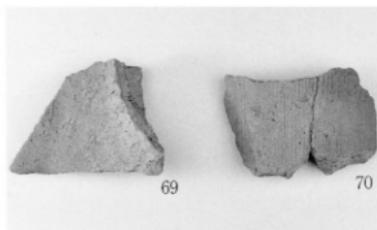
1号埴埴輪 56・60・66（内面）



1号埴埴輪 63・67・71（外面）



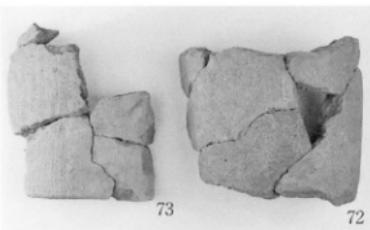
1号埴埴輪 63・67・71（内面）



1号埴埴輪 69・70(外面)



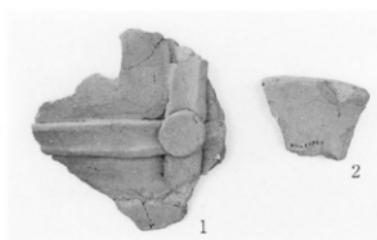
1号埴埴輪 69・70(内面)



1号埴埴輪 72・73(外面)



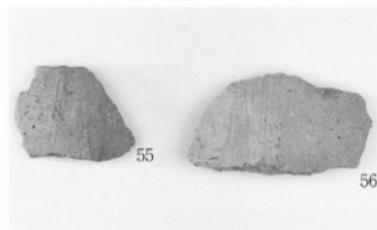
1号埴埴輪 72・73(内面)



1号土坑埴埴輪 1・2(外面)



1号土坑埴埴輪 1・2(内面)



2号埴埴輪 55・56(外面)



2号埴埴輪 55・56(内面)



2号墳埴輪 3



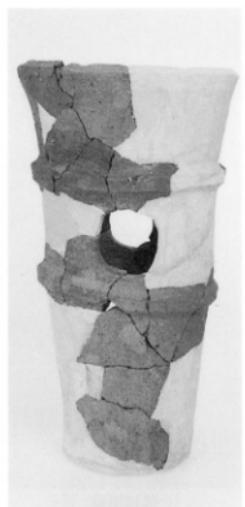
2号墳埴輪 4



2号墳埴輪 5



2号墳埴輪 7



2号墳埴輪 8



2号墳埴輪 11



2号墳埴輪 12



2号墳埴輪 15



2号墳埴輪 16



2号墳埴輪 6



2号墳埴輪 9



2号墳埴輪 13



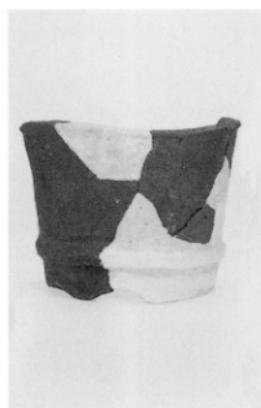
2号埴埴輪 17



2号埴埴輪 14



2号埴埴輪 18



2号埴埴輪 20



2号埴埴輪 14



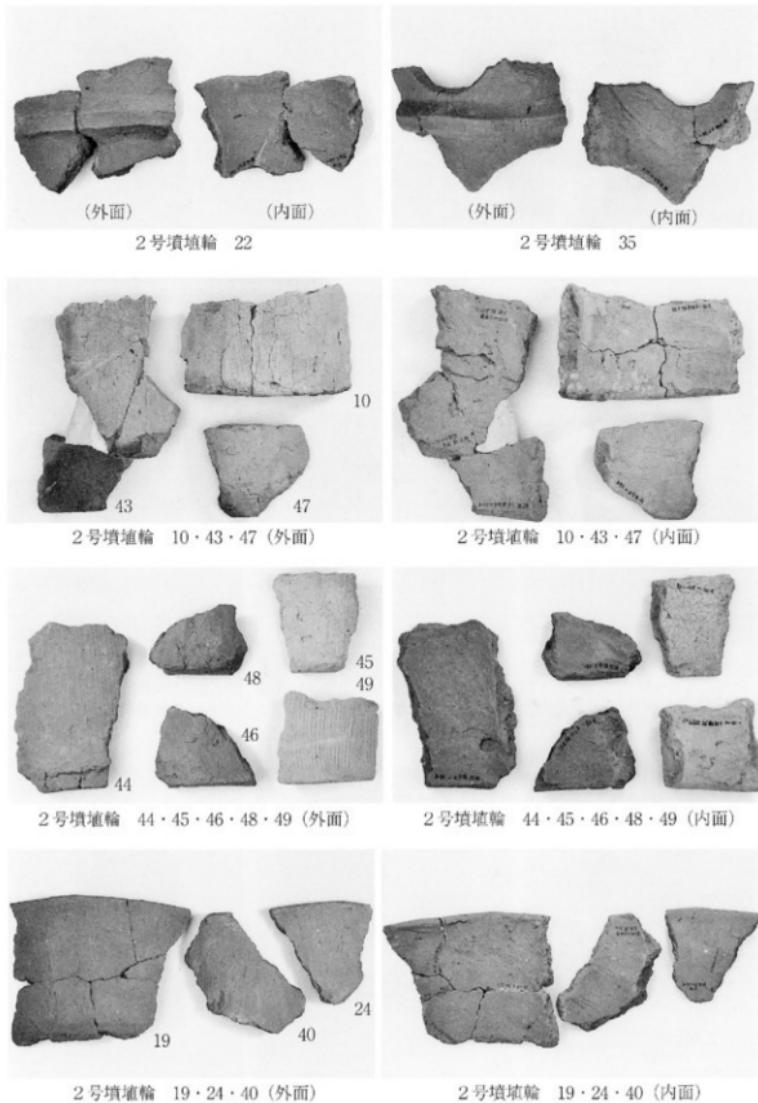
2号埴埴輪 18

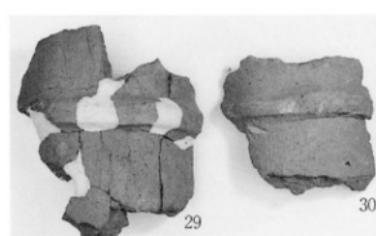
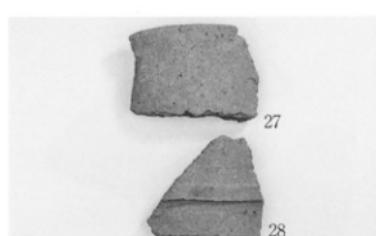
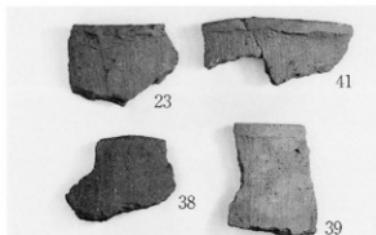


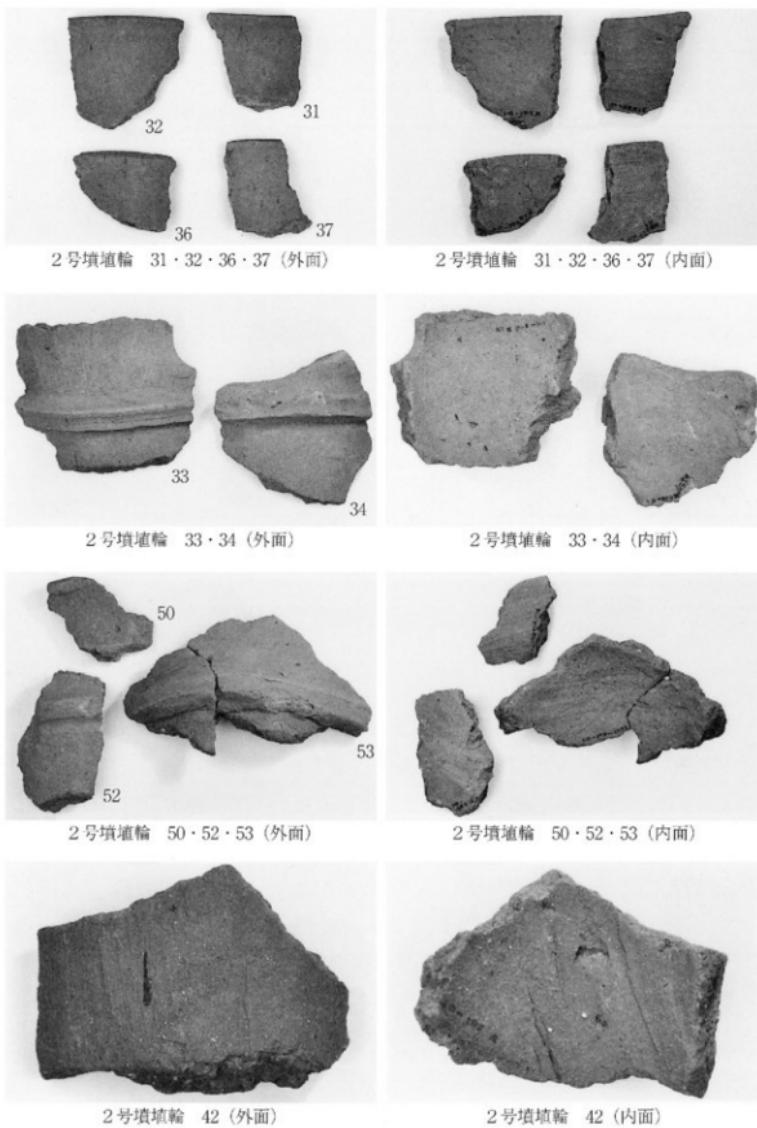
2号埴埴輪 2



2号埴埴輪 21

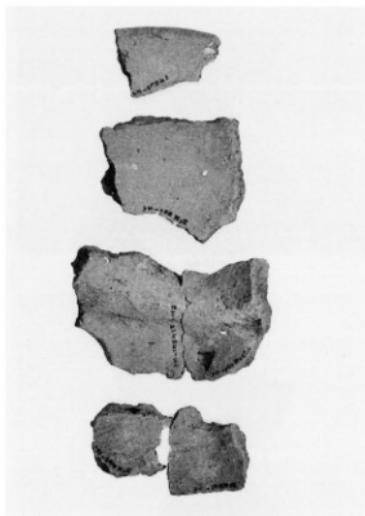








2号墳埴輪 51 (外面)



2号墳埴輪 51 (内面)



2号墳埴輪 54 (外面)



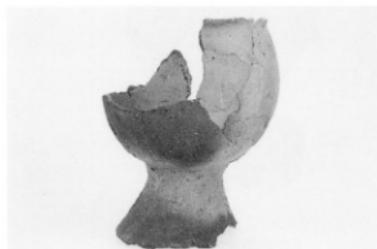
2号墳埴輪 54 (内面)



3号墳-4



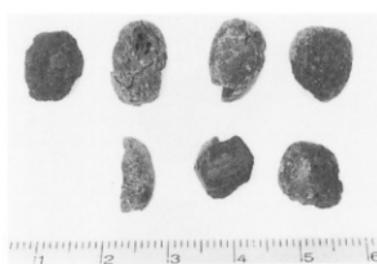
1号壺-1



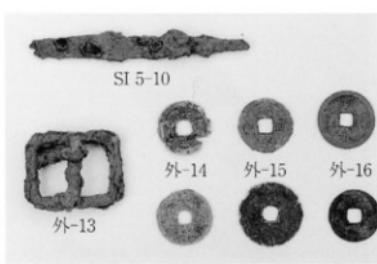
外-6



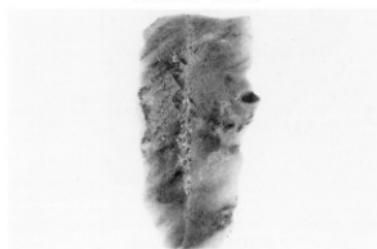
外-10



炭化種子 (SI 3)



金属製品



外-11



表採石器

報告書抄録

ふりがな	ぎょうじゅいせき
書名	行者遺跡
副書名	県當煙地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書
シリーズ番号	
著者名	土生則治、賀来孝代
編集機関	(有)毛野考古学研究所
所在地	〒304-0062 茨城県下妻市下妻戊202-4
発行機関	笠間市教育委員会
所在地	茨城県笠間市石井717番地
発行年月日	2011(平成23)年3月15日

所収遺跡	所在場	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
行者遺跡	笠間市小原 2299番地外	06-321-093	36°23'49"	139°52'44"	2009.11.30 ~ 2010.03.25	4,683m ²	県當煙地帯総合整備事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
行者遺跡	集落跡 古墳	弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 時期不明 中・近世	竪穴住居跡1軒 竪穴住居跡5軒 古墳5基 竪穴住居跡3軒 竪穴住居跡2軒 堀1条 溝5条 井戸3基 ピット72基	弥生上器(壺、高环) 土師器(壺、壺、壺、高环) 埴輪(円筒、人物、馬形) 須恵器(壺、盤、高环)	5世紀初め頃の竪穴住居跡の覆土中から劍韁形鍬斧・ヤリガンナが出土している。6世紀前半の古墳からは、円筒埴輪や馬形埴輪、人物埴輪が出土している。

要約	行者遺跡は、弥生時代後期、古墳時代前期～中期初め頃、奈良・平安時代の各時代の集落跡と古墳時代前期、後期の古墳と中世の製塩跡等からなる。前期の古墳は最大径約16mの浅い周溝のみ確認されている3基の古墳からなる。後期の古墳は埴丘直径約16～19mの円墳2基で円筒埴輪や形象埴輪が出土している。中世の時期の遺構は、台地を横断して延びる築堤掘りの遺跡と地下水式坑からなる。
----	--

茨城県笠間市

行者遺跡

印刷 平成23年3月10日

発行 平成23年3月15日

編集 有限会社 毛野考古学研究所

〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1

電話 027-265-1804 FAX 027-265-5352

発行 笠間市教育委員会

〒309-1698 茨城県笠間市石井717番地

電話 0296-77-1101

有限会社 毛野考古学研究所

印刷 株式会社 ライフ

〒286-0134 千葉県成田市東和田595

電話 0476-24-1564 FAX 0476-24-2226

